埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 470 集

嵐　山　町

油 面 遺 跡

２嵐山－14 号　油面遺跡報告書作成業務委託
埋蔵文化財発掘調査報告

２０２１

埼　玉　県
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

圏央道の埼玉県・茨城県区間全線開通により、県内を走る関越道や東北道を含め、東京から放射状に延びる東名高速から東関東道までの区間が圏央道で結ばれました。この開通効果により、各高速道路インターチェンジ周辺への企業立地ニーズが高まっています。そのため、埼玉県では、平成２９年に「第３次田園都市産業ゾーン基本方針」を定め、圏央道以北地域においても、産業基盤づくりを積極的に進めています。関越自動車道嵐山小川インターチェンジから約８００ｍに位置する嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業もその一環として行われたものです。油面遺跡の発掘調査は、同事業に伴う事前調査として、埼玉県企業局の委託を受け、当事業団が実施しました。

調査対象の油面遺跡は馬の背状の尾根の上で、平坦部はわずかしかありませんが、縄文時代前期の集落跡や、平安時代の住居跡が発見されました。住居跡からは、糸をつむぐための紡錘車や木製品の加工具の袋状鉄斧なども発見され、丘陵での人々の暮らしぶりを彷彿させます。また、炭焼窯跡も発見され、人々が木材の伐採や製材、木炭生産など水田耕作に不向きな丘陵地の開発を積極的に進めたことがうかがわれます。今回の調査結果は、周辺の発掘調査と同様の傾向を示しており、各時代における丘陵地の利用の様相が追認されました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県企業局、嵐山町教育委員会、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　藤　田　栄　二

例　言

1　本書は比企郡嵐山町大字勝田地内に所在する油面遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

油面遺跡（№36－198）

比企郡嵐山町大字勝田468－１他

平成31年４月22日付け教生文第２－４号

3　発掘調査は、嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成31年度）

「30嵐山－６号　油面遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」

整理・報告書作成事業（令和２年度）

「２嵐山－14号　油面遺跡報告書作成業務委託」

5　発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成31年４月１日から令和元年９月30日まで実施し、富田和夫、桑原安須美、砂生智江、片山祐介が担当した。

整理報告書作成事業は、令和２年10月１日から令和３年３月30日まで、砂生が担当し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集として印刷・刊行した。

6　発掘調査における基準点測量は株式会社ソレイユに、空中写真撮影は中央航業株式会社に委託した。

7　発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は砂生が行った。

8　出土品の整理・図版作成は上野真由美、金子直行、滝瀬芳之、水村雄功の協力を得て砂生が行った。

9　本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が、縄文時代の土器を金子が、縄文時代の石器を上野が、近世の石製品を水村が、金属製品を瀧瀬が、その他を砂生が行った。

10　本書の編集は砂生が行った。

11　本書にかかる諸資料は令和３年４月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12　発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

嵐山町教育委員会

凡　例

1　油面遺跡におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°　00′　00″、東経139°　50′　00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

　Ｄ－７グリッド北西杭の座標は、Ｘ＝8220.000m、Ｙ＝－45840.000m、北緯36°　04′　22.82846″、東経139°　19′　27.86302″である。

2　調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3　グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、西から東方向に数字（１・２・３…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばＡ－１グリッド等と呼称した。

4　本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ　竪穴住居跡　SC　集石土壙　SK　土壙
FP　焼土跡　SF　炭焼窯跡　SD　溝跡
SO　道路跡　P　ピット・柱穴

5　本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を使用した。

6　本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図　１:1300
区割図　1:250
遺構図
住居跡・集石土壙・土壙・溝跡・
ピット・焼土跡・炭焼窯跡　1:60
道路跡　１:80
遺物実測図
土師器・須恵器　１:４
拓影図・断面図　１:３
石器　　１:３
土製品　１:３
鉄製品　１:３

7　遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
須恵器（断面黒塗り）

8　遺構断面図に表記した水準数値は、全て海抜標高（単位m）を表す。

9　遺構一覧表の表記は以下のとおりである。
・長さ・幅・深さ・短径・長径はm単位である。

10　遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
・大きさはcm・重さはｇ単位である。
・（　）内の数値は推定値を示す。
・〔　〕内の数値は残存地を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
A:雲母　B:片岩　C:角閃石　D:長石
E:石英　F:軽石　G:砂粒子　H:赤色粒子
I:白色粒子　J:針状物質　K:黒色粒子
L:その他
・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
・焼成は、良好・普通・不良の３段階に分けて示した。
・色調は『新版標準土色帖』に従った。
・備考には、注記№・生産地・年代等を示した。
・土器・陶磁器の生産地については、胎土によって判断した。

11　本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000地形図（熊谷）を編集・使用した。

遺構名新旧対応表

グリッド	新	旧
Ｐ－12	ＳＪ２　Ｐ１	Ｐ95
Ｐ－12	ＳＪ２　Ｐ２	Ｐ37
Ｑ－12	ＳＪ２　Ｐ３	Ｐ21
Ｐ－12	ＳＪ２　Ｐ４	Ｐ84
Ｐ－12	ＳＪ５　Ｐ１	Ｐ146
Ｐ－12	ＳＪ５　Ｐ２	Ｐ144
Ｐ－12	ＳＪ５　Ｐ３	Ｐ139
Ｐ－12	ＳＪ５　Ｐ４	Ｐ149
Ｅ－６	ＳＦ28	ＳＸ２
Ｔ－９	Ｐ166	ＳＪ１　Ｐ２
Ｔ－９	Ｐ167	ＳＪ１　Ｐ３
Ｔ－９	Ｐ168	ＳＪ１　Ｐ４
Ｔ－９	Ｐ169	ＳＪ１　Ｐ５
Ｔ－９	Ｐ170	ＳＪ１　Ｐ６
Ｔ－９	Ｐ171	新規
Ｔ－９	Ｐ172	新規
Ｓ－９	Ｐ173	ＳＦ－Ｐ１
Ｓ－９	Ｐ174	ＳＦ－Ｐ２
Ｓ－９	Ｐ175	ＳＦ－Ｐ３
Ｏ－12	欠番	ＦＰ10
Ｆ－12	欠番	ＳＸ１

Ａ区

グリッド	新	旧
Ｃ－４	Ｐ1015と同一	Ｐ1016
Ｄ－３	Ｐ1033と同一	Ｐ1034
Ｄ－５	Ｐ1096と同一	Ｐ1097

Ｂ区

グリッド	新	旧
Ｔ・Ｕ－９	Ｐ170	新規
Ｔ－９	Ｐ171	新規
Ｒ－12	欠番	Ｐ12
Ｑ－12	欠番	Ｐ16
Ｑ－12	欠番	Ｐ28
Ｑ－12	欠番	Ｐ31
Ｑ－12	欠番	Ｐ32
Ｓ－11	欠番	Ｐ44
Ｒ－11	欠番	Ｐ46
Ｓ－11	欠番	Ｐ51
Ｓ－11	欠番	Ｐ54
Ｒ－12	欠番	Ｐ57
Ｓ－11	欠番	Ｐ60
Ｒ－11	欠番	Ｐ66
Ｒ－11	欠番	Ｐ67
Ｒ－11	欠番	Ｐ71
Ｒ－11	欠番	Ｐ72
Ｒ－11	欠番	Ｐ73
Ｒ－11	欠番	Ｐ74
Ｒ－11	欠番	Ｐ75
Ｐ－13	欠番	Ｐ85
Ｒ－12	欠番	Ｐ93
Ｒ－12	欠番	Ｐ100
Ｓ－12	欠番	Ｐ111
Ｓ－11	欠番	Ｐ115
Ｏ－13	欠番	Ｐ128
Ｐ－12	欠番	Ｐ135

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 ･････････････････････ 1
　1　発掘調査に至る経過 ･････････････････ 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過････････････ 2
　　（1）発掘調査 ･････････････････････ 2
　　（2）整理・報告書の作成････････････････ 2
　3　発掘調査・報告書作成の組織････････････ 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ･････････････････････ 4
　1　地理的環境 ･････････････････････････ 4
　2　歴史的環境 ･････････････････････････ 5
Ⅲ　遺跡の概要 ･････････････････････････ 9
Ⅳ　遺構と遺物 ･････････････････････････ 20
　1　縄文時代の遺構と遺物･･････････････････ 20
　　（1）住居跡 ･････････････････････････ 20
　　（2）集石土壙 ･･･････････････････････ 28
　　（3）土壙 ･･･････････････････････････ 30
　　（4）焼土跡 ･････････････････････････ 33
　　（5）遺物包含層 ･････････････････････ 39
　2　古代の遺構と遺物 ･･････････････････ 58
　　（1）住居跡 ･････････････････････････ 58
　　（2）炭焼窯跡 ･･･････････････････････ 61
　　（3）土壙 ･･･････････････････････････ 65
　　（4）グリッド出土遺物･･････････････････ 65
　3　中・近世の遺構と遺物･･････････････････ 66
　　（1）溝跡 ･･･････････････････････････ 66
　　（2）道路跡 ･････････････････････････ 66
　　（3）ピット ･････････････････････････ 70
　　（4）グリッド出土遺物･･････････････････ 84
Ⅴ　自然科学分析 ･･･････････････････････ 85
　1　出土炭化材の樹種同定（1）･････････････ 85
　2　出土炭化材の樹種同定（2）･････････････ 89
　3　放射性炭素年代測定（1）･･･････････････ 91
　4　放射性炭素年代測定（2）･･･････････････ 93
Ⅵ　調査のまとめ ･･･････････････････････ 96
写真図版

挿図目次

第１図　埼玉県の地形 …… 4
第２図　周辺の遺跡（縄文・弥生時代）…… 6
第３図　周辺の遺跡（古墳時代～近世）…… 7
第４図　基本層序 …… 10
第５図　全体図 …… 11
第６図　区割図（１）…… 12
第７図　区割図（２）…… 13
第８図　区割図（３）…… 14
第９図　区割図（４）…… 15
第10図　区割図（５）…… 16
第11図　区割図（６）…… 17
第12図　区割図（７）…… 18
第13図　区割図（８）…… 19
第14図　第２号住居跡 …… 20
第15図　第３号住居跡 …… 21
第16図　第３号住居跡遺物出土状況…… 22
第17図　第３号住居跡出土遺物…… 23
第18図　第４号住居跡 …… 24
第19図　第４号住居跡遺物出土状況…… 25
第20図　第４号住居跡出土遺物（１）…… 25
第21図　第４号住居跡出土遺物（２）…… 26
第22図　第５号住居跡 …… 27
第23図　第１号集石土壙 …… 28
第24図　第１号集石土壙出土遺物…… 29
第25図　土壙…… 31
第26図　土壙出土遺物 …… 32
第27図　焼土跡（１）…… 34
第28図　焼土跡（２）…… 35
第29図　焼土跡（３）…… 36
第30図　焼土跡出土遺物 …… 38
第31図　Ａ区遺物包含層遺物出土状況…… 40
第32図　Ｂ区遺物包含層遺物出土状況…… 41
第33図　Ａ区遺物包含層出土遺物（１）…… 42
第34図　Ａ区遺物包含層出土遺物（２）…… 43
第35図　Ａ区遺物包含層出土遺物（３）…… 44
第36図　Ａ区遺物包含層出土遺物（４）…… 44
第37図　Ａ区遺物包含層出土遺物（５）…… 45
第38図　Ａ区遺物包含層出土遺物（６）…… 46
第39図　Ａ区遺物包含層出土遺物（７）…… 47
第40図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（１）…… 50
第41図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（２）…… 51
第42図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（３）…… 52
第43図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（４）…… 53
第44図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（５）…… 54
第45図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（６）…… 55
第46図　第１号住居跡 …… 58
第47図　第１号住居跡遺物出土状況…… 59
第48図　第１号住居跡出土遺物…… 60
第49図　第１号炭焼窯跡 …… 62
第50図　第２号炭焼窯跡（１）…… 63
第51図　第２号炭焼窯跡（２）…… 64
第52図　土壙…… 65
第53図　グリッド出土遺物 …… 65
第54図　第１・２号溝跡 …… 67
第55図　第３号溝跡 …… 68
第56図　道路跡位置図 …… 69
第57図　Ａ区ピット（１）…… 71
第58図　Ａ区ピット（２）…… 72
第59図　Ａ区ピット（３）…… 73
第60図　Ａ区ピット（４）…… 74
第61図　Ａ区ピット（５）…… 75
第62図　Ｂ区ピット（１）…… 76
第63図　Ｂ区ピット（２）…… 77
第64図　Ｂ区ピット（３）…… 78
第65図　Ｂ区ピット（４）…… 79
第66図　Ｂ区ピット（５）…… 80
第67図　Ｂ区ピット（６）…… 81
第68図　ピット出土遺物 …… 83

第69図　グリッド出土遺物 ･････････････････ 84
第70図　炭化材の走査型
電子顕微鏡写真（１）････ 87
第71図　炭化材の走査型
電子顕微鏡写真（２）････ 88
第72図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真･････ 90
第73図　暦年較正結果 ･････････････････････ 93
第74図　暦年較正結果 ･････････････････････ 95
第75図　油面遺跡と周辺の遺跡の立地･･････････ 96
第76図　油面遺跡と周辺の
遺跡の住居跡等位置分布･････････ 97

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧 ･････････････････････ 8
第２表　第３号住居跡出土石器観察表･･････････ 23
第３表　第４号住居跡出土石器観察表･･････････ 26
第４表　集石土壙出土石器観察表･･････････････ 29
第５表　土壙一覧表 ･････････････････････････ 31
第６表　土壙出土石器観察表･･････････････････ 32
第７表　焼土跡一覧表 ･･･････････････････････ 38
第８表　Ａ区遺物包含層出土石器観察表･････････ 48
第９表　Ｂ区遺物包含層出土石器観察表･････････ 56
第10表　第１号住居跡出土遺物観察表･･････････ 61
第11表　土壙一覧表 ･････････････････････････ 65
第12表　グリッド出土遺物観察表･･････････････ 65
第13表　溝跡一覧表 ･････････････････････････ 68
第14表　Ａ区ピット一覧表 ･･･････････････････ 82
第15表　Ｂ区ピット一覧表 ･･･････････････････ 82
第16表　Ａ区ピット出土石器観察表･････････････ 84
第17表　グリッド出土遺物観察表･･････････････ 84
第18表　樹種同定一覧 ･･･････････････････････ 85
第19表　炭化材の樹種同定結果一覧･････････････ 86
第20表　測定試料および処理 ･････････････････ 91
第21表　放射性炭素年代測定
および暦年較正の結果･･････････ 92
第22表　測定試料および処理 ･････････････････ 94
第23表　放射性炭素年代測定
および暦年較正の結果･･････････ 94

写真図版

図版１　１　調査区全景（南から）
図版２　１　調査区全景（垂直）
２　調査区遠景（南西から）
図版３　１　西尾根遠景（南東から）
２　南尾根遠景（上から）
図版４　１　第２・５号住居跡
２　第２号住居跡炉跡
３　第２号住居跡炉跡断面
４　第５号住居跡炉跡
５　第５号住居跡炉跡断面
図版５　１　第３号住居跡
２　第４号住居跡
図版６　１　第１号集石土壙検出状況
２　第１号集石土壙
３　第１号焼土跡
４　第１号焼土跡断面
５　第２号焼土跡
６　第２号焼土跡断面
７　第３号焼土跡
８　第３号焼土跡断面

図版７	１	第４号焼土跡
	２	第４号焼土跡断面
	３	第５号焼土跡
	４	第５号焼土跡断面
	５	第６号焼土跡断面
	６	第７号焼土跡断面
	７	第８号焼土跡断面
	８	第10号焼土跡断面
図版８	１	第11号焼土跡断面
	２	第12・13号焼土跡
	３	第12・13号焼土跡断面
	４	第17号焼土跡断面
	５	第21号焼土跡断面
	６	第22号焼土跡
	７	第25号焼土跡断面
	８	第27号焼土跡
図版９	１	第１号住居跡
	２	第１号住居跡遺物出土状況（１）
図版10	１	第１号住居跡カマド（１）
	２	第１号住居跡カマド（２）
	３	第１号住居跡遺物出土状況（２）
	４	第１号住居跡遺物出土状況（３）
	５	第１号住居跡遺物出土状況（４）
	６	第１号住居跡遺物出土状況（５）
	７	第１号住居跡遺物出土状況（６）
	８	第１号住居跡遺物出土状況（７）
図版11	１	第１・２号溝跡（１）
	２	第１・２号溝跡（２）
	３	第３号溝跡
	４	第３号土壙（１）
	５	第３号土壙（２）
図版12	１	第１号炭焼窯跡検出状況
	２	第１号炭焼窯跡
	３	第１号炭焼窯跡 木炭出土状況（１）
	４	第１号炭焼窯跡 木炭出土状況（２）
	５	第１号炭焼窯跡 木炭出土状況（３）
図版13	１	第２号炭焼窯跡
	２	第２号炭焼窯跡 木炭出土状況（１）
	３	第２号炭焼窯跡 木炭出土状況（２）
	４	第２号炭焼窯跡 木炭出土状況（３）
	５	第２号炭焼窯跡 木炭出土状況（４）
図版14	１	第１号道路跡
	２	第４～６号道路跡
図版15	１	西尾根ピット分布状況
	２	南尾根ピット分布状況（１）
	３	南尾根ピット分布状況（２）
	４	南尾根ピット分布状況（３）
	５	Ｂ区遺物包含層（１）
	６	Ｂ区遺物包含層（２）
	７	Ｍ－13グリッド袋状鉄斧 出土状況（１）
	８	Ｍ－13グリッド袋状鉄斧 出土状況（２）
図版16	１	第３号住居跡
	２	第４号住居跡
図版17	１	第４号住居跡
	２	第１号集石土壙
図版18	１・２	土壙
図版19	１	焼土跡
	２	Ａ区遺物包含層
図版20	１・２	Ａ区遺物包含層
図版21	１・２	Ａ区遺物包含層
図版22	１・２	Ａ区遺物包含層
図版23	１・２	Ａ区遺物包含層
図版24	１・２	Ｂ区遺物包含層
図版25	１・２	Ｂ区遺物包含層
図版26	１・２	Ｂ区遺物包含層

図版27　１・２　Ｂ区遺物包含層
図版28　１・２　Ｂ区遺物包含層
図版29　１～７　第１号住居跡
図版30　１～３　第１号住居跡
図版31　１　第１号住居跡
　　２　ピット
図版32　１　小形石器
　　２　古代のグリッド出土鉄製品

Ⅰ　発掘調査の概要

１　発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの５年間の県政運営の基本となる『埼玉県５か年計画　－希望・活躍・うるおいの埼玉－』を策定し、各分野での施策に取り組んでいる。このうち成長の活力をつくる分野では、「埼玉の成長を生み出す産業を振興する」という基本目標を掲げ、圏央道沿線地域に加え圏央道以北地域などにおいて、高速道路インターチェンジ周辺や県内主要幹線道路周辺に田園環境と調和した産業基盤づくりを積極的に進めている。こうした中で埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業地内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成29年度「公共事業と埋蔵文化財保護の調整会議」で照会があった。事業予定地については、埋蔵文化財の所在が不明であったため、嵐山町教育委員会が平成30年10月22日から平成30年11月７日まで確認調査を実施したところ、縄文時代や中世の遺構や遺物が確認された。そのため、平成30年11月12日付けで「油面遺跡（36-198）」として遺跡台帳に登載された。この結果に基づき、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、平成30年12月12日付け教文資第1707－１号で次の通り地域整備課長宛て回答した。

１　埋蔵文化財の所在

事業予定地には次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
油面遺跡（№36-198）	集落跡	縄文、戦国	比企郡嵐山町大字勝田、大字花見台

２　法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

３　取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、文化資源課の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて会議を開催し各種の調整を行った。

文化財保護法第94条第１項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する同条第４項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成31年２月８日付け教文資第４－1583号

文化財保護法第92条第１項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

平成31年４月22日付け教文資第２－４号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

２　発掘調査・報告書作成の経過

（１）発掘調査

油面遺跡の発掘調査は、嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴って平成31年４月１日から９月30日まで実施した。調査面積は11301.47㎡である。

４月１日に発掘調査届提出等の事務手続きを行った。４月５日～25日に、重機による表土掘削を開始し、４月25日に囲柵設置工事を行った。４月５日に現場事務所を設置し、発掘器材を搬入した。22日より補助員による遺構確認作業を開始した。４月22日に基準点測量を実施し、遺構概略図を作成した。

確認された遺構は、順次掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図作成と、写真撮影を行った。６月20日、７月10日、８月23日、９月２日、９月17日に、ドローンによる遺構写真の撮影を行い、９月10日に空中写真撮影を実施した。

９月19日に発掘作業を終了した。９月20日に発掘器材を搬出し、９月24日に現場事務所を撤去した。実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、９月30日に完了した。

（２）整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、令和２年10月１日から令和３年３月30日まで実施した。

遺物は、10月より水洗・注記を行い、順次接合復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成し、計測値や特徴なども記入した。11月より遺物実測図の製図ペンによるトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。これらはスキャナを使用してデジタル･データ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下データを作成した。12月より遺物の写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して10月より開始した。発掘調査で実施した遺構測量システムのデジタル・データおよび手作業によって作成した平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。11月中旬よりパソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下データを作成した。遺構写真は、発掘調査で撮影されたものの中から選択し、写真図版用の版下データを作成した。

12月より、作成した遺物・遺構のデータ等をもとに、報告文の執筆を開始した。これと、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付・編集を行った。

完了後印刷業者に入稿し、校正を３回行い、令和３年３月下旬に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集『油面遺跡』を刊行した。

図面類・写真類・遺物・データ類等の諸資料は埼玉県が管理・保管する。

３　発掘調査・報告書作成の組織

平成31年度（発掘調査）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	高津　導	調査部長	黒坂禎二
総務部		調査部副部長	吉田　稔
総務部副部長	山本　靖	主幹兼調査第二課長	大谷　徹
総務課長	新井了悟	主任専門員	富田和夫
		主事	桑原安須美
		主事	砂生智江
		主事	片山祐介

令和２年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田栄二	**調査部**	
常務理事兼総務部長	福沢　景	調査部長	吉田　稔
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上野真由美
総務部副部長	山本　靖	主幹兼整理第二課長	大谷　徹
総務課長	鈴木裕一	主任	砂生智江

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

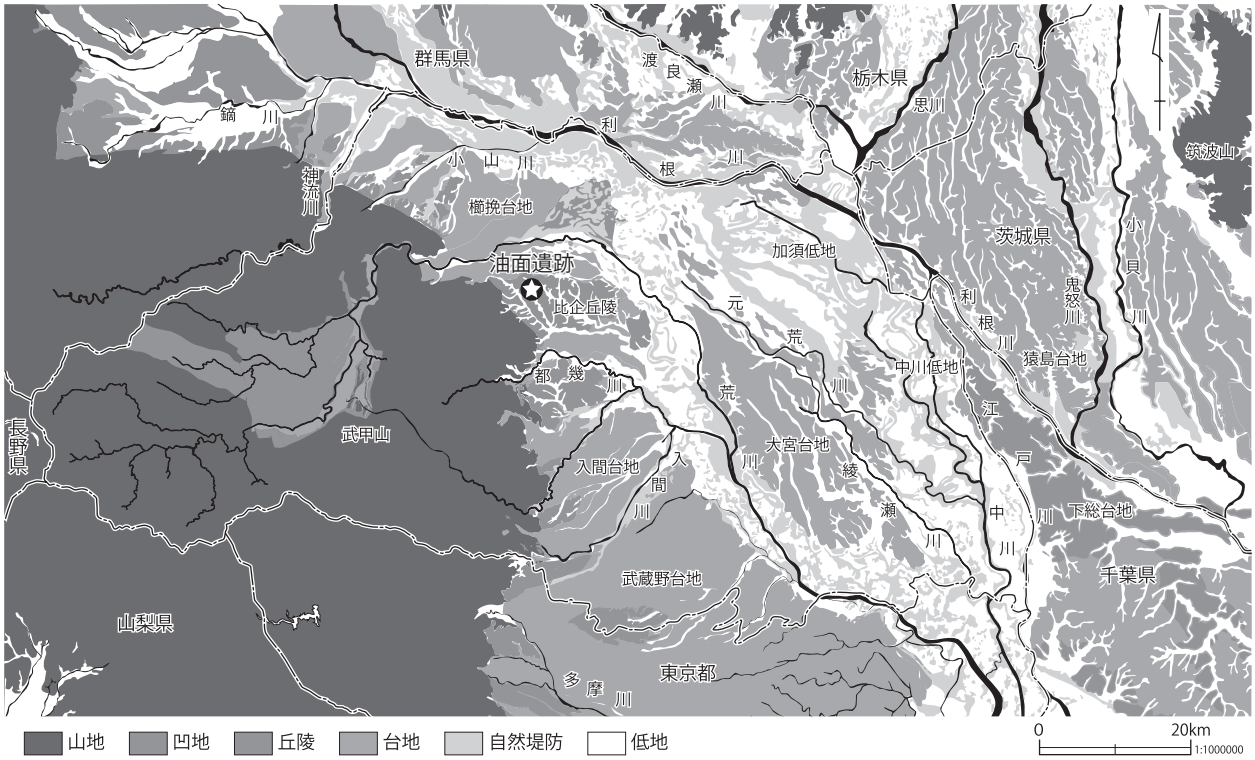
油面遺跡は、埼玉県比企郡嵐山町大字勝田に所在する。関越自動車道嵐山小川ＩＣから北東へ約0.8kmの位置にあり、嵐山花見台工業団地南東端に隣接する。

嵐山町周辺の地形を概観すると、町域の大部分は比企丘陵部に立地することがわかる。比企丘陵は、外秩父山地から東側に半島状に突出した丘陵であり、七郷層と呼ばれる第三紀に形成された岩盤層を基層とする。和田吉野川および、市野川によって、北側の江南台地、南側の東松山台地や、東側で独立丘陵を呈する吉見丘陵と区分され、丘陵中央部には滑川が流れる。丘陵一帯は、市野川へと注ぐ粕川・蟹田川や、滑川へと注ぐ中堀川・月中川・角川などの多数の小河川の開析によって、樹枝状に発達した開析谷が形成され、複雑に入り組んだ地形を呈している。開析谷の奥には溜池が点在し、これらは水田経営に利用されている。

遺跡は、滑川と粕川に挟まれた比企丘陵西部にあり、馬の背状の尾根頂部に立地する。遺跡の乗る尾根は、東西・南の三方に延び、北側は谷が入り込み急峻な斜面となっている。当該尾根の標高は、80〜90mである。

細尾根を北東へと辿っていくと、伊古乃速御玉比売神社の奥社とされる二ノ宮山へと至る。二ノ宮山の標高は131.8mで、比企丘陵では最高地点となる。周辺には、遺跡の南東に近接する、標高113mの大立山や、北東へおよそ３kmに位置する、標高105mの高根山などが所在する。

これらの斜面上には、ゴルフコースや工業団地が造成され、複数回にわたり工事に伴う発掘調査が実施された。それにより、斜面地に分布する集落跡が確認されている。



第１図　埼玉県の地形

２　歴史的環境

旧石器時代

遺跡周辺における当該時期の遺跡は現在のところ発見されておらず、遺物がわずかに確認されているのみである。油面遺跡の谷を挟んで西側に位置する尺尻遺跡（93）では、ナイフ形石器が出土している。また、塩西遺跡（78）からナイフ形石器文化期、白草遺跡から細石刃文化期の良好な資料が出土している。

縄文時代

旧石器時代の遺跡と同様に、草創期の遺跡の分布は、稀薄である。滑川町打越遺跡において、多縄文系土器群がまとまって出土している。早期前半では、越畑城跡（118）・年中坂Ａ・Ｂ遺跡（111・112）において、撚糸文土器、沈線文土器が出土している。早期後半の条痕文期になると、丘陵地帯の平坦部や肩部において、炉穴が認められるようになる。油面遺跡の東側の尾根に位置する亥遺跡（108）では、条痕文期と思われる炉穴10基が確認されている。また、金平遺跡（67）では、野島式期の住居跡６軒のほか、住居跡に重複して炉穴５基が確認されている。

前期になると遺跡の数は増加する傾向にあり、遺跡に近接する、尺尻遺跡（93）では諸磯b式期の住居跡１軒と集石２基、尺尻北遺跡（92）で諸磯c式期の住居跡１軒と土壙２基が確認されたほか、新田坊遺跡（94）・芳沼入遺跡（88）においても前期後半の土壙が確認されている。

中期前半では再び遺跡の分布は稀薄になるが、中期後半には増加し、台地や低位の広い河岸段丘上に大規模な集落が営まれるようになる。行司免遺跡（57）は都幾川右岸の河岸段丘上に営まれた勝坂式期から加曽利Ｅ式期を主体とする大規模な環状集落で、多数の住居跡や集石土壙が確認された。後・晩期では再び遺跡が減少し、土器の出土が確認される程度となる。前述の行司免遺跡では、安行式土器が出土している。

弥生時代

弥生時代にはいっても、縄文時代晩期の傾向は継続しており、前期・中期の遺跡はほとんど発見されていない。しかし、後期になると、蟹沢遺跡（87）で住居跡が11軒、大野田西遺跡（89）で住居跡25軒が確認されており、丘陵尾根上に集落が進出する様子がうかがわれる。

古墳時代

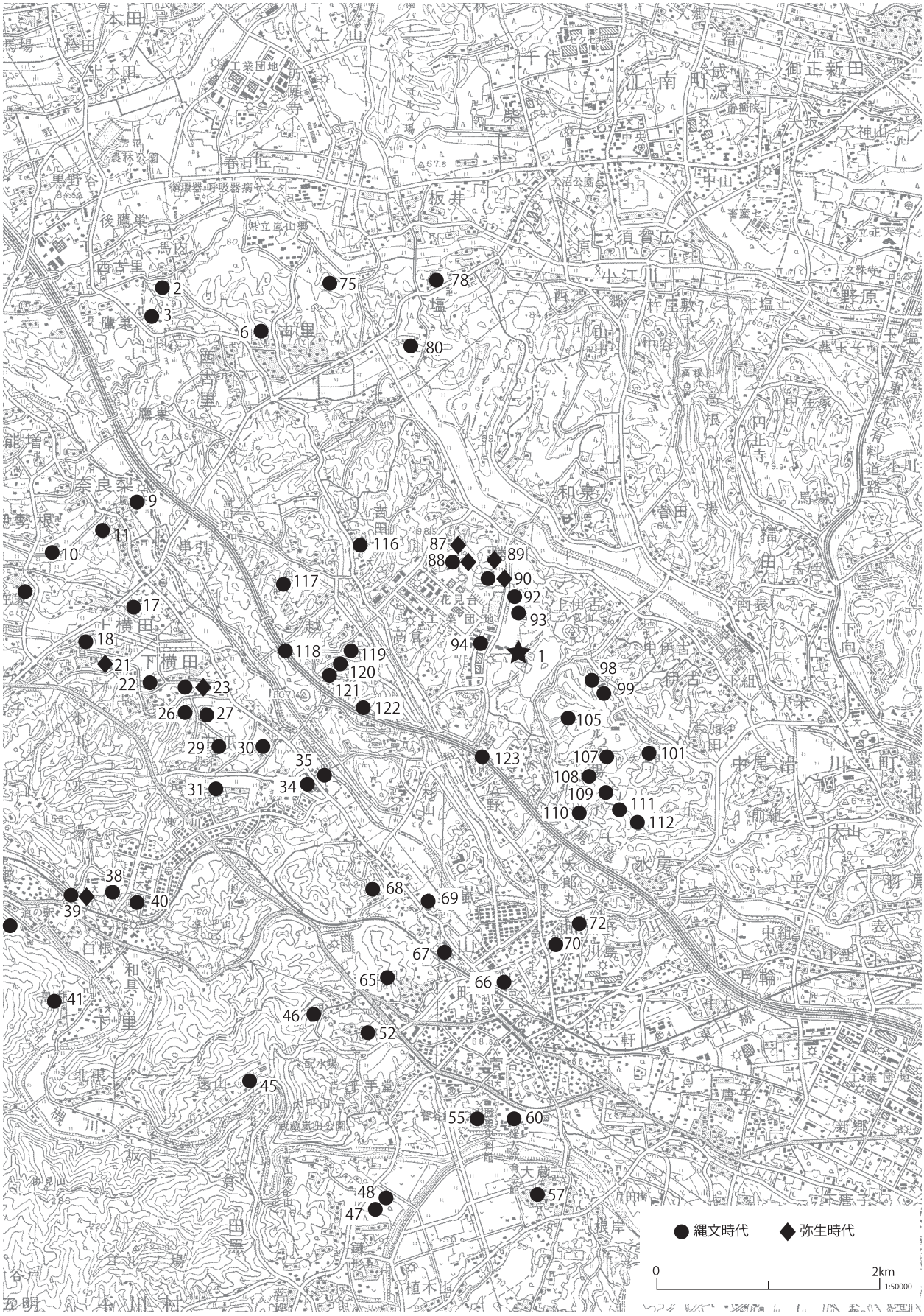
古墳時代では、丘陵内への遺跡の立地は認められず、周縁部において展開する。行司免遺跡（57）では、前期から中期にかけての方形周溝墓と住居跡が確認されている。古墳では、天神山古墳群（86）巌山古墳群（96）・郷社後古墳群（97）・下郷古墳群（126）などがある。

奈良・平安時代

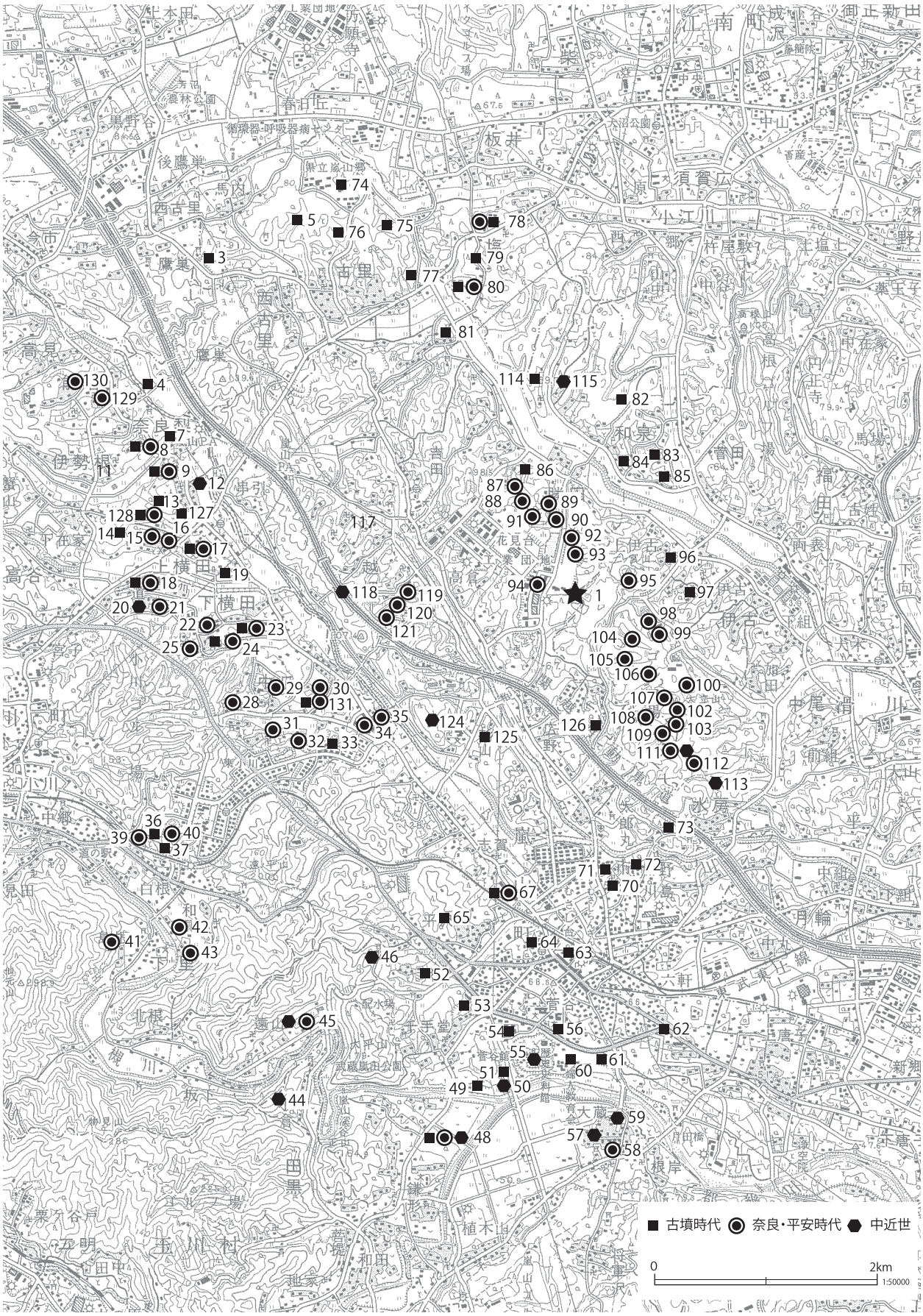
奈良・平安時代にはいると遺跡数は増加の傾向にあり、丘陵内部にも多数の遺跡が確認できる。柳沢Ａ遺跡（104）・山田谷遺跡（106）などを含む滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群や、芳沼入下遺跡（91）などの嵐山工業団地関係の調査で発見された遺跡があげられるほか、天裏遺跡では、丘陵頂部の平坦面から斜面にかけて住居跡36軒が確認されている。天裏遺跡においては掘立柱建物跡１棟が確認されている点も留意される。

中世

中世になると遺跡周辺は鎌倉街道上道の隣地であることもあり、重要な中世遺跡が多く認められる。大蔵館跡（58）では、13〜14世紀を主体とする遺構が確認され、大蔵館跡の西側に所在する行司免遺跡では、同時期と考えられる竪穴状遺構や井戸跡、溝跡などが確認された。戦国時代では、鎌倉街道上道沿いに杉山城跡（124）・越畑城跡（118）・高見城跡などの山城が所在し、重要な防衛線としての役割を果たしていたと推察される。



第２図　周辺の遺跡（縄文・弥生時代）



第３図　周辺の遺跡（古墳時代～近世）

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代
1	油面遺跡	縄文・平安・中近世
2	五嶺台遺跡	縄文
3	神山古墳群	縄文・古墳
4	一ノ裏遺跡	古墳
5	藤塚古墳	古墳
6	上耕地遺跡	縄文
7	草加古墳群	古墳
8	岡原遺跡	古墳・奈良・平安
9	貝塚遺跡	縄文
10	片瀬遺跡	縄文
11	台ノ前遺跡	縄文・古墳・平安
12	諏訪神社奉祀	中世
13	行人塚古墳群	古墳
14	石塚古墳	古墳
15	経塚遺跡	平安
16	峯久保遺跡	平安
17	峯原遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
18	中井遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
19	新田古墳群	古墳
20	武田信俊公館	近世
21	宮脇遺跡	弥生・奈良・平安
22	悪戸遺跡	縄文・平安
23	越弥遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
24	稲岡遺跡	古墳・奈良・平安
25	経塚遺跡	奈良・平安
26	西稲岡遺跡	縄文
27	久保ヶ谷戸遺跡	縄文
28	カサ遺跡	平安
29	日向遺跡	縄文・奈良・平安
30	本宿前遺跡	縄文・奈良・平安
31	内郷（１）遺跡	縄文・平安
32	内郷（２）遺跡	平安
33	西ヶ谷戸古墳群	古墳
34	下原道南遺跡	縄文・奈良・平安
35	下原道北遺跡	縄文・平安
36	平松１号墳	古墳
37	平松２号墳	古墳
38	中の台遺跡	縄文・平安
39	平松台遺跡	縄文・弥生・奈良・平安
40	松の木遺跡	縄文
41	笠郷遺跡	縄文・奈良・平安
42	和具（２）遺跡	奈良・平安
43	和具（１）遺跡	奈良・平安
44	小倉城跡	中世
45	山根遺跡	縄文・平安・中世
46	旧平沢寺僧坊跡群	縄文・中世
47	野銭場遺跡	縄文
48	東落合遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
49	石堂古墳群	古墳
50	上石堂遺跡	中世
51	山王古墳群	古墳
52	表古墳群	縄文・古墳
53	原古墳群	古墳
54	向原古墳群	古墳
55	菅谷館跡	縄文・中世
56	稲荷塚古墳	古墳
57	行司免遺跡	縄文・中世
58	大蔵館跡	平安
59	向徳寺跡	中世
60	寺山古墳群	縄文・古墳
61	東原古墳群	古墳
62	上唐子西原古墳群	古墳
63	東側古墳群	古墳
64	東昌寺古墳群	古墳
65	物見塚古墳	縄文・古墳
66	向原遺跡	縄文
67	金平遺跡	縄文・古墳・平安
68	西町裏遺跡	縄文
69	深沢遺跡	縄文
70	花見堂遺跡	縄文・古墳
71	花見堂古墳群	古墳
72	岩花古墳群	縄文・古墳
73	寺の台古墳	古墳
74	古里古墳群茨原支群	古墳
75	北田遺跡	縄文・古墳
76	二塚古墳群	古墳
77	古里古墳群	古墳
78	塩西遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
79	塩古墳群	古墳
80	塩前遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
81	陣屋古墳群	古墳
82	松原古墳群	古墳
83	船川遺跡	古墳
84	畠中古墳群	古墳
85	山崎古墳群	古墳
86	天神山古墳群	古墳
87	蟹沢遺跡	弥生・奈良
88	芳沼入遺跡	縄・弥・奈・平・中近世
89	大野田西遺跡	弥生・平安
90	大野田遺跡	縄・弥・奈・中近世
91	芳沼入下遺跡	奈良
92	尺尻北遺跡	縄文・平安
93	尺尻遺跡	旧石器・縄文・平安
94	新田坊遺跡	縄文・平安
95	旧伊古神社	奈良・平安
96	巌山古墳群	古墳
97	郷社後古墳群	古墳
98	台田嶺Ａ遺跡	縄文・奈良・平安
99	台田嶺Ｂ遺跡	縄文・奈良・平安
100	二ツ沼北遺跡	奈良・平安
101	二ツ沼南遺跡	縄文
102	二ツ沼西遺跡	奈良・平安
103	細沼北遺跡	奈良・平安
104	柳沢Ａ遺跡	奈良・平安
105	柳沢Ｂ遺跡	縄文・奈良・平安
106	山田谷遺跡	奈良・平安
107	中尾遺跡	縄文・奈良・平安
108	亥遺跡	縄文・奈良・平安
109	申酉遺跡	縄文・奈良・平安
110	酉亥遺跡	縄文
111	年中坂Ｂ遺跡	縄文・奈良・平安・中世
112	年中坂Ａ遺跡	縄文・奈良・平安
113	水房館跡	中世
114	西浦古墳群	古墳
115	三門館跡	中世
116	山王下遺跡	縄文
117	幡後谷津遺跡	縄文
118	越畑城跡	縄文・中世
119	大木前遺跡	縄文・奈良・平安
120	小栗北遺跡	縄文・平安
121	小栗遺跡	奈良・平安
122	打越遺跡	縄文
123	中郷遺跡	縄文
124	杉山城跡	中世
125	薬の峰古墳群	古墳
126	下郷古墳群	古墳
127	方墳行人塚	古墳
128	寿源寺遺跡	古墳・平安
129	大杉遺跡	奈良・平安
130	都谷遺跡	奈良・平安
131	宮前遺跡	古墳・奈良・平安

Ⅲ　遺跡の概要

油面遺跡は、比企郡嵐山町勝田地内に位置する。油面遺跡周辺は、工業団地やゴルフ場の造成に伴い広範囲で発掘調査が実施されており、既に多くの遺跡の存在が明らかとなっている場所である。

調査区は、３方向に延びる尾根が対象であり、調査面積は11301.47㎡、標高はおよそ92mである。尾根は、東・西・南方向に延びており、それぞれを東尾根・西尾根・南尾根と呼称し、３つの尾根が集約される地点を中央尾根とした。調査区の北側は、急峻な斜面となる。

さらに、第３号溝跡より北側の調査区（東尾根・西尾根・中央尾根）をＡ区、南側（南尾根）をＢ区とした。ピット番号についてはＡ・Ｂ区それぞれで通し番号をつけており、Ａ区に位置するピットには、番号の頭に10を付して区別した。その他の遺構については、Ａ・Ｂ区共通で遺構番号を付している。

調査区内では、西尾根・南尾根の端部と、中央尾根の頂部にわずかに平場が形成されていて、遺構はこれらの平場を中心に分布していた。特に、西尾根と南尾根の端部に集中する傾向が認められ、縄文時代・平安時代ともに、谷を臨む尾根の端部を積極的に活用していた様子がうかがわれる。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡４軒、集石土壙１基、土壙８基、焼土跡25基、遺物包含層２箇所、古代の住居跡１軒、炭焼窯跡２基、土壙１基、中・近世の溝跡３条、道路跡７条、ピット224基である。これらの遺構の多くは、斜面への土の流出によって、上部を大きく壊されており、遺存状態は非常に悪かった。特に、縄文時代の住居跡のうち、南尾根に位置する第２・５号住居跡は、住居跡の掘り込みが完全に失われており、炉跡とその周辺に分布するピットの配置から住居跡と認定した。西尾根に位置する第３・４号住居跡についても、掘り込みの一部は失われていた。

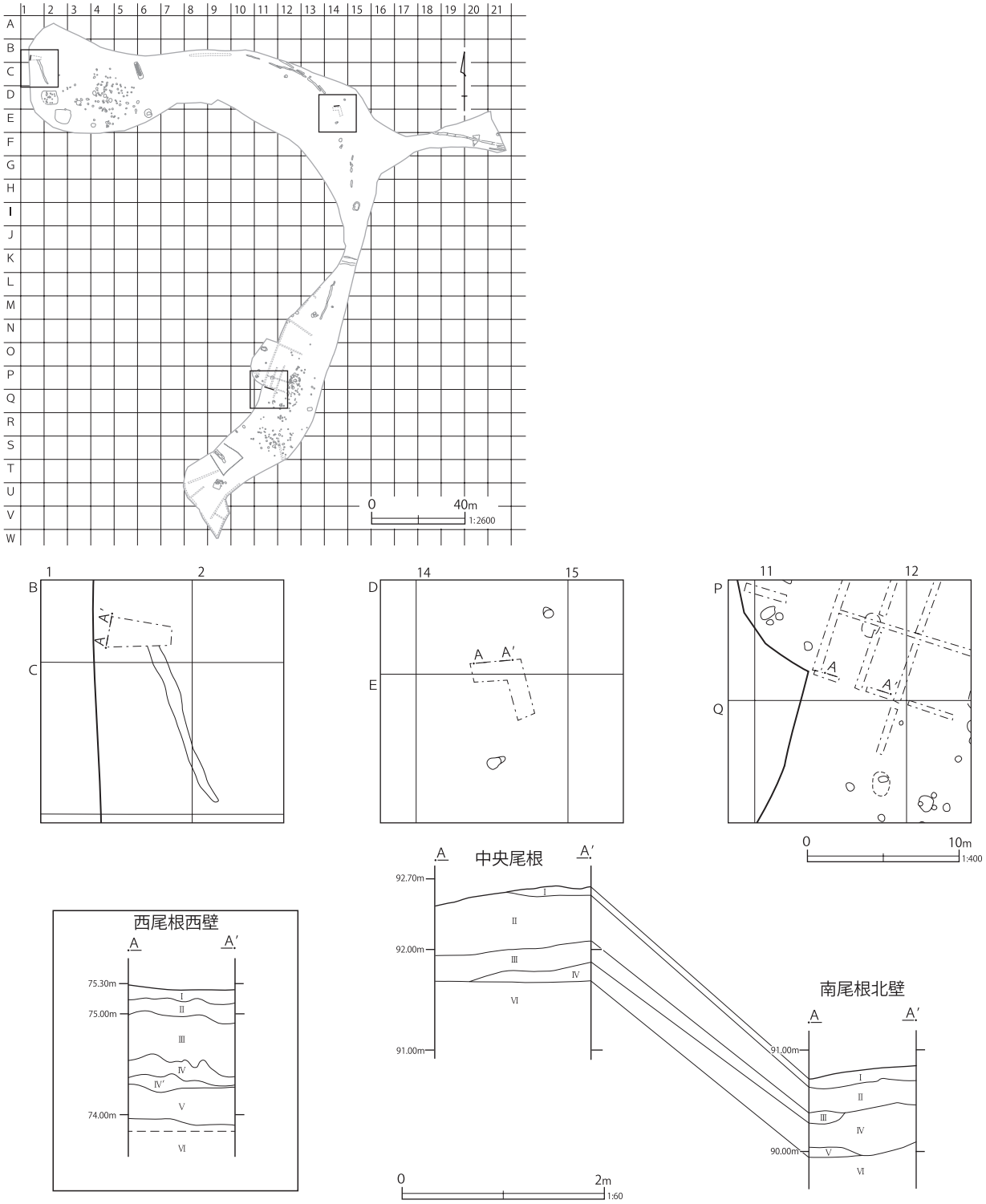
このように、住居跡の覆土が流出することによって、斜面には遺物包含層が形成されていた。西尾根のものをＡ区遺物包含層、南尾根のものをＢ区遺物包含層と呼称した。ただし、これには縄文時代早期～中期に属する土器に加えて、須恵器・土師器片なども上下に入り混じっており、時期ごとの分層はできなかった。

平安時代の住居跡は、南尾根から１軒のみ発見されている。第１号住居跡である。谷を挟んで東側に位置する滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では、尾根筋ごとに１～２軒の住居跡が点在する状況が確認されており、油面遺跡周辺の丘陵地では、このようなあり方が一般的であると推察される。

第１号住居跡は北側の壁にカマドを有し、カマドの両側には棚状施設と思われる掘り込みが付帯している。住居内からは、紡錘車のほか、小型の斧である袋状鉄斧が発見され、住居跡の性格にかかわる貴重な遺物である。

炭焼窯跡は、西尾根・南尾根にそれぞれ１基ずつ確認された。それぞれ規模や形態は異なるが、出土した炭化材の自然科学分析を行ったところ、いずれも平安時代から鎌倉時代のものという結果を得た。炭の供給先は不明である。また、調査区内からは椀形滓が出土しており、周辺における鍛冶遺構の存在が想定される。

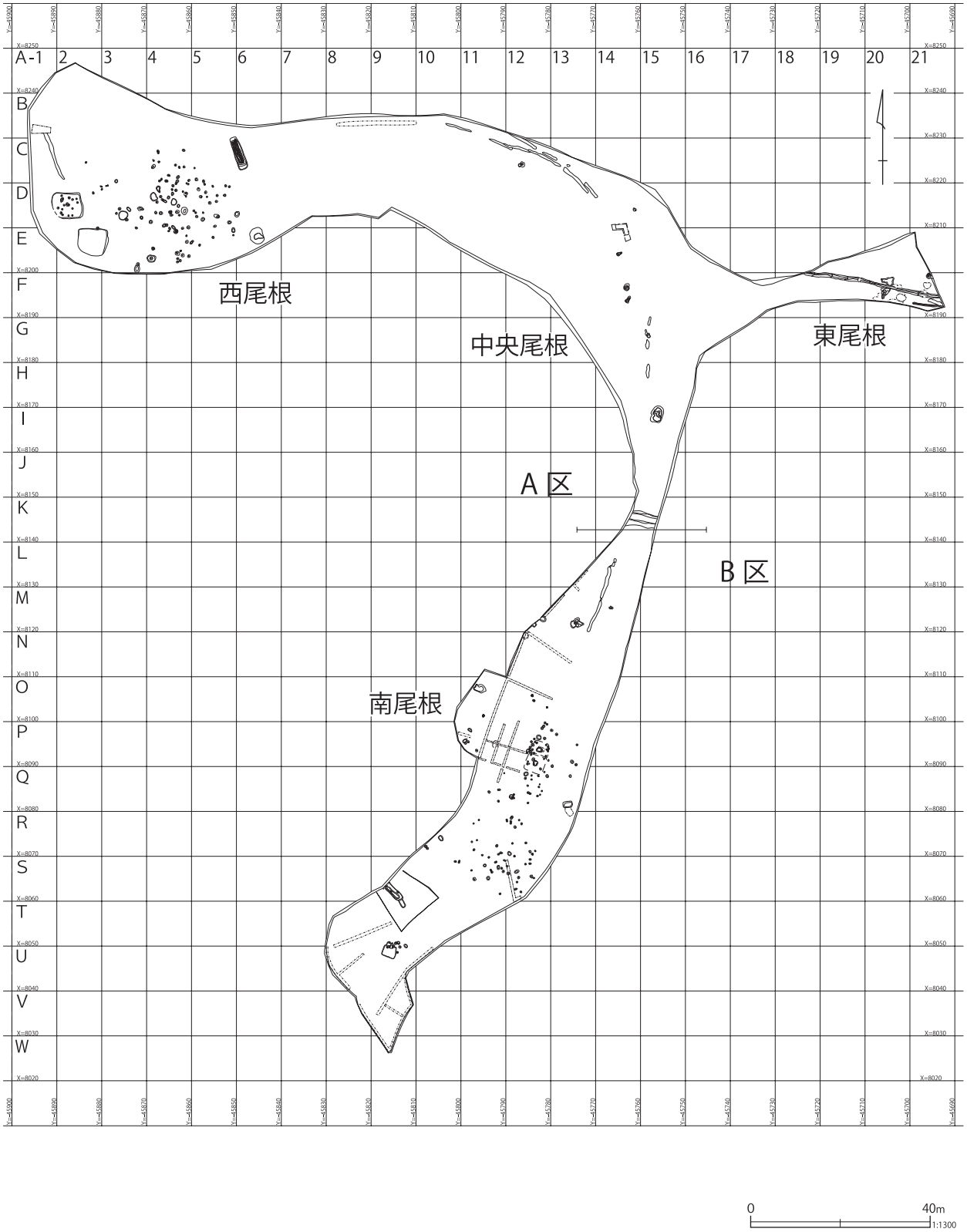
覆土に焼土粒や炭化物粒が含まれるものと被熱面が確認されたものについては焼土跡として区別した。焼土跡は、当初、縄文時代早期の炉穴を想定したが、断面観察の結果、検出面上での被熱であり掘り込みを伴わないものが多数あることが分かった。また、焼土跡内から縄文時代早期の遺物の出土は認められなかった。さらに、第６号焼土跡では、得られた炭化材の自然科学分析を行い、平安時代前期から中期との結果を得た。そこで、縄文土器片の出土したものは当該時期のものとし、それ以外については古代のものとして扱った。焼土跡は尾根沿いに点在する特徴が認められる。



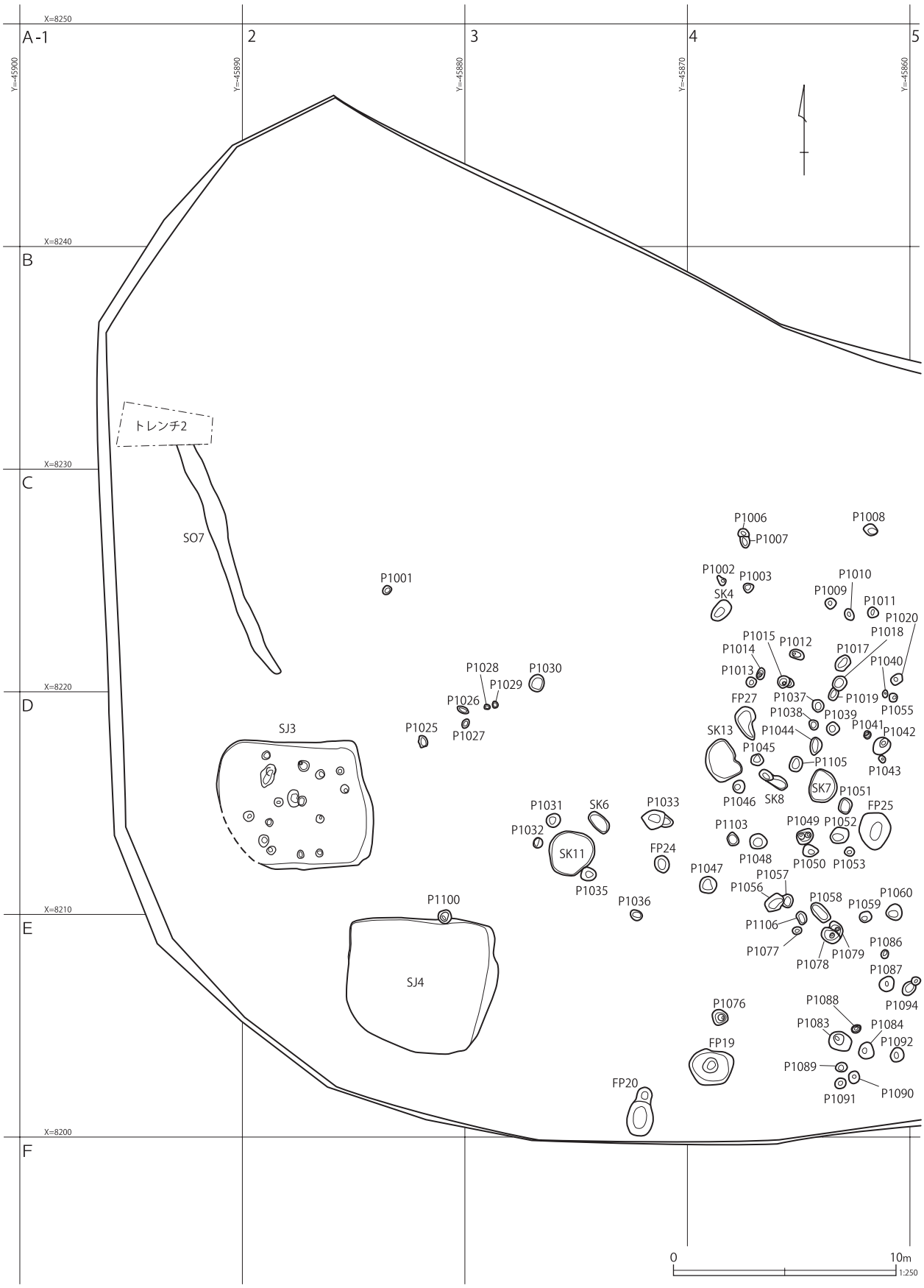
西尾根　西壁

Ⅰ	暗褐色～黒褐色土	表土層
Ⅱ	黄灰色～暗褐色土	粘性ややあり　しまりあり
Ⅲ	黄灰褐色～暗赤褐色土	粘性・しまりあり
Ⅳ	暗灰褐色土	いわゆる黒色帯に相当する
Ⅳ′	暗灰褐色砂礫層	
Ⅴ	暗灰褐色～暗灰白色土	下層由来の凝灰岩ブロック含む
Ⅵ	岩盤層	凝灰岩系　淡灰白色を呈する

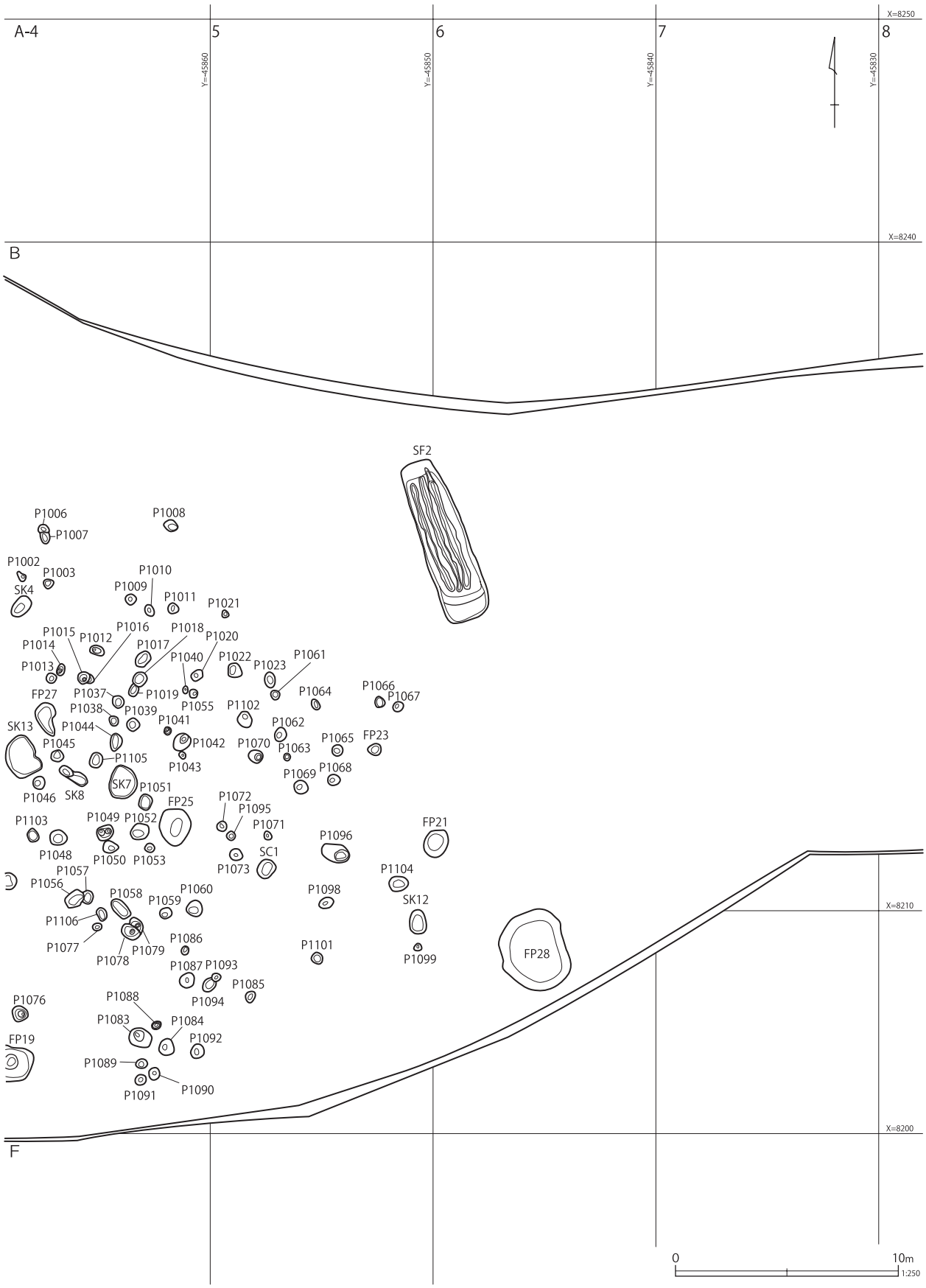
第４図　基本層序



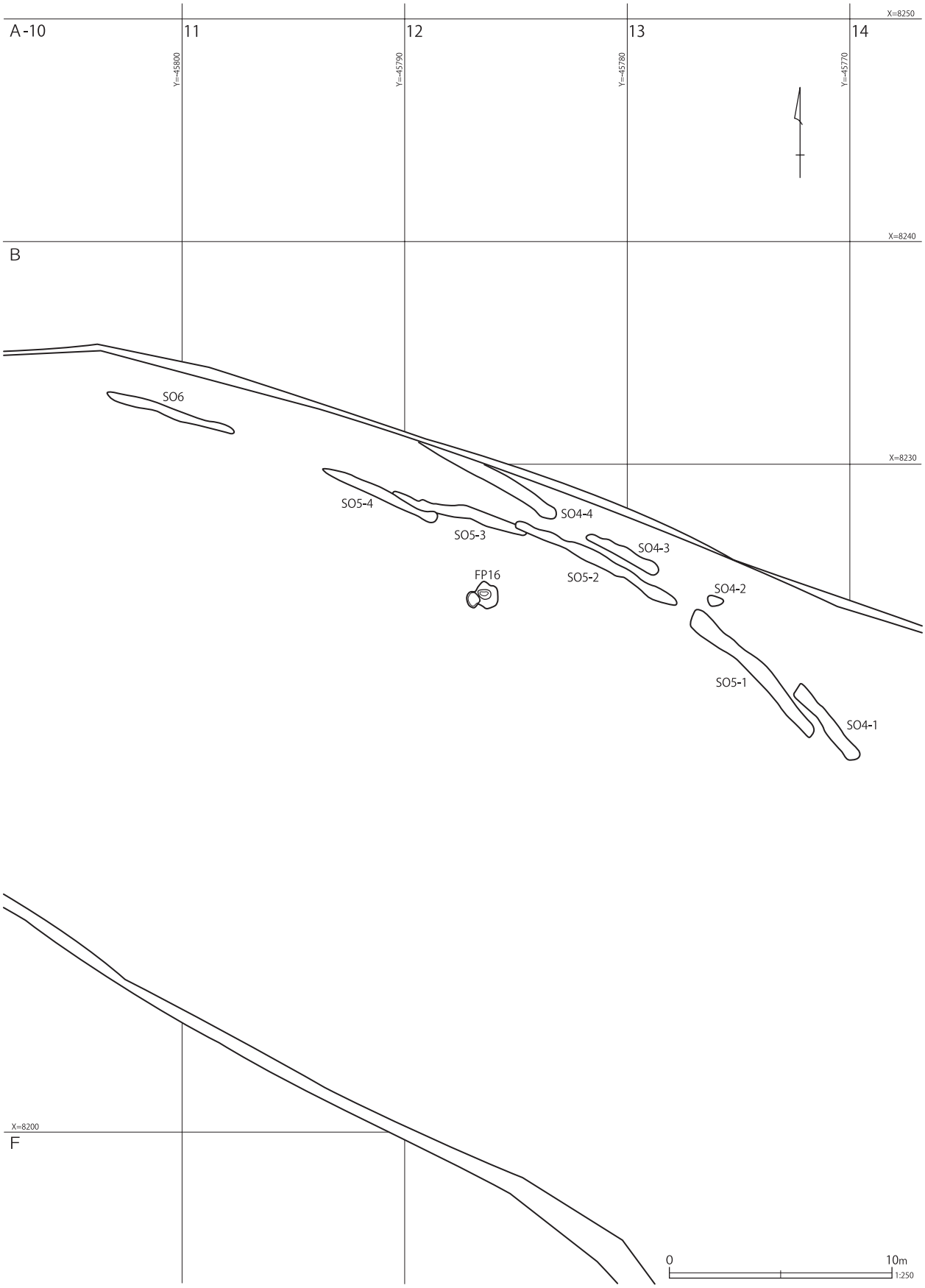
第５図　全体図


X=8250
A-1
2
3
4
5
Y=-45900
Y=-45890
Y=-45880
Y=-45870
Y=-45860
X=8240
B
トレンチ2
X=8230
C
SO7
P1006
P1007
P1008
P1001
P1002
P1003
P1010
SK4
P1009
P1011
P1020
P1018
P1015
P1012
P1014
P1017
P1040
P1013
P1028
P1030
P1029
X=8220
D
P1026
FP27
P1037
P1019
P1055
P1038
P1039
P1041
P1042
SJ3
P1025
P1027
SK13
P1044
P1045
P1105
P1043
SK7
P1051
P1046
SK8
P1031
SK6
P1033
FP25
P1032
P1103
P1049
P1052
SK11
FP24
P1048
P1050
P1053
P1047
P1057
P1056
P1035
P1058
P1060
P1100
P1036
P1059
X=8210
E
P1106
P1086
P1077
P1079
P1078
P1087
SJ4
P1088
P1094
P1076
P1083
P1084
FP19
P1092
P1089
FP20
P1091
P1090
X=8200
F
0
10m
1:250

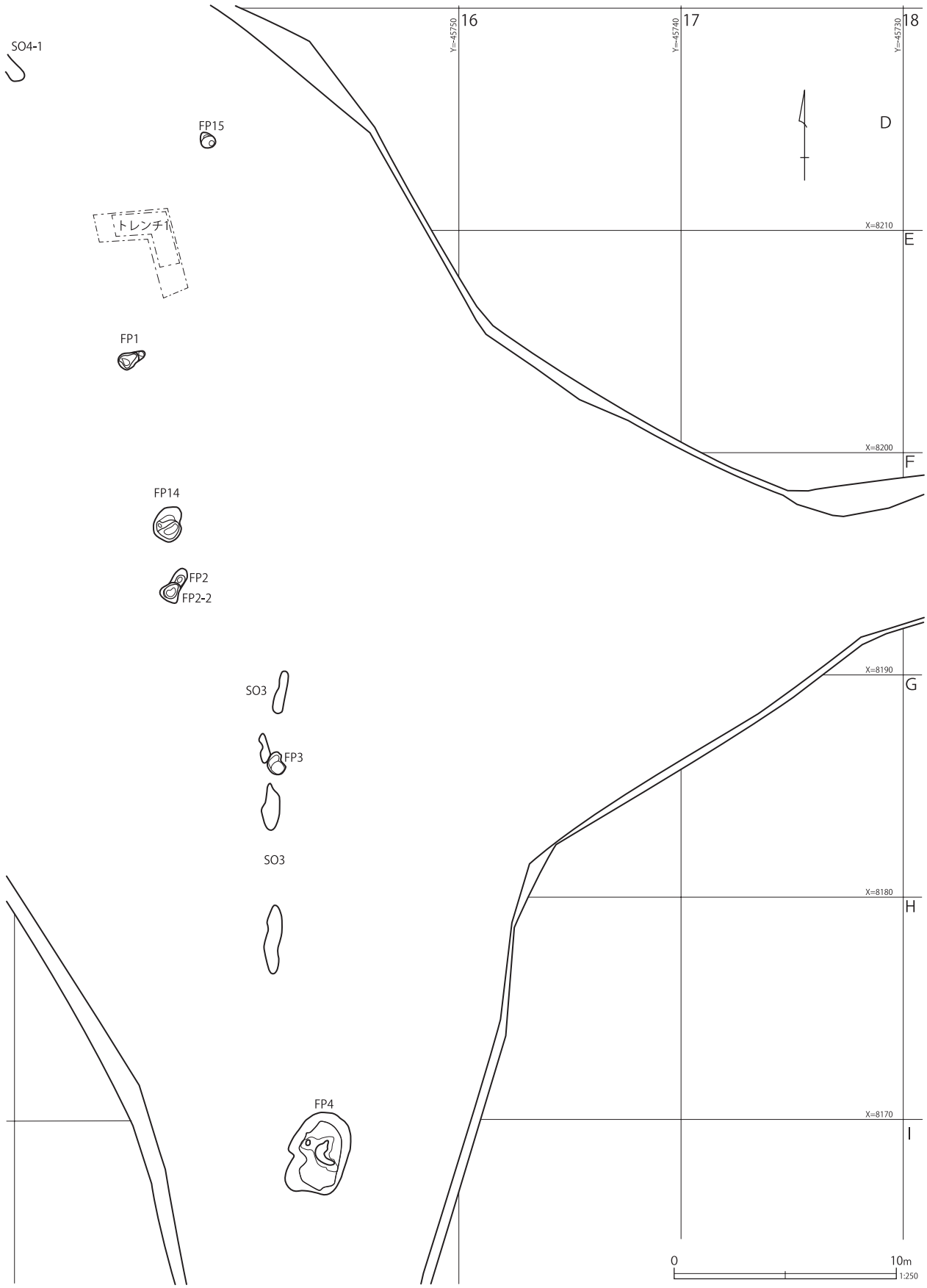
第６図　区割図（１）


A-4
5
6
7
8
X=8250
X=8240
X=8210
X=8200
Y=-45860
Y=-45850
Y=-45840
Y=-45830
B
F
SF2
P1006
P1007
P1008
P1002
P1003
SK4
P1010
P1009
P1011
P1021
P1015
P1012
P1016
P1018
P1020
P1014
P1017
P1040
P1022
P1023
P1061
P1013
P1019
P1064
P1066
P1067
FP27
P1037
P1038
P1039
P1055
P1102
P1041
P1062
SK13
P1044
P1045
P1042
P1070
P1063
P1065
FP23
P1105
P1043
P1069
P1068
SK7
P1051
P1046
SK8
FP25
P1072
P1095
P1071
P1103
P1049
P1052
P1096
FP21
P1048
P1050
P1053
SC1
P1073
P1104
P1057
P1056
P1058
P1060
P1098
P1059
SK12
P1106
P1086
P1077
P1079
P1078
P1101
P1099
FP28
P1087
P1093
P1085
P1094
P1076
P1088
P1083
P1084
FP19
P1092
P1089
P1090
P1091
0
10m
1:250

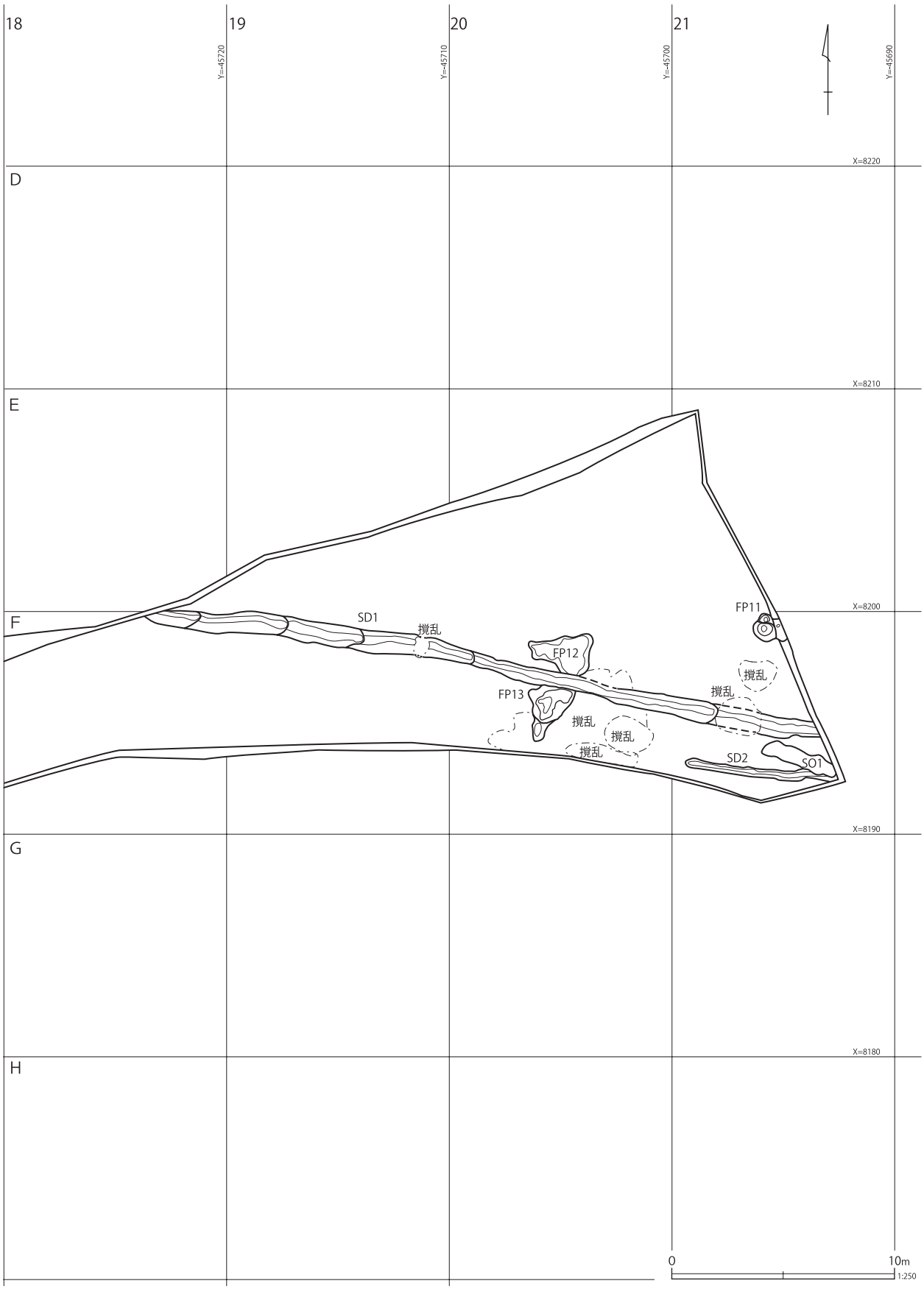
第７図　区割図（２）


A-10
11
12
13
14
X=8250
Y=-45800
Y=-45790
Y=-45780
Y=-45770
X=8240
B
SO6
X=8230
SO5-4
SO4-4
SO5-3
SO4-3
FP16
SO5-2
SO4-2
SO5-1
SO4-1
X=8200
F
0
10m
1:250

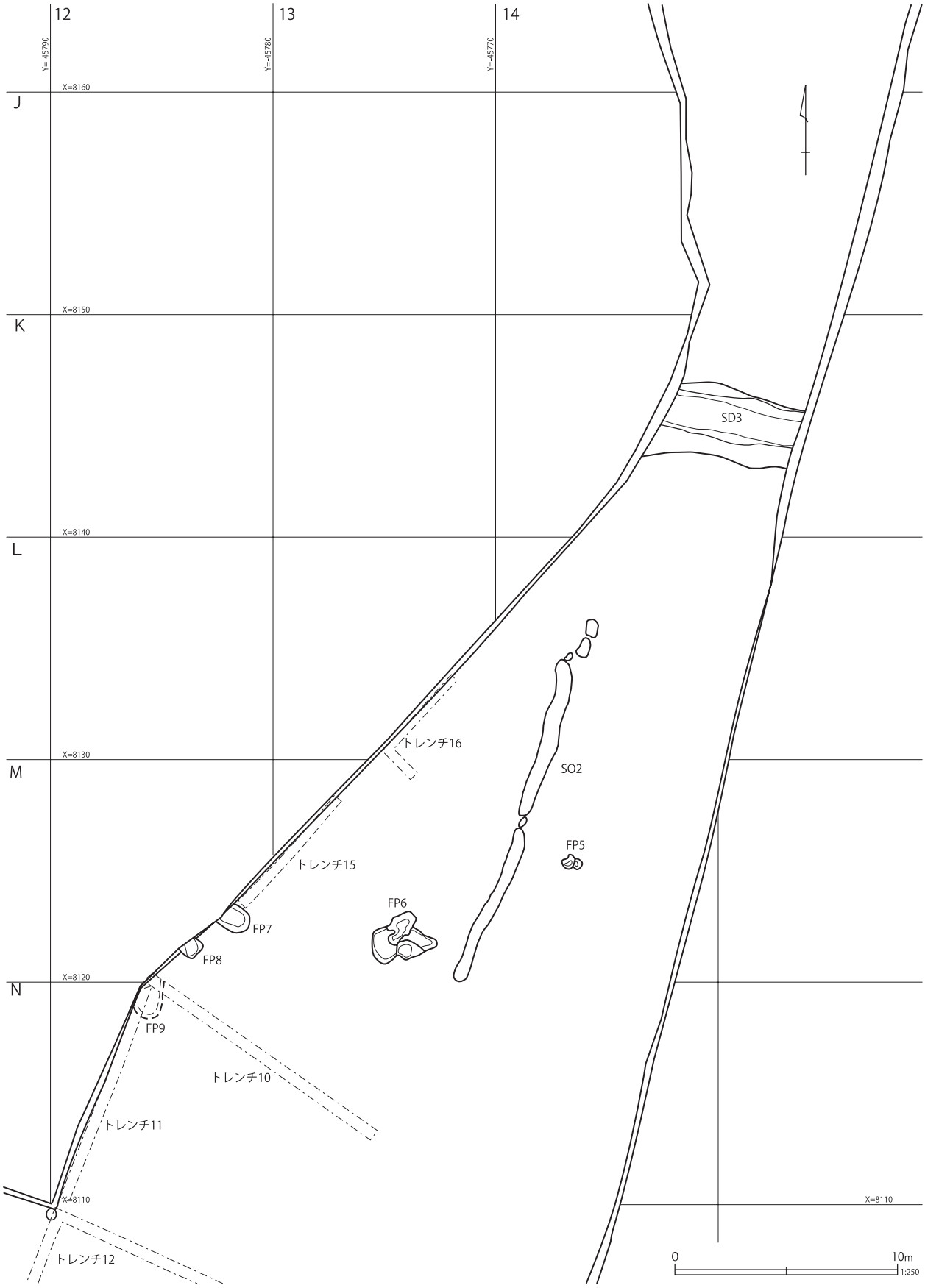
第８図　区割図（３）


SO4-1
FP15
トレンチ1
FP1
FP14
FP2
FP2-2
SO3
FP3
SO3
FP4
16
17
18
Y=-45750
Y=-45740
Y=-45730
D
X=8210
E
X=8200
F
X=8190
G
X=8180
H
X=8170
I
0
10m
1:250

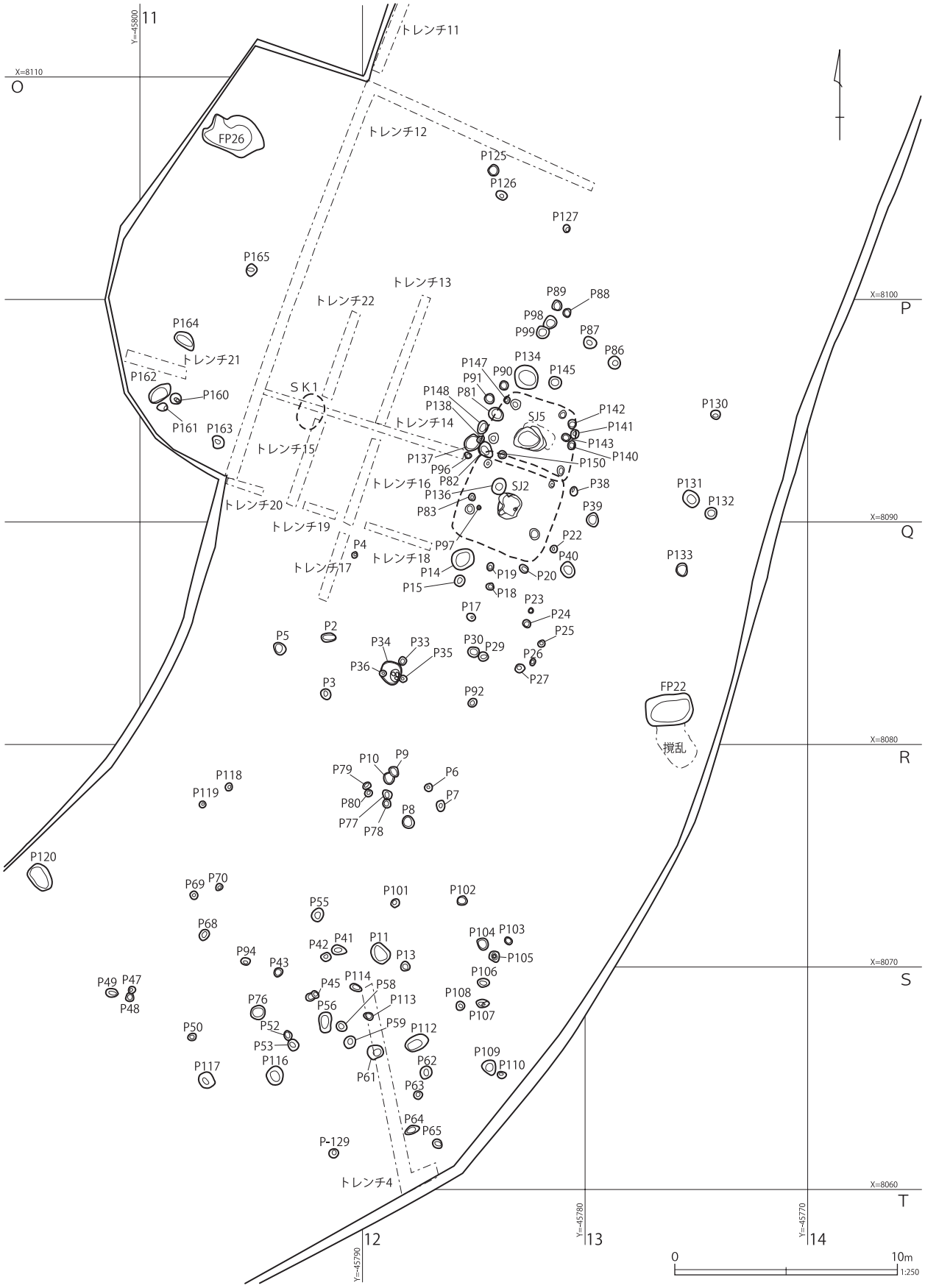
第９図　区割図（４）


18
19
20
21
Y=-45720
Y=-45710
Y=-45700
Y=-45690
X=8220
X=8210
X=8200
X=8190
X=8180
D
E
F
G
H
SD1
撹乱
FP12
FP13
FP11
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
SD2
SO1
0
10m
1:250

第10図　区割図（５）

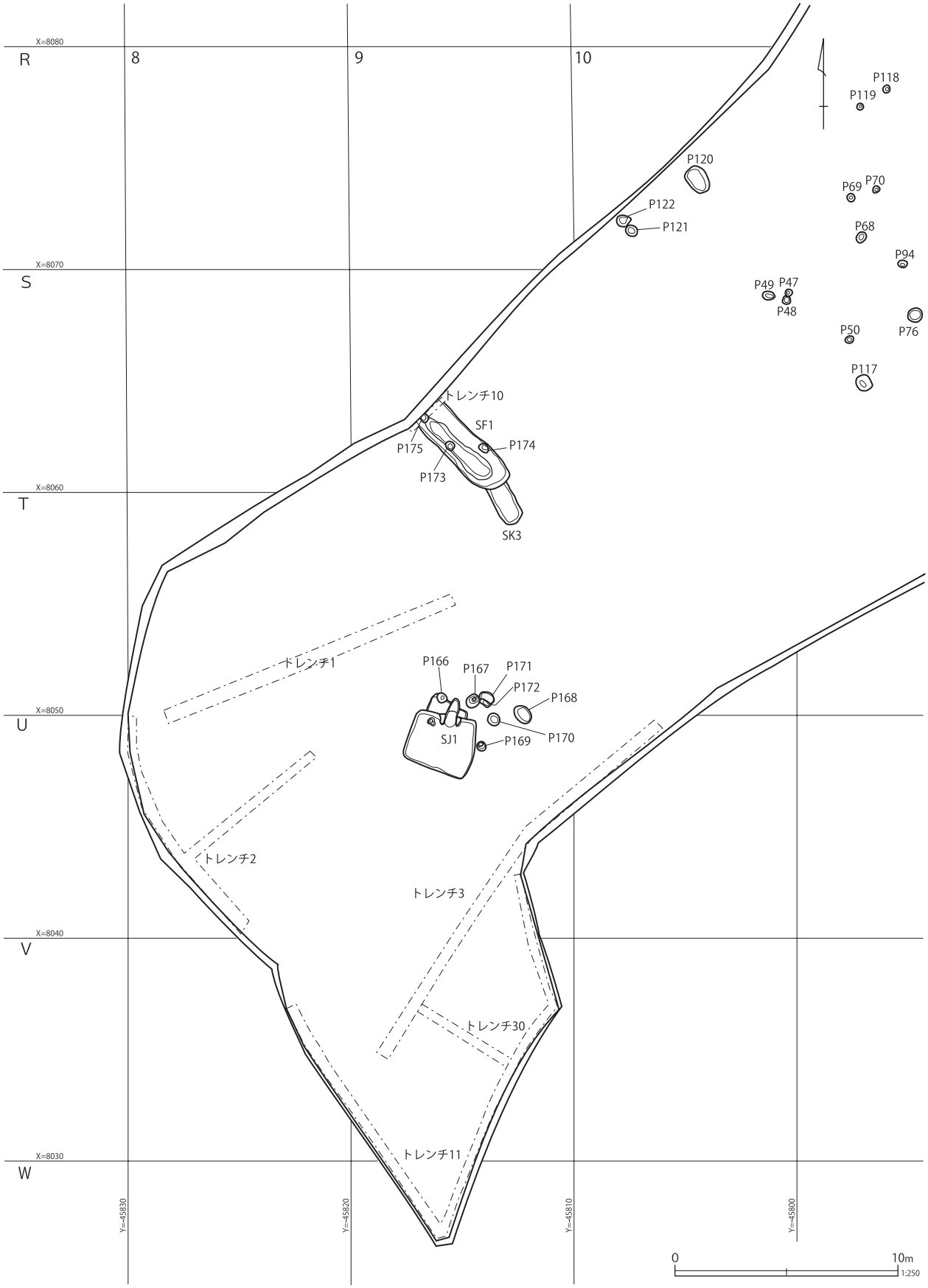

12
13
14
Y=45790
Y=45780
Y=45770
X=8160
X=8150
X=8140
X=8130
X=8120
X=8110
J
K
L
M
N
SD3
SO2
FP5
FP6
FP7
FP8
FP9
トレンチ16
トレンチ15
トレンチ10
トレンチ11
トレンチ12
0
10m
1:250

第11図　区割図（6）



11
Y=-45800
X=8110
O
トレンチ11
トレンチ12
FP26
P125
P126
P127
P165
トレンチ13
トレンチ22
P89
P88
P98
P99
P87
P86
X=8100
P
P164
トレンチ21
P162
P160
P161
P163
SK1
P147
P90
P134
P145
P91
P148
P81
P138
トレンチ14
SJ5
P142
P141
P143
P140
P150
P130
トレンチ15
P137
P96
P82
トレンチ16
SJ2
P38
P136
P83
P39
P131
P132
トレンチ20
トレンチ19
X=8090
Q
P4
P97
P22
トレンチ18
P40
P133
トレンチ17
P14
P19
P20
P15
P18
P23
P17
P24
P25
P5
P2
P34
P33
P30
P29
P26
P35
P36
P27
P3
P92
FP22
撹乱
X=8080
R
P10
P9
P79
P6
P118
P119
P80
P7
P77
P8
P78
P120
P69
P70
P101
P102
P55
P68
P104
P103
P41
P11
P42
P13
P105
P94
P43
X=8070
S
P106
P49
P47
P48
P45
P114
P58
P108
P76
P56
P113
P107
P50
P52
P59
P112
P53
P109
P116
P62
P110
P117
P61
P63
P64
P65
P-129
トレンチ4
X=8060
T
Y=-45780
Y=-45770
12
13
14
Y=-45790
0
10m
1:250

第12図　区割図（７）


X=8080
R
8
9
10
P118
P119
P120
P69
P70
P122
P121
P68
P94
X=8070
S
P49
P47
P48
P50
P76
P117
トレンチ10
SF1
P175
P174
P173
X=8060
T
SK3
トレンチ1
P166
P167
P171
P172
P168
X=8050
U
SJ1
P169
P170
トレンチ2
トレンチ3
X=8040
V
トレンチ30
トレンチ11
X=8030
W
Y=-45830
Y=-45820
Y=-45810
Y=-45800
0
10m
1:250

第13図　区割図（８）

Ⅳ　遺構と遺物

１　縄文時代の遺構と遺物

（１）　住居跡

縄文時代では、Ａ区の西尾根端部で第３・４号住居跡、Ｂ区の南尾根斜面移行部で第２・５号住居跡の、合計４軒の竪穴住居跡が検出された。遺構確認面まで削平が及んでいる部分が多く、床面と炉のみが検出された住居跡や、確認面からの掘り込みが浅く、一部壁が削平された状態で検出された住居跡が多い。

第２号住居跡（第14図）

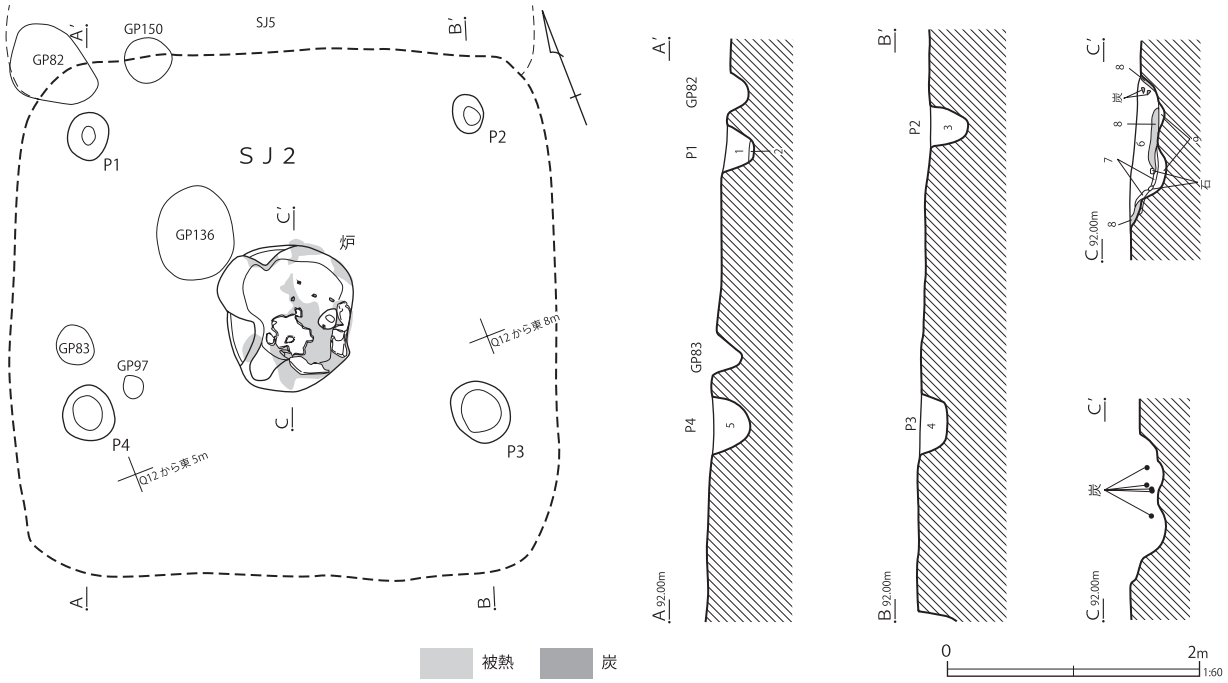
Ｐ－12グリッドに位置し、北側で第５号住居跡と一部重複する。床面まで削平が及んでおり、住居跡の新旧関係は不明である。炉跡とその周辺に分布するＰ１～４から、４本主柱の方形状を呈する住居跡と認定した。

炉跡は地床炉で、不整円形を呈し、住居跡の中央部やや南側に位置する。推定規模は長径1.18m、短径0.97mである。掘り込みは一部地山の岩盤層に達する。炉床近くで、炭化物が少量出土した。住居跡からは遺物は出土していない。

住居跡西側の斜面部に縄文時代前期後葉の諸磯ｂ式期を中心とした遺物包含層が形成されており、住居跡も同時期の所産の可能性が高い。

第３号住居跡（第15、16図）

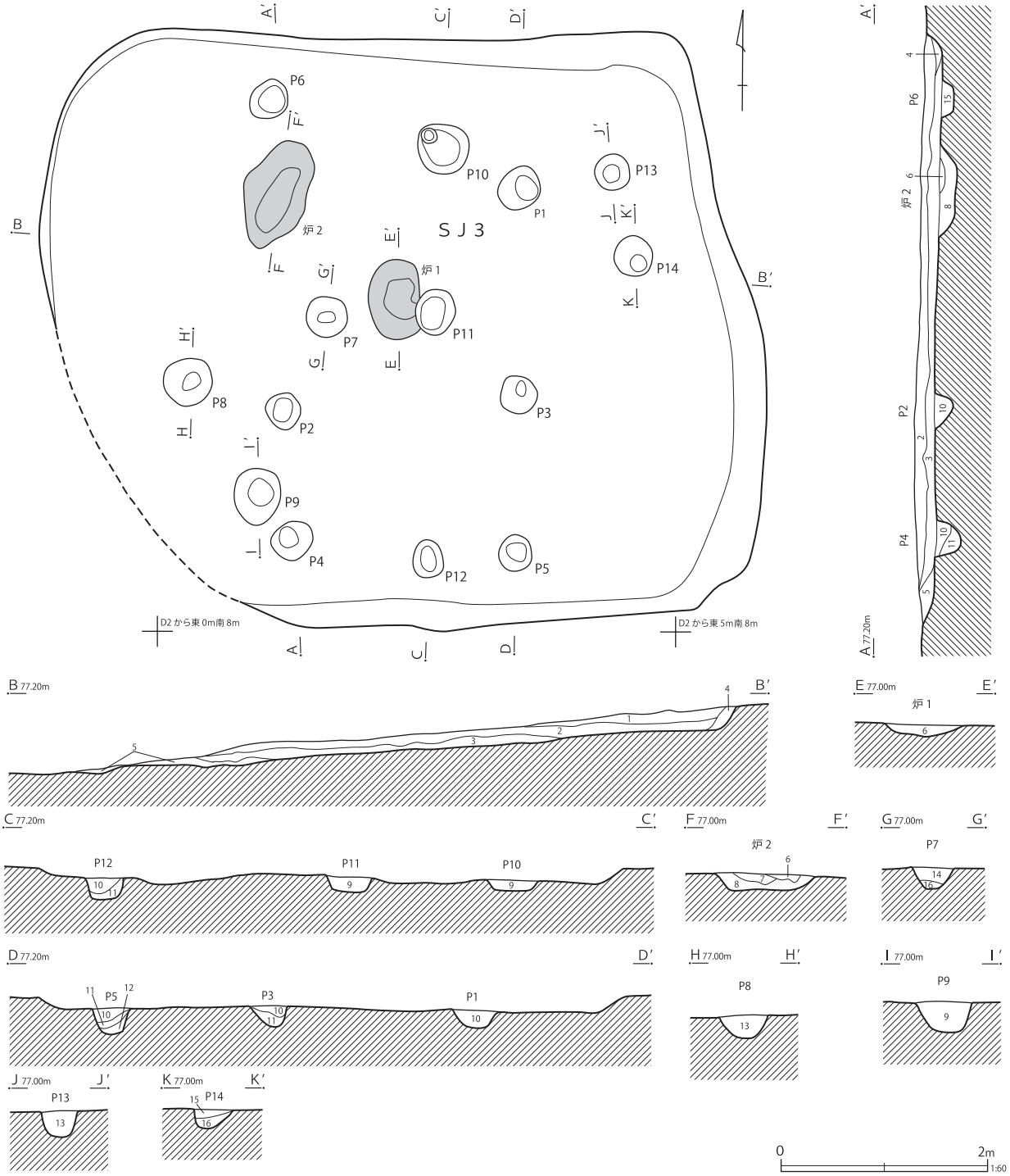
Ｄ－１・２グリッドで、第４号住居跡の北西側に位置する。住居跡は、西側に傾斜する斜面の肩部にあり、斜面への表土流出により、西側の壁面が一部失われていた。平面形は、東西方向にやや細長い不正な長方形で、推定される規模は東西方向の長径6.85m、南北方向の短径5.65mである。ピットは、14基検出された。



ピット
1　暗褐色土　粘性あり　しまりやや強い　砂粒（φ１～３㎜）微量
2　暗褐色土　砂粒ごく微量
3　黒色土　粘性やや弱い　しまり強い　砂粒（φ1mm）微量
　　赤色粒（φ３～5mm）微量
4　暗褐色土　粘性・しまりあり　砂粒微量
5　黒褐色土　粘性・しまりやや強い
　　風化礫（φ１～2cm）・炭化物粒（φ0.1mm）微量

炉
6　黒褐色土　砂粒（φ10㎜）・赤色粒（φ５～10㎜）・
　　焼土粒（φ１㎜）・炭化物粒少量
7　灰色粘土　還元により硬化　炭化物粒含む
8　赤褐色土　被熱層
9　暗褐色土　炭化物粒・礫中量

第14図　第２号住居跡



ＳＪ３　Ａ－Ａ´　Ｂ－Ｂ´

1　暗茶褐色土　粘性ややあり　しまりやや強い
2　暗灰褐色土　黒雲母（φ0.5㎜）含む　粘性わずか　しまりやや強い
3　暗褐色土　黄白色・暗灰褐色　土粒（φ２～３㎜）微量
　　炭化物粒（φ２～４㎜）含む　粘性強い　しまりやや強い
4　暗灰褐色土　黒雲母粒（φ0.5㎜）多量　粘性・しまりなし
5　暗灰褐色土　粘性ややあり　しまりなし

炉１

6　暗褐色土　ロームを主体とする
　　焼土粒（φ0.1～0.5㎜）・炭化物粒（φ0.5㎜）微量
　　粘性やや強い　しまりあり

炉２

7　暗赤褐色土　炭化物粒（φ２～４㎜）多量　砂粒（φ５㎜）少量
　　粘性ややあり　しまりやや弱い　被熱あり
8　暗褐色土　炭化物粒（φ１～２㎜）・焼土粒少量　粘性・しまりややあり

ピット

9　明褐色土　黄褐色土ブロック（φ10㎝）微量
　　４層土をブロック状に含む　粘性ややあり　しまり弱い
10　明褐色土　ローム土と４層土の混合層
　　粘性・しまりややあり
11　暗褐色土　焼土粒（φ１㎜）少量　炭化物粒微量
　　粘性あり　しまりややあり
12　暗褐色土　炭化物粒（φ１㎜）・焼土粒微量　粘性・しまりややあり
13　淡褐色土　焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりあり
14　淡褐色土　焼土粒・炭化物粒（φ１～３㎜）含む　粘性あり　しまりややあり
15　淡褐色土　黒雲母粒（φ0.5㎜）微量　白灰色粒（φ0.1㎜）ごく微量
　　粘性あり　しまりややあり
16　暗灰褐色土　粘性・しまりややあり

第15図　第３号住居跡

炉跡は２基検出された。炉１は住居跡のほぼ中央に位置し、規模は長径0.79m、短径0.55mである。床面において焼土粒・炭化物粒が確認されたため炉跡とした。

炉２は住居跡の北西寄りに位置し、規模は長径1.09m、短径0.67mである。住居跡の床面において、わずかに被熱面が確認された。

遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代前期後葉諸磯ｂ式期に属する可能性が高い。

第３号住居跡出土遺物（第17図１～20）

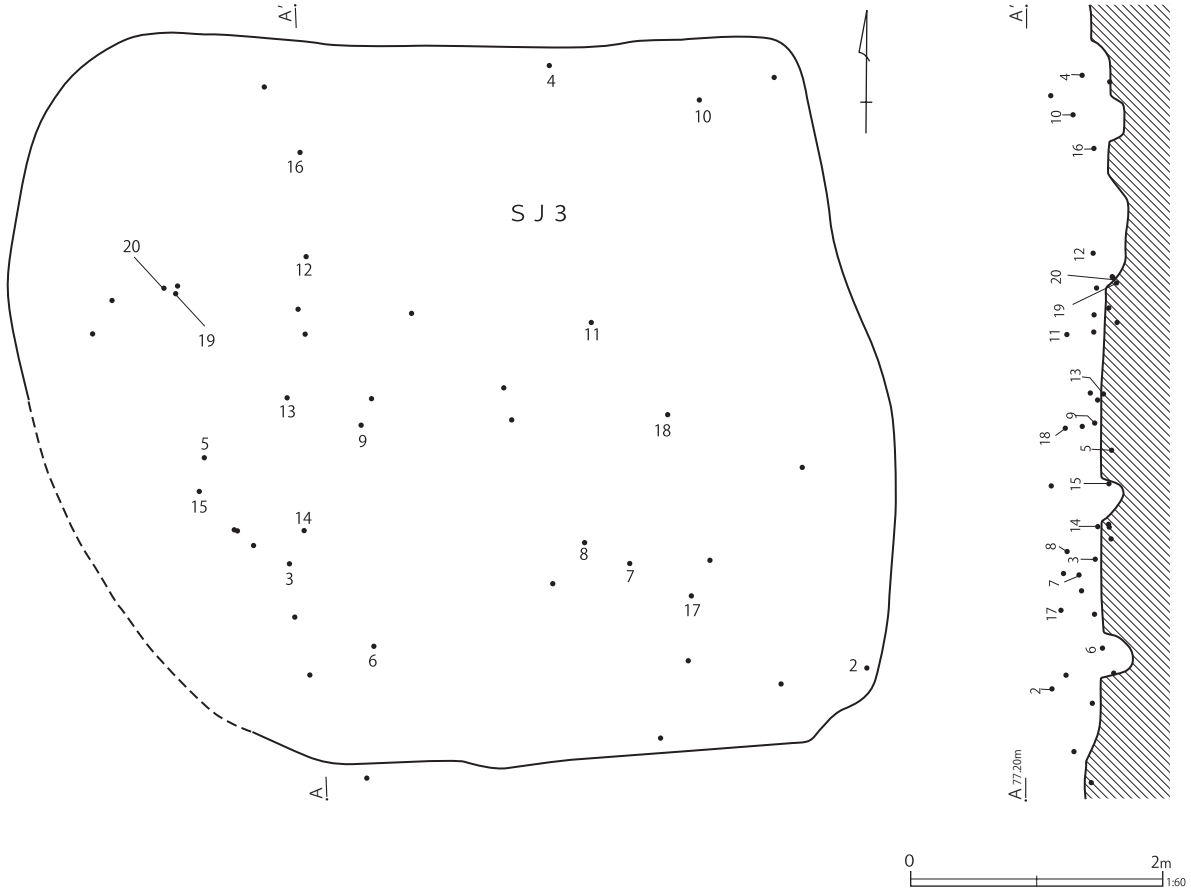
１は角頭状の口唇部が外反しながら開く器形の深鉢形土器で、横走する細かな単節ＲＬ縄文が口縁部に施文されている。口唇部及び内面は非常によく磨かれている。口縁部に縦位の沈線状のモチーフが見られるが、ガジリ痕と判断される。暗赤褐色を呈する。

２は口縁部が外反する器形の胴部破片で、単節ＬＲ縄文上に、半截竹管による細い横位の平行沈線が施文されて、胴部が区画されている。暗赤褐色の胎土に、若干の白色粒子が含まれる。

３は小さな破片であるが、やや幅広の平行沈線文間に大振りの爪形文が施文されている。橙褐色を呈する。

４～８は平行沈線でモチーフが描かれる土器群である。４、５は弧状の平行沈線文が施文されており、６、７は鋸歯状のモチーフが施文されている。８は横位の平行沈線文が施文されているが、平行沈線文間が低隆帯状を呈し、隆帯上にも横位の浅い沈線文が施文されている。

１、２は縄文時代前期後半の無繊維土器である諸磯ａ式の可能性があり、４～７はいずれも橙褐色で白色粒子を含む諸磯ｂ式に比定される爪形文土器と、平行沈線文土器であろう。８は白色粒子が多く含まれる点で、他の諸磯ｂ式土器と趣を異



第16図　第３号住居跡遺物出土状況

にしている。

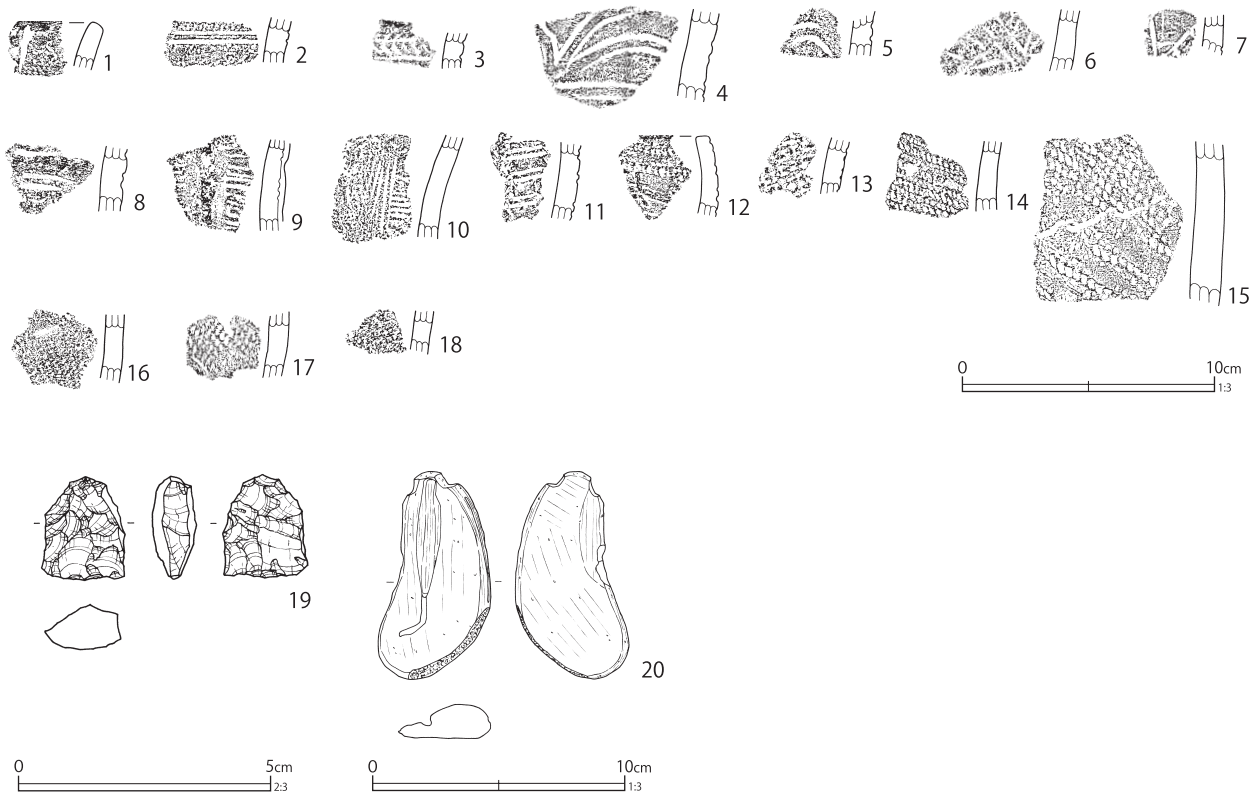
９～11は前期末葉の諸磯ｃ式土器で、平行沈線文を地文として、９は縦位の棒状貼付文が垂下施文されている。10は棒状貼付文の代わりに縦位の集合平行沈線文が施文されているものである。11は地文の平行沈線文がやや間隔を空けて施文されており、破片の左隅に貼付文の剥落した痕跡が残る。内面は丁寧に磨かれている。いずれも胎土にやや砂粒を多く含み、白色粒子が含まれる。

12、13は押引状の結節沈線文が施文される土器群である。12は角頭状の口縁部がやや内湾する器形で、口縁に沿って平行する２条の押引状結節沈線が施文されて口縁部が区画されている。結節沈線文下は横位の平行沈線が施文される。13は半截竹管の細かな結節沈線文が密に施文されており、渦巻状のモチーフを構成するものであろう。12は橙褐色、13は暗赤褐色を呈するが、白色粒子を含み、諸磯ｃ式の新段階に比定されよう。

14～18は単節ＲＬ縄文のみが横位施文されている破片で、14、16、17は細かな単節ＲＬ縄文が施文されており、橙褐色を呈する。諸磯ａ～ｂ式の古段階に比定されるものと判断される。15はやや大粒の縄文で、原体末端の結節部によるＳ字状回転圧痕が施文される。諸磯ｂ式に比定されるものであろう。

19、20は出土した石器である。19は黒曜石製のくさび形石器である。上下端部それぞれの方向から調整が施されている。

20は砥石である。上辺には、つまみ部を作り出すように、抉りが入っている。表面中央には、溝状に凹みが見られる。右側縁の一部には敲打痕が残されている。



第17図　第３号住居跡出土遺物

第２表　第３号住居跡出土石器観察表（第17図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(ｇ)	備　考
19	ＳＪ３	くさび形石器	黒曜石	2.0	1.7	0.9	2.8	№35
20	ＳＪ３	砥石	砂岩	8.2	4.5	1.4	45.1	№25　赤色化

第４号住居跡（第18、19図）

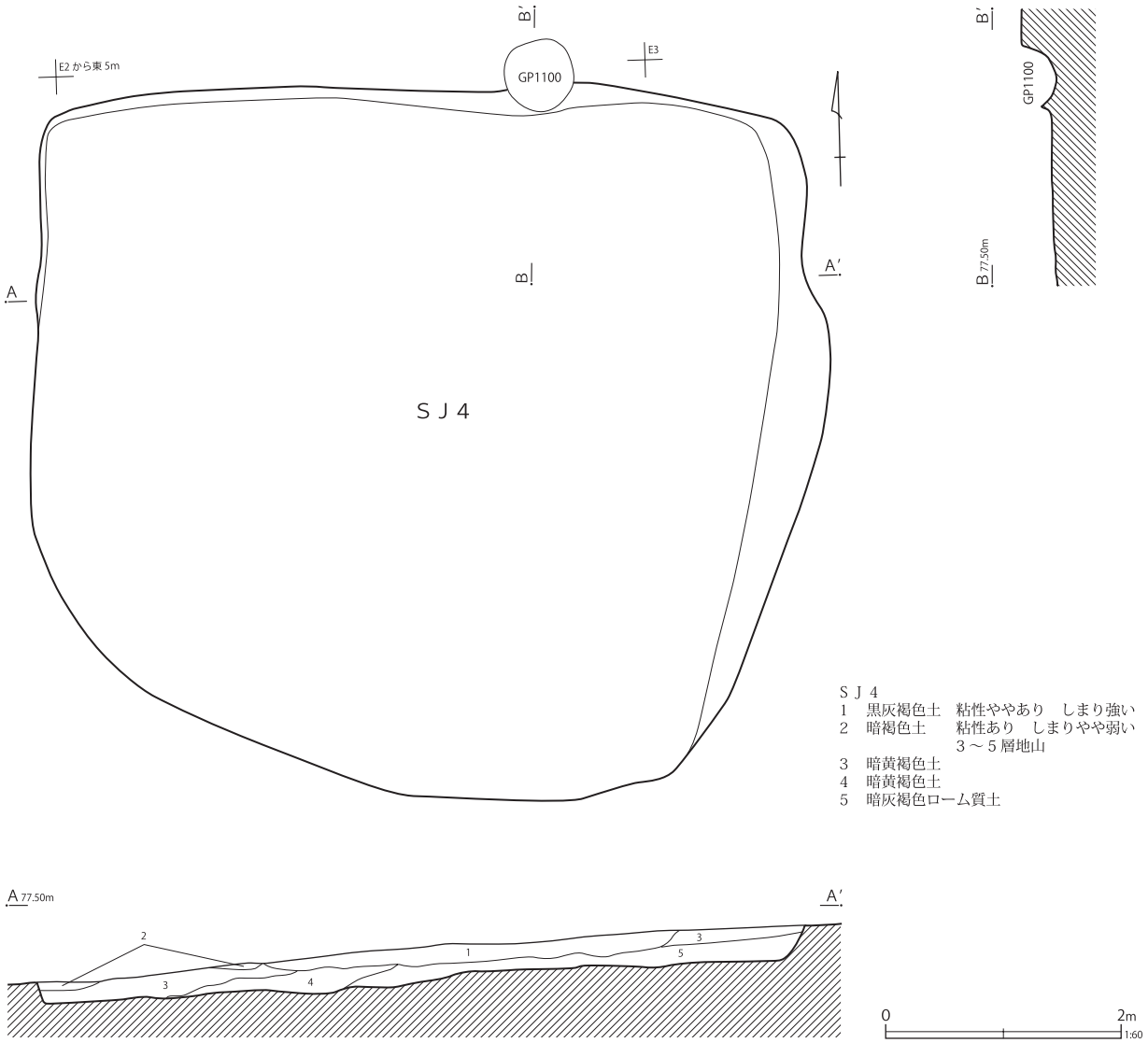
Ｅ－２・３グリッドで、第３号住居跡の南東に位置する。ＧＰ1100と重複し、ピットの方が新しい。第３号住居跡と同様に斜面方向への流出によって削平が進んでおり、西側と南側の壁及び床面の一部が失われている。平面形はやや不整な方形で、残存する規模は長軸の東西方向6.75m、短軸の南北方向5.80m、深さ0.31mである。

住居跡の範囲内からは、炉跡やピットは検出されなかったが、A-A´断面の東側において明瞭な掘り込みを確認したこと、隣接する第３号住居跡とほぼ同規模・同形態であること、遺物が集中して分布すること、斜面地に面していることなどから、住居跡と認定した。

時期は出土遺物より、隣接する第３号住居跡と同様に、縄文時代前期後葉諸磯ｂ式期に属するものと判断される。

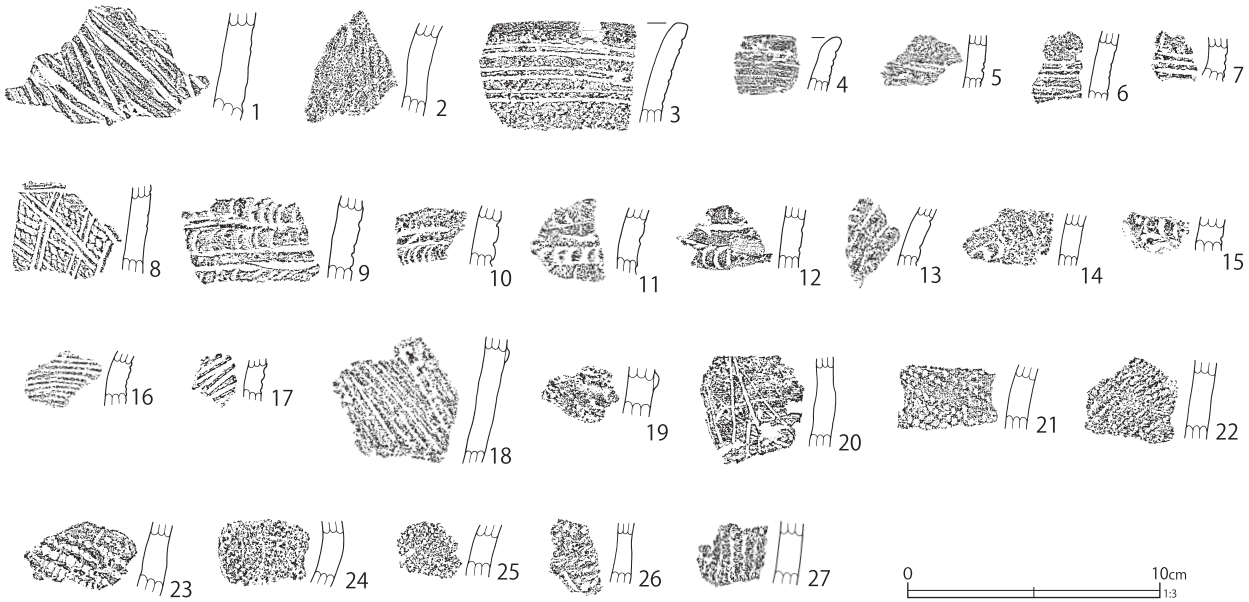
第４号住居跡出土土遺物（第20・21図１～36）

１、２は縄文時代早期後葉の条痕文土器で、器壁に若干の繊維が含まれ、１は外面に深く明瞭な条痕文が施文される。半截竹管を束ねたような施文具による条痕文で、表面は明瞭であるが、裏面は擦痕状を呈する。２は内外面の条痕整形が浅く、条痕文の残りが悪い。口縁部に近い位置の破片で



第18図　第４号住居跡

第19図　第４号住居跡遺物出土状況



第20図　第４号住居跡出土遺物（１）

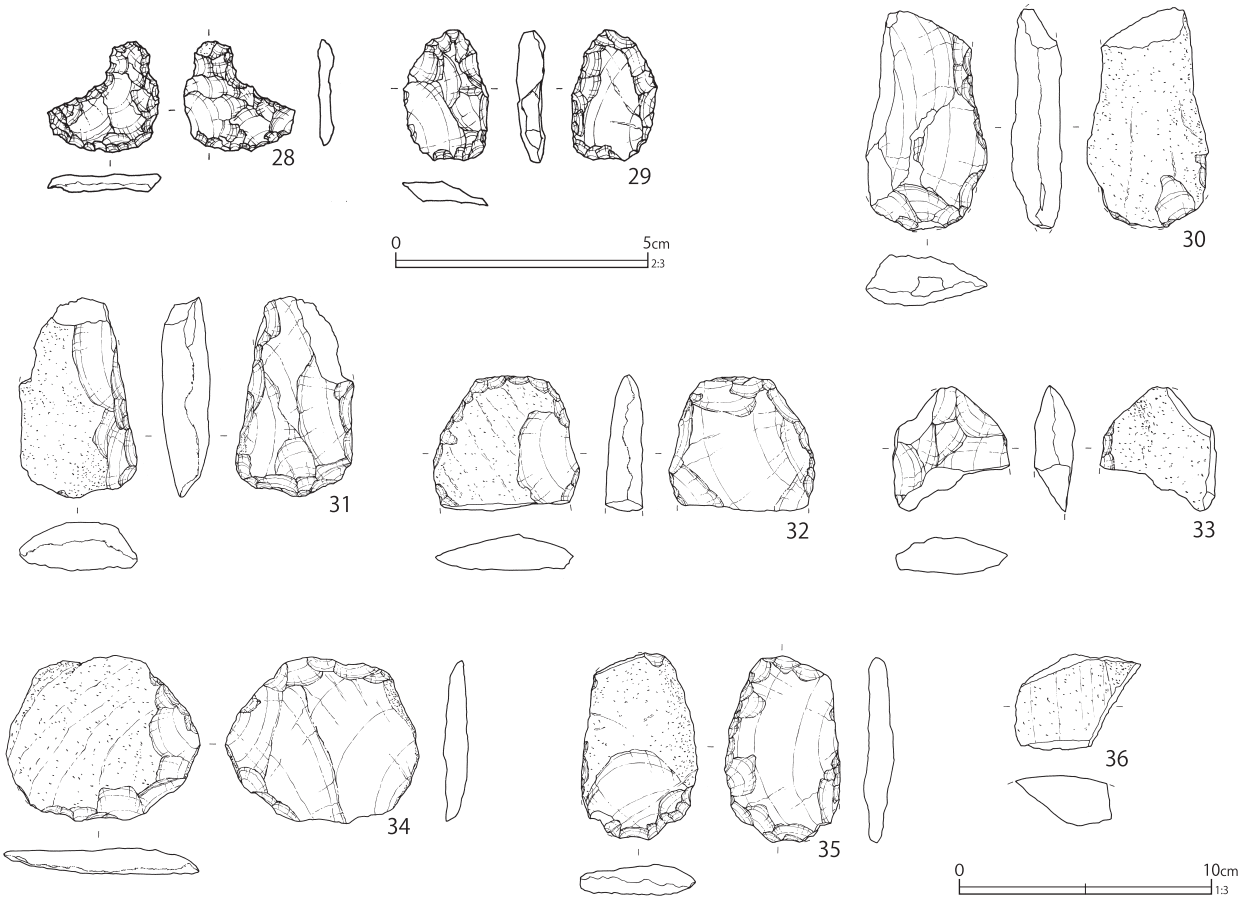
ある。いずれも繊維は少ないが、白色細砂粒が多く含まれている。

３～７は比較的幅の狭い半截竹管の平行沈線が、横位に施文されるものである。３は角頭状の口唇部が外反する口縁部に、３対の横位の平行沈線文が施文されるもので、地文に単節ＬＲ縄文が横位施文されている。口唇上と内面には丁寧なミガキが施されている。

４は先細り状の口縁部が開く器形で、浅い条線状の平行沈線が横位に施文されている、地文縄文は施文されていない。

５～７は頸部から胴部にかけての破片と思われ、細かな平行沈線が施文されている。諸磯ｂ式古段階に比定されよう。

８は平行沈線の横位の区画線下に、同種の平行沈線で斜格子目文が施文されるものである。地文には単節ＲＬ縄文が施文されている。刈羽式に類似する。格子目文は時期幅の長いモチーフであり、



第21図　第４号住居跡出土遺物（２）

第３表　第４号住居跡出土石器観察表（第21図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
28	ＳＪ４	スクレイパー	黒曜石	2.2	2.2	0.4	1.2	№6
29	ＳＪ４	スクレイパー	チャート	2.6	1.7	0.6	1.2	№39
30	ＳＪ４	打製石斧	頁岩	[8.7]	4.8	2.0	91.9	№42
31	ＳＪ４	打製石斧	ホルンフェルス	[7.9]	4.7	1.9	84.0	№40
32	ＳＪ４	打製石斧	ホルンフェルス	[5.3]	5.8	1.5	59.1	№41　風化
33	ＳＪ４	打製石斧	ホルンフェルス	[4.9]	[4.6]	1.6	33.2	№52　一部赤色化
34	ＳＪ４	スクレイパー	ホルンフェルス	6.6	7.7	1.1	62.1	№11　風化
35	ＳＪ４	スクレイパー	砂岩	7.4	4.6	1.2	39.8	№38　やや風化
36	ＳＪ４	磨石	砂岩	[3.8]	[5.0]	[2.0]	38.5	№46　赤色化　一部黒色化

本例は諸磯ｂ式の古段階辺りに比定されるものと思われる。

９～15は平行沈線間に爪形文を施文する土器群で、諸磯ｂ１式からｂ２式に位置付けられるものであろう。９、10は爪形文を施文する平行沈線間の間隔がやや開き、10はこの部分に斜位の刻みが施されている。浮線文土器の先行形態もしくは初現期の土器と思われる。

19は浮線文が施文される土器で、諸磯ｂ２式と判断されるものである。

16、17は条線状の細かな平行沈線が施文される、諸磯ｂ３式の破片である。

18は条線地文上に、結節刺突を施す貼付文が施文される諸磯ｃ式土器である。

20は細沈線で鋸歯状のモチーフが描かれる土器で諸磯ｃ式に比定される沈線文土器と思われる。

21～27は縄文のみが施文されている土器群で、21、23、27はＲＬ縄文、22、24～26はＬＲ縄文が横位施文されている。いずれも諸磯式に伴う土器群であろう。

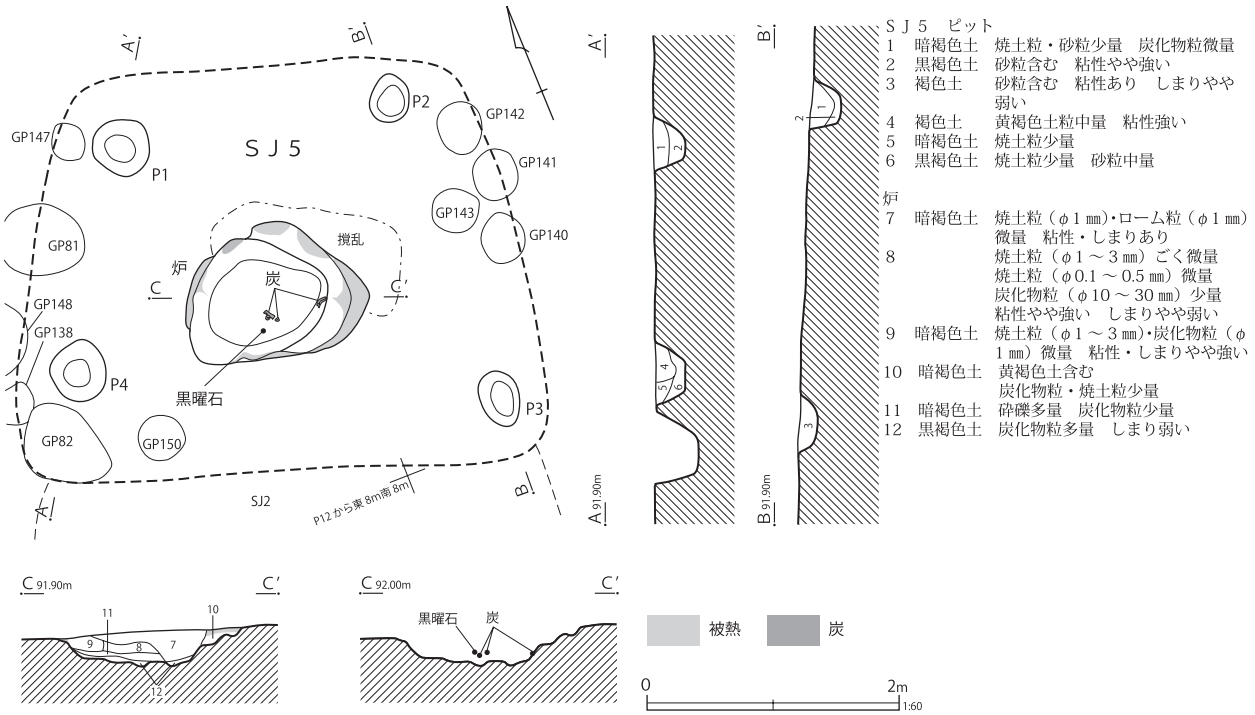
第21図28～36は出土石器である。28、29は小型のスクレイパーである。28はつまみを有しており、丁寧に調整が施されている。30～33は打製石斧で、すべて破損品である。34、35は剥片を利用したスクレイパーで、調整は最低限に施されている。36は磨石の小破片である。

第５号住居跡（第22図）

Ｐ－12グリッドに位置し、第２号住居跡の北側と一部重複するが、新旧関係は不明である。掘り込みは完全に失われており、炉跡とその周辺に分布するピットから住居跡と判断した。平面形は、南側に開く台形状を呈するものと想定される。

炉跡は住居跡のほぼ中央に位置し、推定規模は長径1.48m、短径1.03m、深さ0.31mである。炉床は岩盤層に達する。炉跡の縁辺部で被熱面が確認され、覆土中より黒曜石の剥片が出土した。

土器は出土していないが、第２号住居跡と同様に、前期後葉諸磯ｂ式期の所産であろう。



第22図　第５号住居跡

（２）集石土壙

第１号集石土壙（第23図）

集石土壙は、西尾根Ｄ－５区の土壙群の中で、１基検出された。平面形は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.70m、深さ0.12mである。礫は焼けており、覆土に焼土粒や炭化物粒が少量含まれる。壁面等に被熱面は確認されなかった。遺構の時期を特定する土器は出土していない。

第１号集石土壙出土遺物（第24図１～10）

第24図１～10は、集石土壙から出土した石器類である。いずれも砂岩製の磨石類である。遺構内から出土した礫も、ほとんどが砂岩であった。

また、被熱のため、赤色化や黒色化したものが多くを占めている。破砕したものも多く、小ぶりである１、２、７は完形で、８は表面に細かいひび割れが観察された。１～４は、表裏面に磨面が観察され、１は右側面に平坦な磨面を持っている。

５、６は磨面の他、縁辺に敲打痕が観察された。５は上端に敲打が残るもので、破損した左側面の一部を、磨面として使用している。

６は長径方向に割れており、下端に敲打痕が残る。

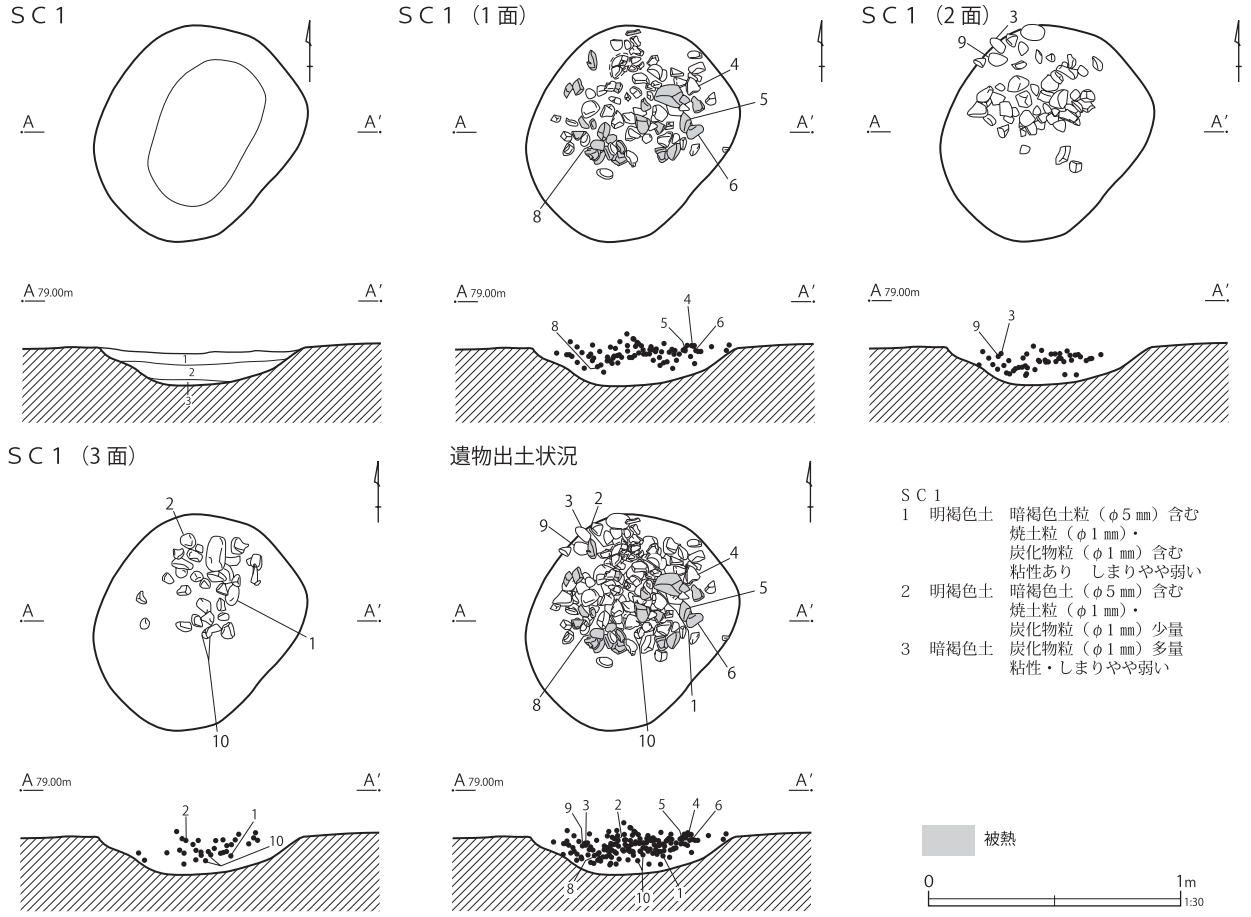
７～10は、磨面に敲打による凹みが観察されたものである。

７は小型の磨石で、横断面が三角形状となるもので、三角の三面を磨面として使用している。平坦面となる裏面に敲打による凹みが認められる。

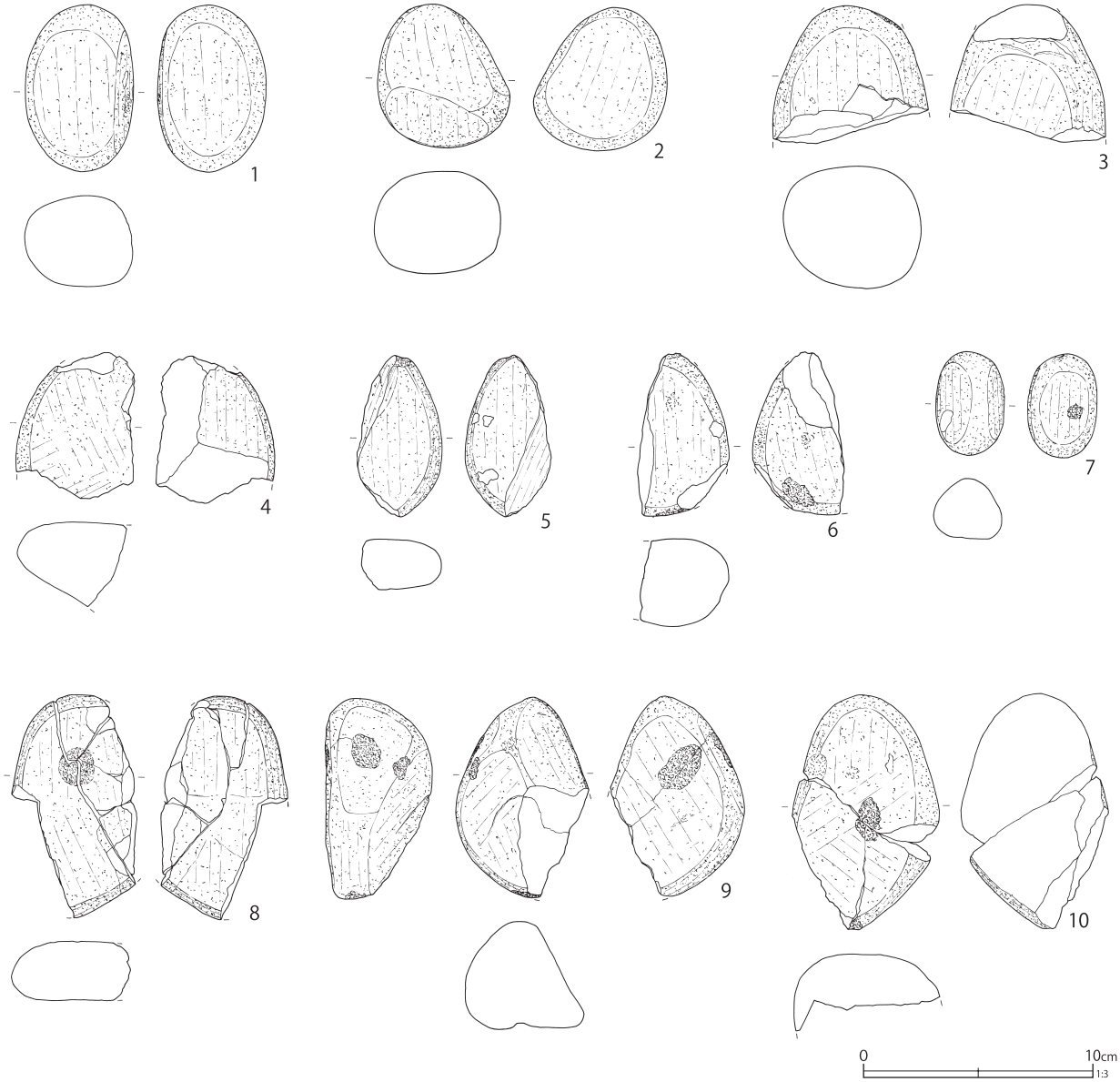
８は表面に敲打による凹みが認められる。

９は７と同様、横断面が三角形状となるもので、それぞれの面を磨面として使用している。敲打による凹みは側面と裏面に認められる。

10は表面中央に敲打による凹みが認められる。



第23図　第１号集石土壙



第24図　第１号集石土壙出土遺物

第４表　集石土壙出土石器観察表（第24図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
1	ＳＣ１	磨石類	砂岩	7.3	4.7	4.1	195.4	№149　一部赤色化
2	ＳＣ１	磨石類	砂岩	6.3	5.8	4.6	197.4	№136　一部赤色化・黒色化
3	ＳＣ１	磨石類	砂岩	[6.0]	[6.8]	44212.0	256.6	№88　赤色化　一部黒色化
4	ＳＣ１	磨石類	砂岩	[6.4]	[5.1]	[3.7]	117.6	№4　赤色化
5	ＳＣ１	磨石類	砂岩	7.0	3.7	2.3	68.2	№2　一部赤色化
6	ＳＣ１	磨石類	砂岩	[7.1]	[4.0]	3.8	124.3	№1
7	ＳＣ１	磨石類	砂岩	4.5	3.0	2.8	50.1	二面　赤色化
8	ＳＣ１	磨石類	砂岩	9.8	[5.5]	2.7	160.4	№30　赤色化
9	ＳＣ１	磨石類	砂岩	[8.7]	[5.8]	4.7	218.7	№87　赤色化　一部黒色化
10	ＳＣ１	磨石類	砂岩	[10.2]	[6.4]	[4.6]	225.0	№155･159　一部赤色化・黒色化

（３）土壙

縄文時代の土壙は、西尾根で第４、６、７、８、11、12、13号土壙の７基、南尾根で第1号土壙１基の、合計８基が検出された。

これらの土壙が遺構確認面からの掘り込みがごく浅いのは、他の遺構と同様に斜面に位置しており、土砂の流出による削平を受けているからと考えられる。

西尾根の端部や、南尾根の平坦面に多くの遺構が集中して残っているのは、これらの土砂の流出の影響を受ける割合が少なかったからであると推測される。

第１号土壙（第25図）

Ｐ－11グリッドに位置する。トレンチ調査によって確認されたが、平面形や規模は不明である。諸磯ｂ式期の縄文土器片が出土している。

第1号土壙出土遺物（第26図１）

１は諸磯ｂ式の沈線文土器の胴部破片で、ＬＲ縄文地文上に、細い半截竹管を束ねた条線文で鋸歯状のモチーフを施文している。諸磯ｂ３式であろう。

第４号土壙（第25図）

Ｃ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.70m、深さ0.15mである。壙底は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第６号土壙（第25図）

Ｄ－３グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.10m、短軸0.60m、深さ0.15mである。壙底は皿状を呈する。

第６号土壙出土遺物（第26図2）

２は出土した磨石である。ごく一部分が残存している。丸みのあるもので、残存部では、磨面として全面を使用している。

第７号土壙（第25図）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.25m、深さ0.15mである。壙底は平坦面で、緩く壁が立ち上がる。時期を判別する遺物は、出土しなかった。

第８号土壙（第25図）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.40m、短軸0.40m、深さ0.10mである。壙底は皿状を呈するが、北西側がピット状に深くなっており、0.20mの深さがある。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第11号土壙（第25図）

Ｄ－３グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸2.00m、短軸1.90m、深さ0.10mである。壙底は皿状を呈し、底面直上から土器片や石器が複数出土している。

第11号土壙出土遺物（第26図３～７）

３は口縁が緩く開く小波状口縁の深鉢で、口縁部に蛇行する無加飾の貼付文を施文し、地文に単節ＬＲ縄文を施文する。波状口縁の右側の口唇部下に、横長の瘤状の貼付文が見られる。

４は細い単節ＬＲ縄文を横位施文し、５は非結束の羽状縄文を施文するもので、一部に異方向の縄文を施文している。

６、７は出土した石器である。いずれも被熱している。

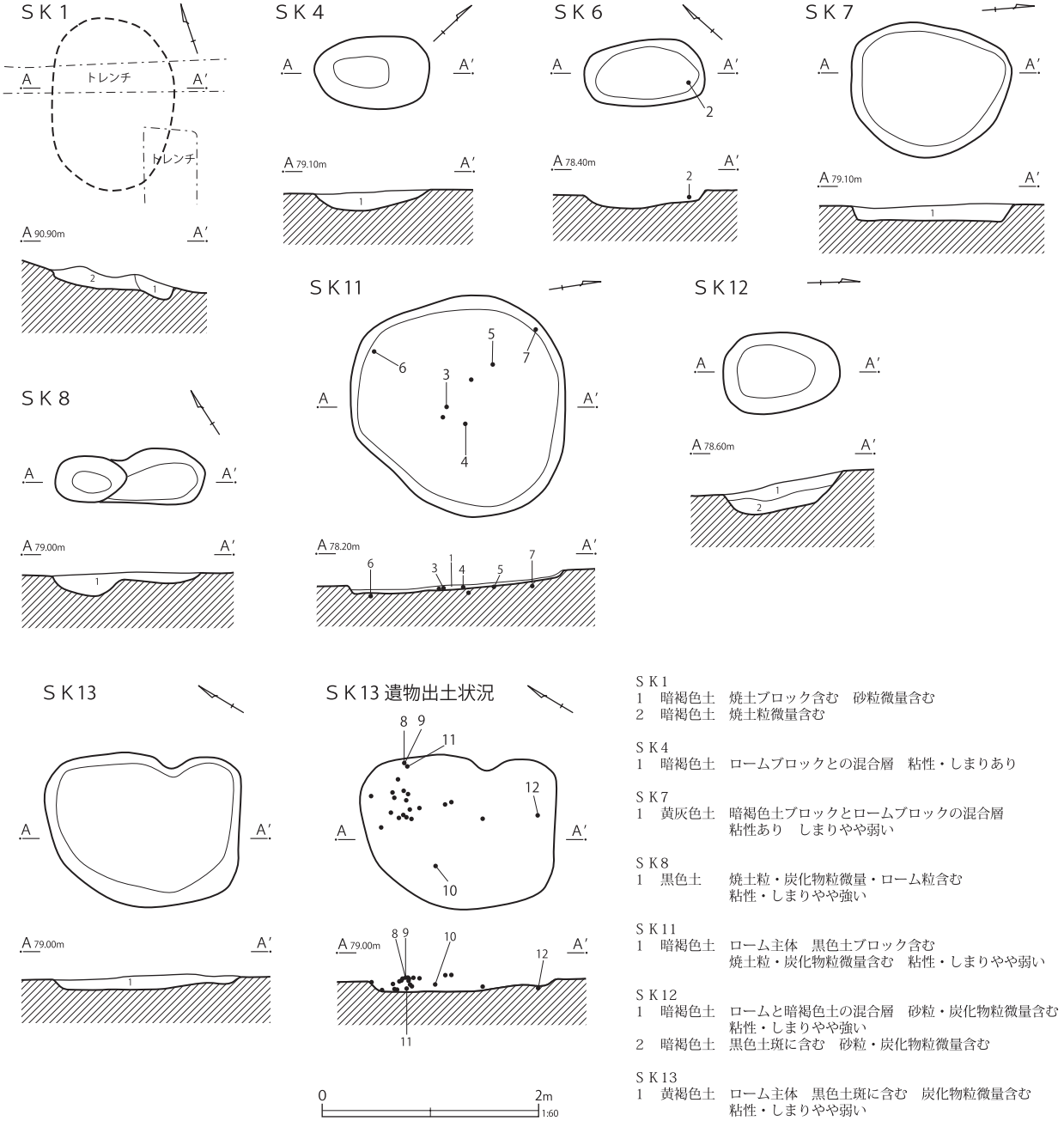
６は横長のスクレイパーである。剥片の端部に粗く調整を施して刃部としている。裏面には、原礫面が大きく残存している。

７は磨石で、ごく一部分が残存している。残存部から、断面が方形状となっていたと推定される。磨面として使用された表面中央には、敲打痕が認められる。

第12号土壙（第25図）

Ｅ－５グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.25mである。壙底は平坦で、壁が緩く立ち上がり、椀型状となっている。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第13号土壙（第25図）



ＳＫ１
1　暗褐色土　焼土ブロック含む　砂粒微量含む
2　暗褐色土　焼土粒微量含む

ＳＫ４
1　暗褐色土　ロームブロックとの混合層　粘性・しまりあり

ＳＫ７
1　黄灰色土　暗褐色土ブロックとロームブロックの混合層
粘性あり　しまりやや弱い

ＳＫ８
1　黒色土　焼土粒・炭化物粒微量・ローム粒含む
粘性・しまりやや強い

ＳＫ11
1　暗褐色土　ローム主体　黒色土ブロック含む
焼土粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや弱い

ＳＫ12
1　暗褐色土　ロームと暗褐色土の混合層　砂粒・炭化物粒微量含む
粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量含む

ＳＫ13
1　黄褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　炭化物粒微量含む
粘性・しまりやや弱い

第25図　土壙

第５表　土壙一覧表

遺構番号	グリッド	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
ＳＫ１	Ｐ－11	－	(1.62)	(1.13)	0.18	Ｎ－17°－Ｗ		
ＳＫ４	Ｃ－４	楕円形	1.05	0.70	0.15	Ｎ－43°－Ｅ		
ＳＫ６	Ｄ－３	隅丸長方形	1.10	0.60	0.15	Ｎ－51°－Ｗ		
ＳＫ７	Ｄ－４	不整円形	1.50	1.25	0.15	Ｎ－４°－Ｅ		
ＳＫ８	Ｄ－４	不整形	1.40	0.40	0.20	Ｎ－59°－Ｗ		
ＳＫ11	Ｄ－３	不整円形	2.00	1.90	0.10	Ｎ－６°－Ｅ		
ＳＫ12	Ｅ－５	楕円形	1.05	0.75	0.25	Ｎ－２°－Ｅ		
ＳＫ13	Ｄ－４	不整形	1.90	1.30	0.10	Ｎ－６°－Ｗ		

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.90m、長軸1.30m、深さ0.10mである。壙底は皿状を呈する。遺構の北側から遺物が出土した。

第13号土壙出土遺物（第26図８～13）

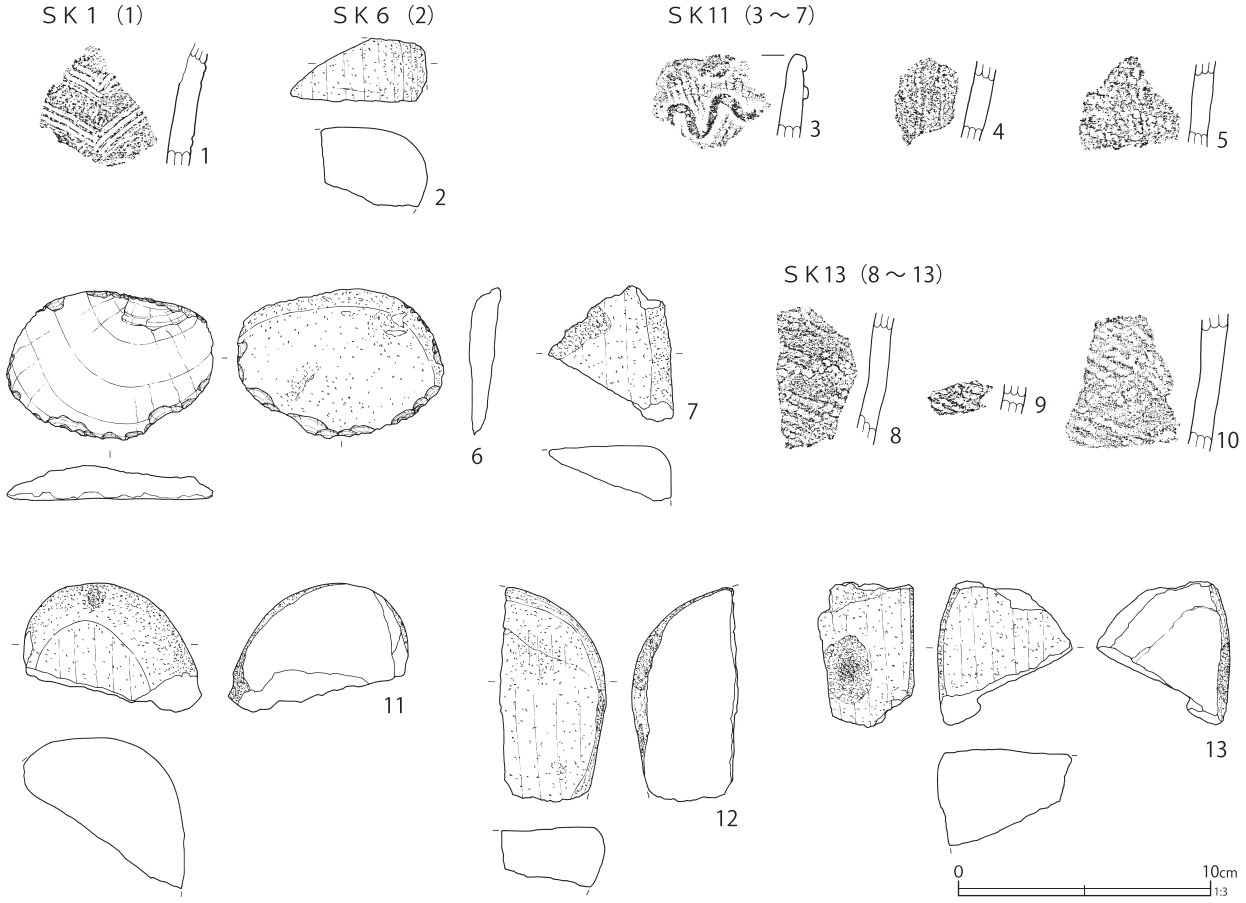
８～10は深鉢形土器の胴部破片で、同一個体である。胴部に単節ＲＬ縄文を横位施文する。諸磯ｂ式土器であろう。

11～13は出土した磨石類である。いずれも破損している。

11は厚みのある磨石で、表面の平坦面を磨面として使用している。裏面は破損している。側縁には敲打痕が認められる。

12は表面が平坦となっており、磨面として使用されている。わずかに残存する側縁には敲打痕が認められる。裏面は破損している。

13は磨石の中央破片で、残存する表面と側面が平坦となっており、磨面として使用されている。左側面の中央部分には、敲打による凹みが施されている。



第26図　土壙出土遺物

第６表　土壙出土石器観察表（第26図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
2	ＳＫ６	磨石類	砂岩	[2.5]	[5.4]	[3.2]	44.4	№11
6	ＳＫ11	スクレイパー	砂岩	5.9	8.2	1.4	64.5	№4　一部赤色化
7	ＳＫ11	磨石類	砂岩	[5.4]	[4.9]	[2.3]	46.9	№7　赤色化
11	ＳＫ13	磨石類	砂岩	[5.1]	[7.1]	[6.3]	187.4	№5　赤色化
12	ＳＫ13	磨石類	砂岩	[8.5]	[4.2]	[2.6]	113.8	№21　一部赤色化
13	ＳＫ13	磨石類	安山岩	[5.7]	[5.3]	[3.8]	110.9	

（４）焼土跡

被熱面が確認された遺構、もしくは、焼土粒子が一定量含まれていた遺構について、本遺跡では焼土跡とした。焼土跡は、合計25基検出され、そのうち第19・20・26号焼土跡の３基から、縄文土器片が出土した。いずれも、縄文時代の住居跡の周辺に分布する。

焼土跡は住居跡の炉跡、もしくは縄文時代早期の炉穴である可能性も想定された。しかし、調査区内より縄文時代早期の遺物は出土しているものの、焼土跡からの出土は認められなかった。

また、第６・12号焼土跡からは縄文時代以外の遺物等が出土しており、また遺物が出土しないものも多いため、時期や用途は不明であるが、焼土跡として一括して縄文時代の項にまとめて掲載することとした。

第１号焼土跡（第27図）

Ｅ－14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.25m、短軸0.40m、深さ0.18mである。底面は凹凸状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第２号焼土跡（第27図）

Ｅ－14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.60m、短軸0.66m、深さ0.25mである。底面は２段掘り状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第３号焼土跡（第27図）

Ｇ－15グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.62m、短軸0.50m、深さ0.18mである。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第４号焼土跡（第27図）

Ｉ－15グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸3.84m、短軸2.30m、深さ0.25mである。６・７層は被熱により地山が変質した層と考えられる。１層と４層上面において赤褐色化および硬化が認められ、２段階の被熱が想定される。底面は波打っている。時期を判別する、遺物は出土していない。

第５号焼土跡（第27図）

Ｍ－14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸0.90m、短軸0.42m、深さ0.19mである。明瞭な掘り込みは確認できなかった。時期を判別する、遺物は出土していない。

第６号焼土跡（第27図）

Ｍ－13グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.90m、短軸1.40m、深さ0.25mである。底面は皿状を呈する。出土した炭化材１点の自然科学分析を行ったところ、平安時代前期～中期との年代が得られた。

第７号焼土跡（第27図）

Ｍ－12グリッドに位置する。北西側の一部が調査区外に位置する。平面形は楕円形と推測され、規模は長軸1.24m、短軸1.10m、深さ0.28mである。底面は平坦である。時期を判別する、遺物は出土していない。

第８号焼土跡（第27図）

Ｍ－12グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形であろう。規模は、長軸0.78m、短軸0.65m、深さは0.30mである。底面は平坦で、壁が直に立ち上がる。時期を判別する、遺物は出土していない。

第９号焼土跡（第27図）

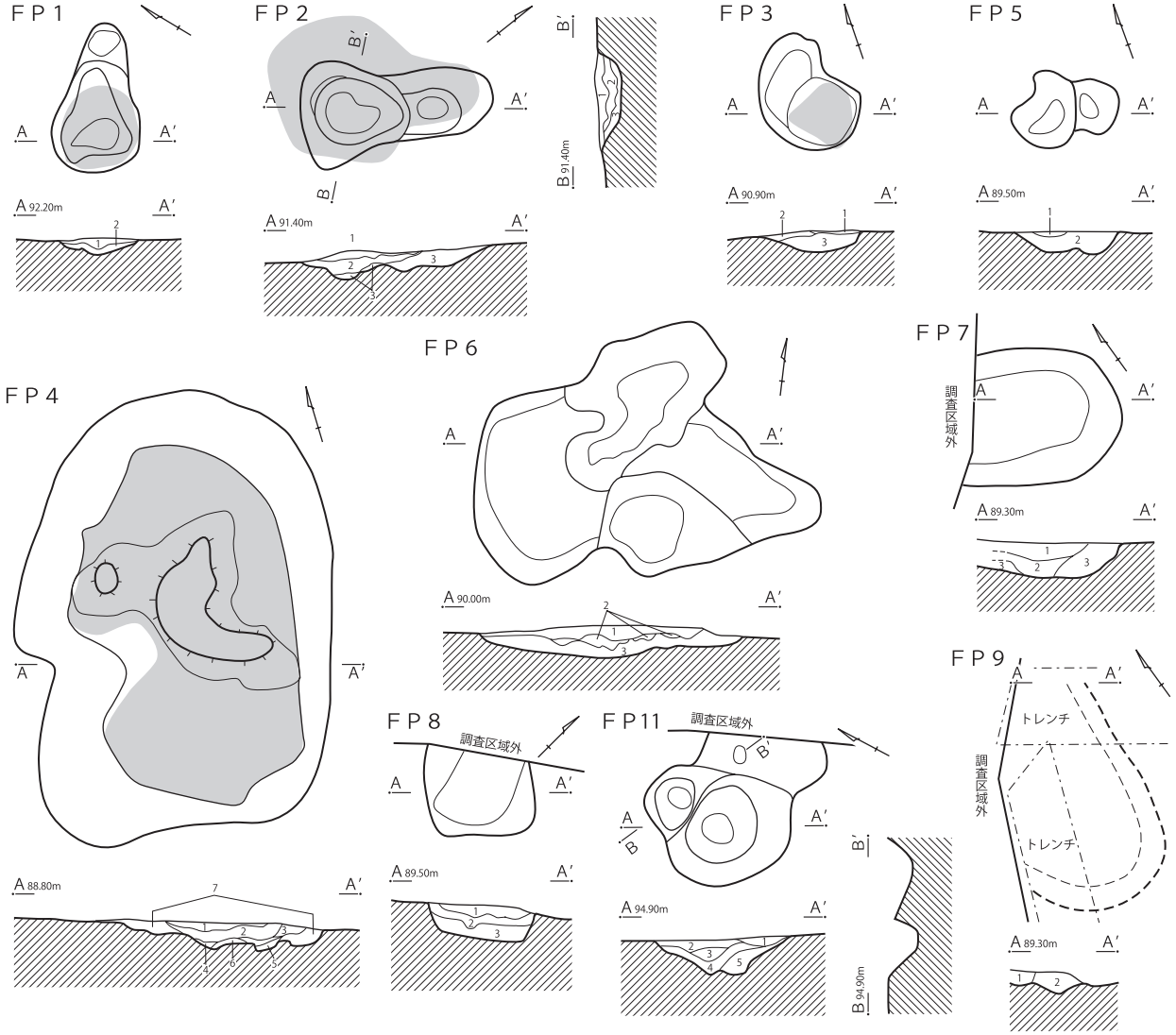
Ｎ－12グリッドに位置する。北西側の一部が調査区外に位置する。壁面の土層観察により存在が確認された。規模は、深さ0.30mである。時期を判別する、遺物は出土していない。

第11号焼土跡（第27図）

Ｆ－21グリッドに位置する。北東側の一部が調査区外に位置する。平面形態は不整形で、規模は長軸1.35m、短軸0.90m、深さ0.30mである。底面は凹凸があり、時期を判別する、遺物は出土していない。

第12号焼土跡（第28図）

Ｆ－20グリッドに位置する。第１号溝跡と重複



ＦＰ１
1　淡黄褐色土　赤褐色焼土を主体とする　被熱により赤色化
　　粘性ややあり　しまり弱い
2　淡黄褐色土　被熱により一部赤色化

ＦＰ２
1　暗黄灰色土　被熱により赤褐色化　地山岩盤ブロック含む
　　炭化物粒微量　粘性わずか　しまり弱い
2　暗黄灰色土　１層より被熱弱い　炭化物粒微量
3　暗黄褐色土　岩盤砕片多量　炭化物粒・焼土粒少量
　　粘性やや強い　しまりあり

ＦＰ３
1　赤褐色土　被熱により赤褐色化
2　赤褐色土　１層より被熱やや弱い
3　赤褐色土　地山岩盤ブロック含む　被熱により赤褐色化

ＦＰ４
1　にぶい赤褐色土　白色粒極めて多量　小石微量　被熱により硬化
　　粘性弱い　しまり極めて強い
2　赤褐色土　焼土ブロック・炭化物粒多量　白色粒中量　粘性・しまりあり
3　にぶい黄褐色土　白色粒多量　焼土粒少量　粘性・しまりあり
4　赤褐色土　被熱により赤色化・硬化　粘性弱い　しまり強い
5　にぶい黄褐色土　炭化物粒多量　ローム粒微量　粘性・しまりあり
6　明黄褐色土　焼土粒微量　粘性弱い　しまりあり
7　灰黄褐色土　岩盤層のブロック多量　炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

ＦＰ５
1　褐色土　被熱により赤褐色化　炭化物粒ごく微量
　　粘性やや弱い　しまりあり
2　褐色土　ローム粒少量　焼土粒・炭化物粒ごく微量
　　粘性やや弱い　しまりあり

ＦＰ６
1　暗赤褐色土　炭化材片・炭化物粒・焼土ブロック含む
　　粘性ややあり　しまり弱い
2　暗灰褐色土　１層と３層土の混土層　粘性あり　しまりややあり
3　暗黄灰褐色土　炭化物粒含む　焼土粒微量　粘性やや強い　しまりややあり

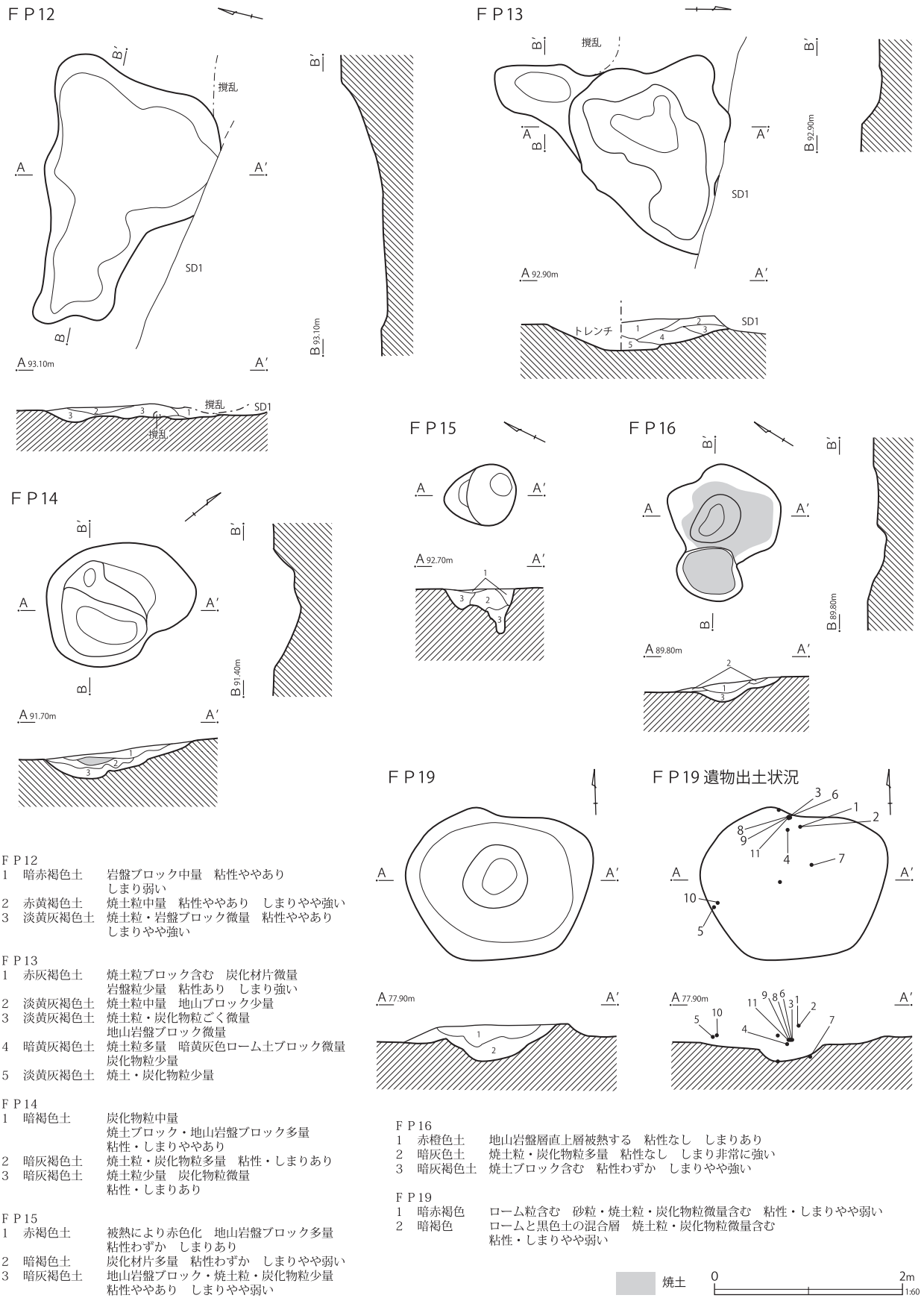
ＦＰ７
1　赤褐色土　焼土を主体とする　暗褐色土斑に含む　炭化物粒微量
　　粘性強い　しまりやや弱い
2　明褐色土　焼土ブロック斑に含む　炭化物粒微量　粘性強い　しまりやや弱い
3　明褐色土　焼土粒微量　粘性強い　しまりやや弱い

ＦＰ８
1　明褐色土　As-Aが被覆する　焼土ブロック・炭化物粒少量
　　黄色土ブロック微量　As-A微量　粘性・しまりあり
2　暗褐色土　炭化物粒微量　焼土ブロック斑に含む
3　黄褐色土　焼土粒・炭化物微量

ＦＰ９
1　明褐色土　焼土を主体とする　粘性・しまりあり
2　暗褐色土　焼土粒微量

ＦＰ11
1　赤黄褐色土　炭化物粒微量　焼土粒多量　淡黄褐色土被熱により赤色化
　　粘性あり　しまりやや強い
2　淡黄褐色土　焼土粒多量　粘性ややあり　しまりやや強い
3　赤黄褐色土　被熱により赤色化　焼土粒多量　炭化物粒少量
　　粘性ややあり　しまりやや強い
4　淡黄灰褐色土　焼土粒中量　炭化物粒微量　粘性ややあり　しまりやや強い
5　暗黄灰褐色土　焼土粒子・炭化物粒微量　粘性あり　しまりややあり

第27図　焼土跡（１）



F P 12
1　暗赤褐色土　岩盤ブロック中量　粘性ややあり
　　しまり弱い
2　赤黄褐色土　焼土粒中量　粘性ややあり　しまりやや強い
3　淡黄灰褐色土　焼土粒・岩盤ブロック微量　粘性ややあり
　　しまりやや強い

F P 13
1　赤灰褐色土　焼土粒ブロック含む　炭化材片微量
　　岩盤粒少量　粘性あり　しまり強い
2　淡黄灰褐色土　焼土粒中量　地山ブロック少量
3　淡黄灰褐色土　焼土粒・炭化物粒ごく微量
　　地山岩盤ブロック微量
4　暗黄灰褐色土　焼土粒多量　暗黄灰色ローム土ブロック微量
　　炭化物粒少量
5　淡黄灰褐色土　焼土・炭化物粒少量

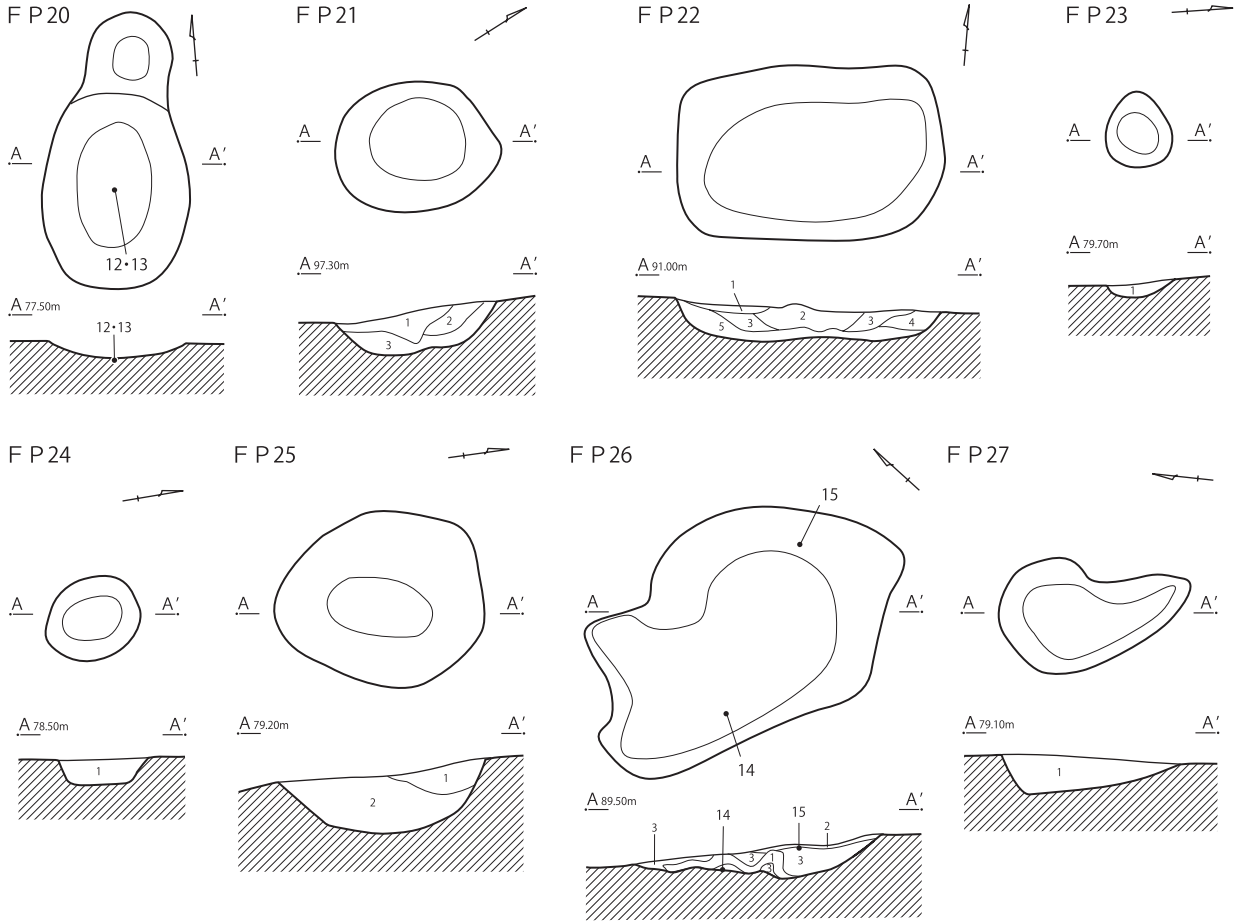
F P 14
1　暗褐色土　炭化物粒中量
　　焼土ブロック・地山岩盤ブロック多量
　　粘性・しまりややあり
2　暗灰褐色土　焼土粒・炭化物粒多量　粘性・しまりあり
3　暗灰褐色土　焼土粒少量　炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

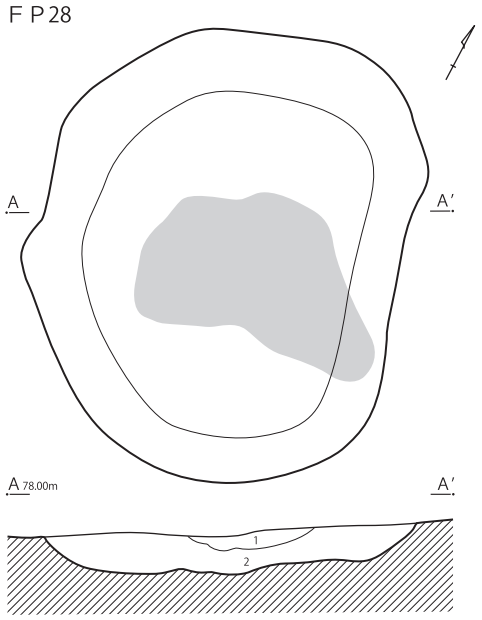
F P 15
1　赤褐色土　被熱により赤色化　地山岩盤ブロック多量
　　粘性わずか　しまりあり
2　暗褐色土　炭化材片多量　粘性わずか　しまりやや弱い
3　暗灰褐色土　地山岩盤ブロック・焼土粒・炭化物粒少量
　　粘性ややあり　しまりやや弱い

F P 16
1　赤橙色土　地山岩盤層直上層被熱する　粘性なし　しまりあり
2　暗灰色土　焼土粒・炭化物粒多量　粘性なし　しまり非常に強い
3　暗灰褐色土　焼土ブロック含む　粘性わずか　しまりやや強い

F P 19
1　暗赤褐色　ローム粒含む　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや弱い
2　暗褐色　ロームと黒色土の混合層　焼土粒・炭化物粒微量含む
　　粘性・しまりやや弱い

第28図　焼土跡（2）





F P 21
1　暗褐色　　焼土ブロック・ローム粒含む　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量含む
　　粘性・しまりやや強い
2　黄灰色　　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや強い
3　黄褐色　　黒色土斑に含む　粘性・しまりやや強い

F P 22
1　暗褐色土　　粘性ややあり　しまり弱い
2　暗褐色土　　炭化物粒微量　粘性ややあり　しまりやや強い
3　暗黄灰色土　焼土粒・地山岩盤ブロック・炭化物粒含む　粘性ややあり　しまりあり
4　暗灰褐色土　地山岩盤ブロック少量　粘性ややあり　しまり弱い
5　灰色土　　地山岩盤ブロック多量　粘性ややあり　しまりあり

F P 23
1　暗赤褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや強い

F P 24
1　暗赤褐色土　焼土ブロック・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや弱い

F P 25
1　暗赤褐色土　ロームを主体とする　暗褐色土斑に含む
　　焼土ブロック・炭化物粒微量含む　粘性・しまりあり
2　暗褐色土　　黒色土粒少量・焼土ブロック・炭化物粒微量含む　粘性・しまりあり

F P 26
1　暗赤褐色土　焼土粒・炭化物粒微量　粘性わずか　しまりなし
2　淡灰褐色土　粘性ややあり　しまり弱い
3　暗褐色土　　ロームブロック含む

F P 27
1　暗褐色土　　焼土粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや強い

F P 28
1　赤褐色土　　焼土粒・礫含む
2　暗褐色土　　礫少量・砂粒・焼土粒・炭化物粒微量含む　粘性・しまりやや強い

焼土　0　2m　1:60

第29図　焼土跡（3）

し、本遺構の方が古い。平面形は不整形で、規模は長軸2.87m、短軸0.60m、深さ0.31mである。底面は波打っている。近世の石材が出土している。遺物は中近世のグリッド遺物として掲載した。

第13号焼土跡（第28図）

Ｆ－20グリッドに位置する。第1号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整形で、規模は遺存値で長軸0.04m、短軸0.60m、深さ0.31mである。底面は緩い凹凸がある。時期を判別する、遺物は出土していない。

第14号焼土跡（第28図）

Ｆ－14グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.25m、深さ0.25mである。底面は凹凸状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第15号焼土跡（第28図）

Ｄ－14グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.54m、深さ0.49mである。底面はピット状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第16号焼土跡（第28図）

Ｃ－12グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.45m、短軸0.72m、深さ0.20mである。底面は緩く窪む。時期を判別する、遺物は出土していない。

第19号焼土跡（第28図）

Ｅ－４グリッドに位置する。西尾根端部においてピットが多数分布する範囲からわずかに外れた、南に向かって傾斜する斜面上に立地する。平面形は不整円形で、規模は長径1.90m、短径1.50m、深さ0.37mである。底面は中央部に、浅いピット状の窪みを有する。覆土第１層に、焼土粒および炭化物粒が微量含まれていた。

出土遺物より、縄文時代前期後葉諸磯ｂ式期に属するものと考えられる。

第19号焼土跡出土遺物（第30図１～11）

１は若干内湾して開く波状口縁を呈し、肥厚する口唇部に押圧状の刻みを施す。口縁部には波状に沿って４段の爪形文を施文する。２～７は口縁部が開く深鉢形土器の胴部破片で、前期諸磯ｂ式の爪形文土器である。８は口唇部が内側に変形する諸磯ｂ３式であろう。10、11は縄文施文土器で、10は非結束の羽状縄文で、末端結節処理の回転文が施文される。11はＲＬ縄文の横位施文である。

第20号焼土跡（第29図）

Ｅ－３グリッドに位置する。第19号焼土跡の南西方向に隣接する。西尾根端部の南に向かって傾斜する斜面地上に立地する。平面形は不整形で、規模は長軸2.20m、短軸0.65m、深さ0.08mである。南北に長い楕円形の掘り込みの北側に円形でピット状の掘り込みがある。掘り込みの底面に被熱面は確認されなかった。

第20号焼土跡出土遺物（第30図12、13）

12は先細り状の口縁部が開き、口縁部に斜位の集合細沈線を施す。13はＲＬ縄文を施文する。

第21号焼土跡（第29図）

Ｄ－５・６グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.30m、短軸1.03m、深さ0.31である。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第22号焼土跡（第29図）

Ｑ－13グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.38m、深さ0.25mである。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第23号焼土跡（第29図）

Ｄ－５グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.10mである。底面は浅い窪み状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第24号焼土跡（第29図）

Ｄ－３グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸0.80m、短軸0.65m、深さ0.20mである。底面は平坦である。時期を判別する、遺物

は出土していない。

第25号焼土跡（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.40m、深さ0.45mである。底面は緩く窪む。時期を判別する、遺物は出土していない。

第26号焼土跡（第29図）

Ｏ－11グリッドに位置する。南尾根における第２・５号住居跡の北西方向に位置し、西側に向かって傾斜する斜面上に立地する。周辺におけるピットの分布はごくわずかである。

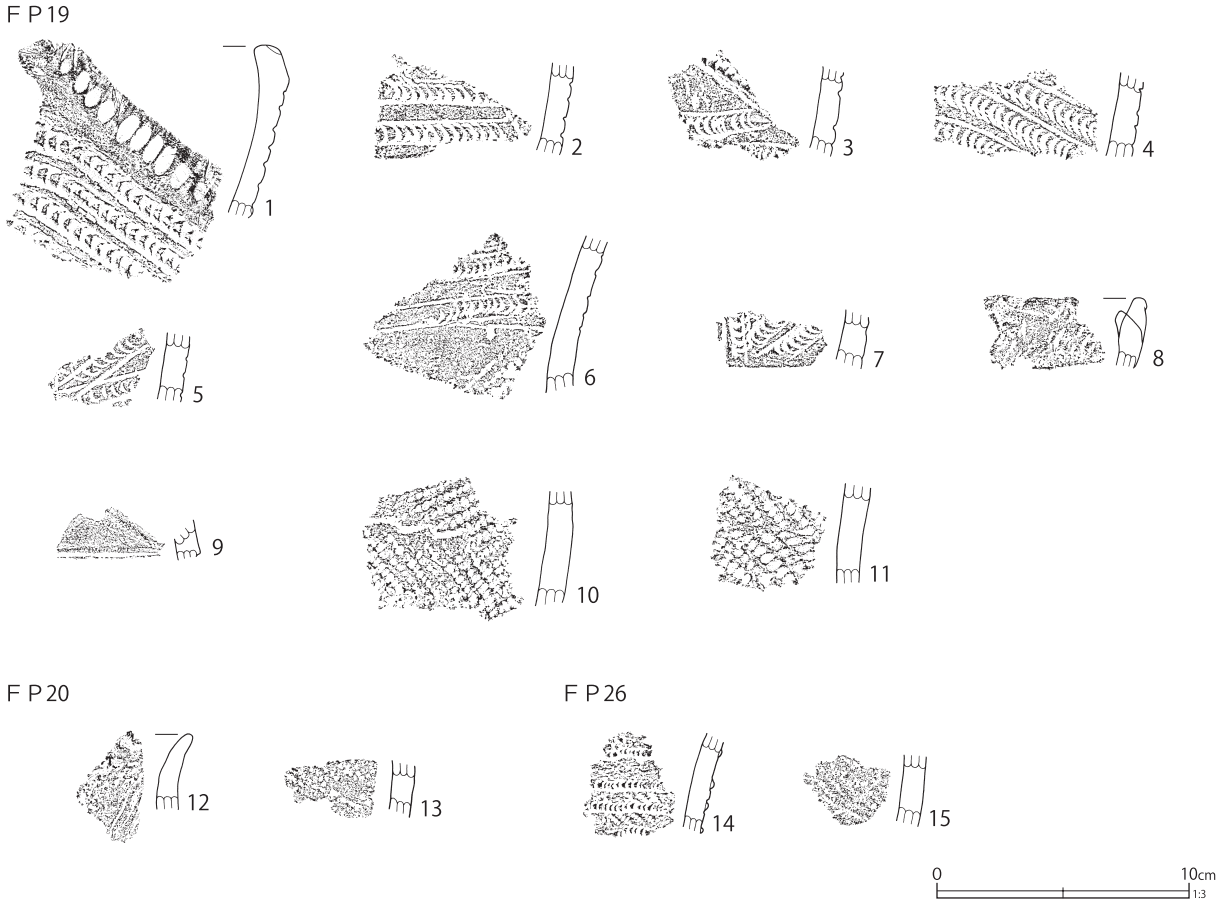
平面形は不整形で、規模は長軸2.75m、短軸1.33m、深さ0.25mである。第３層中に焼土粒および炭化物粒がわずかに含まれていた。出土遺物より、縄文時代前期終末に属すると考えられる。

第７表　焼土跡一覧表

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
ＦＰ1	Ｅ－14	1.25	0.40	0.18
ＦＰ2	Ｆ－14	1.60	0.66	0.25
ＦＰ3	Ｇ－15	1.02	0.50	0.18
ＦＰ4	Ｈ・Ｉ－15	3.84	2.30	0.25
ＦＰ5	Ｍ－14	0.90	0.42	0.19
ＦＰ6	Ｍ－13	2.90	1.40	0.25
ＦＰ7	Ｍ－12	0.24	0.10	0.28
ＦＰ8	Ｍ－12	0.78	0.65	0.30
ＦＰ9	Ｎ－12	－	－	0.30

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
ＦＰ11	Ｆ－21	1.35	0.90	0.30
ＦＰ12	Ｆ－20	2.87	0.78	0.27
ＦＰ13	Ｆ－20	(2.70)	0.60	0.31
ＦＰ14	Ｆ－14	1.60	1.25	0.25
ＦＰ15	Ｄ－14	0.75	0.54	0.49
ＦＰ16	Ｃ－12	1.45	0.72	0.20
ＦＰ19	Ｅ－4	1.90	1.50	0.37
ＦＰ20	Ｅ－3	2.20	0.65	0.08

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
ＦＰ21	Ｄ－6	1.30	1.03	0.31
ＦＰ22	Ｑ－13	2.10	1.38	0.25
ＦＰ23	Ｄ－5	0.60	0.50	0.10
ＦＰ24	Ｄ－3	0.80	0.65	0.20
ＦＰ25	Ｄ－4	1.65	1.40	0.45
ＦＰ26	Ｏ－11	2.75	1.33	0.25
ＦＰ27	Ｄ－4	1.52	0.65	1.30
ＦＰ28	Ｅ－6	3.66	2.87	0.32



第30図　焼土跡出土遺物

第26号焼土跡出土遺物（第30図14、15）

14は地文ＲＬ縄文に横位の結節浮線文を４本施文する十三菩提式土器である。15は単節ＲＬ縄文を横位施文する。

第27号焼土跡（第29図）

Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.52m、短軸0.65m、深さ0.30mである。底面は、傾斜を持つ平坦面を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第28号焼土跡（第29図）

Ｅ－６グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸3.60m、短軸2.40m、深さ0.30mである。１層が被熱面に相当する。A-A´セクションラインより南側は攪乱によって壊されており、本遺構由来と思われる焼土ブロックや炭化物粒が二次堆積していた。

（５）遺物包含層

遺物包含層は、西尾根および南尾根において確認された。西尾根において確認されたものをＡ区遺物包含層、南尾根において確認されたものをＢ区遺物包含層とした。

Ａ区遺物包含層は、西尾根端部の西側斜面と南側斜面に形成されていた（第31図）。両斜面の遺物の分布状況を比較すると、西側斜面はややまばらな状況であるのに対して、南側斜面は密に分布する状況である。特に、第19・20号焼土跡周辺への集中が著しく、調査当初住居跡の存在も検討されたが、住居跡とは認定できなかった。南側斜面に面して第３・４号住居跡が立地しており、遺物包含層にはこの住居跡より流出した遺物が含まれているものと想定された。

Ｂ区遺物包含層は、分布の濃淡はあるものの、南尾根を囲む斜面地全域に形成されていた（第32図）。南尾根先端部の南西側の斜面では遺物がまばらで、西側斜面と南東側斜面では密に分布していた。なかでも、①第２・５号住居跡の西から南西部周辺と、②東西のＴグリッドライン周辺に遺物の集中が確認できる。①については、第２・５号住居跡からの流出した遺物によって、遺物包含層が形成されたものと推察される。②については、周辺に住居跡等の遺構は確認できなかったが、かつては②周辺の頂部に縄文時代の遺構が存在した可能性に留意しておきたい。

Ａ区遺物包含層出土縄文土器（第33～35図）

Ａ区出土の縄文時代の土器群は、前期を主体にして早期から中期までが含まれている。時代で群分けし、型式を類別して説明を加える。

第Ⅰ群土器（第33図１～11）

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。胎土に繊維を少量含み、内外面に貝殻腹縁による条痕整形を施す土器群である。１は刺突文を施した低隆帯で口縁部文様帯を区画するもので、茅山下層の新しい段階から茅山上層式の古い段階に位置付けられよう。２～４は口縁部破片で、２、３の口唇部には刻みを施し、４は浅い沈線を巡らす。４は時期が古くなる可能性もある。５～10は胴部破片で、11は小さな平底を呈する底部破片である。

第Ⅱ群土器（第33図12～54、第34図55～106、第35図107～139）

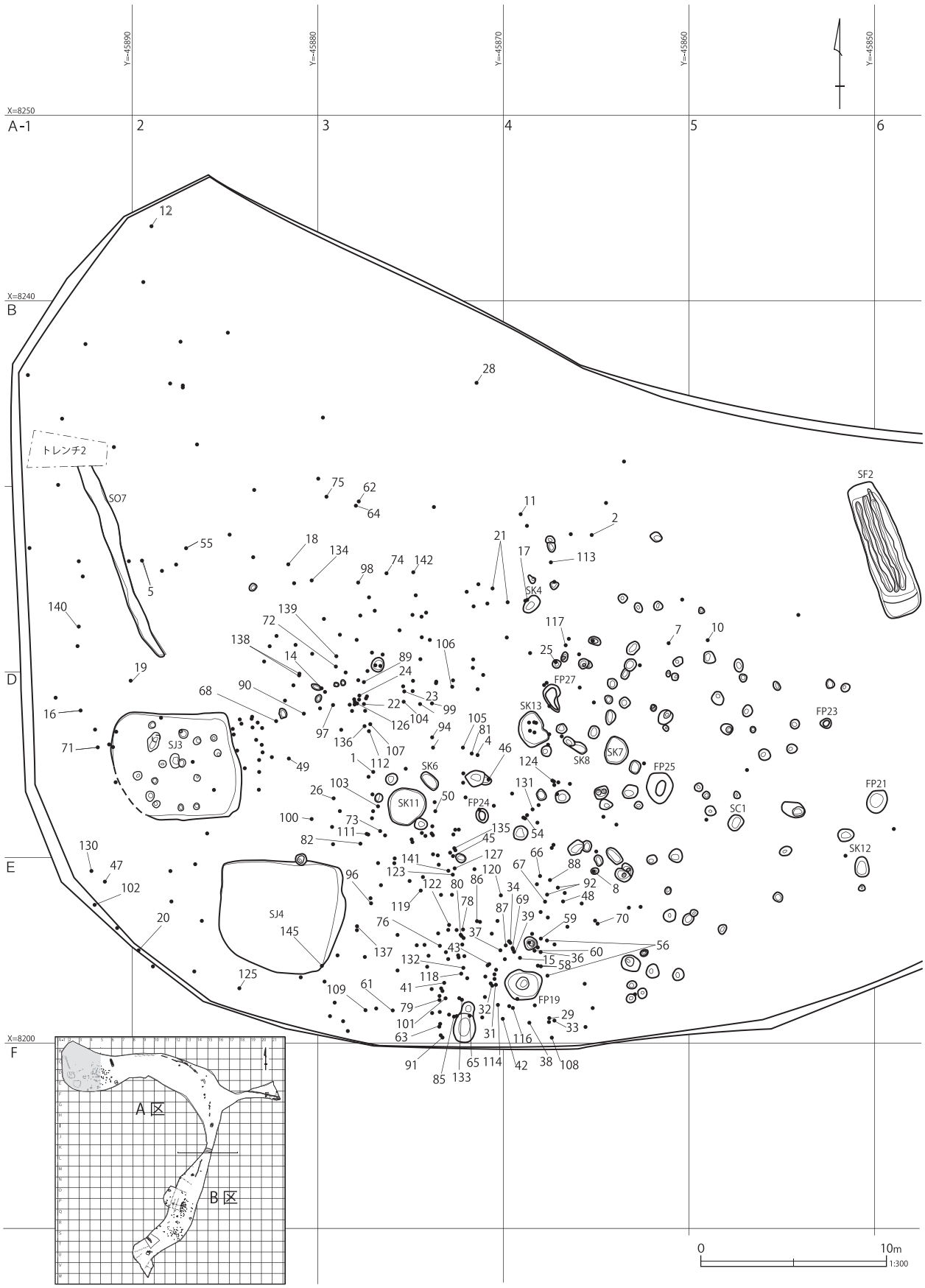
前期の土器群を一括する。

第１類（12～14）

前期中葉の繊維土器である、黒浜式土器を一括する。器壁に繊維をやや多めに含み、単節ＲＬ縄文を横位施文する。

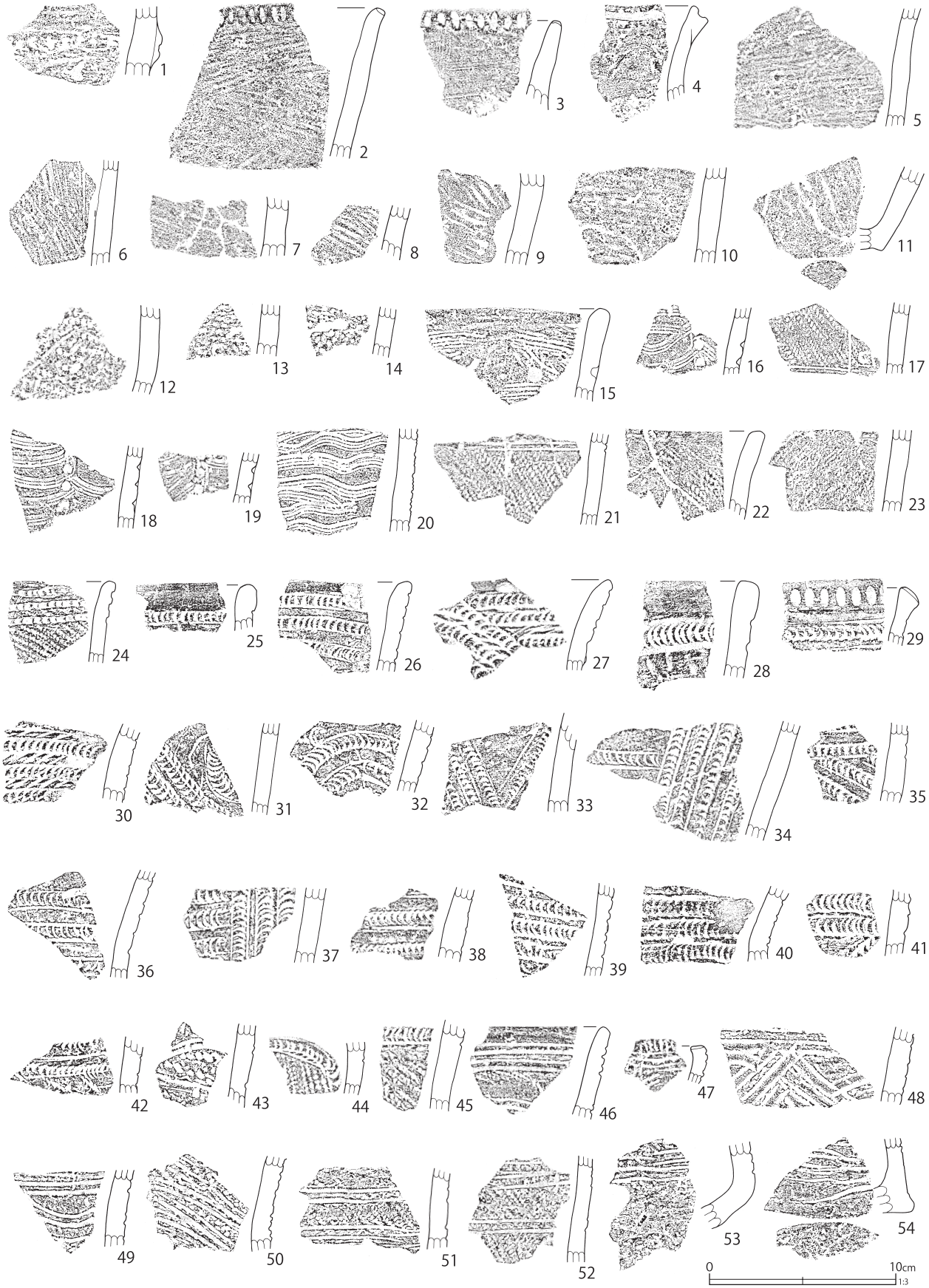
第２類（15～23）

前期後半の無繊維土器である、諸磯ａ式土器を一括する。15～20は先端の潰れた繊維の茎状の施文具による条線文で、横位多段区画を施し、沈線間の円形刺突文や、円形刺突文列を垂下して文様帯を縦位区画し、肋骨文状のモチーフを施文する。15、20は縦位区画文が無いもので、横位展開のモチーフを施文する。15、17とも地文にＲＬ縄文を施文し、17は「米」字状のモチーフを構成する

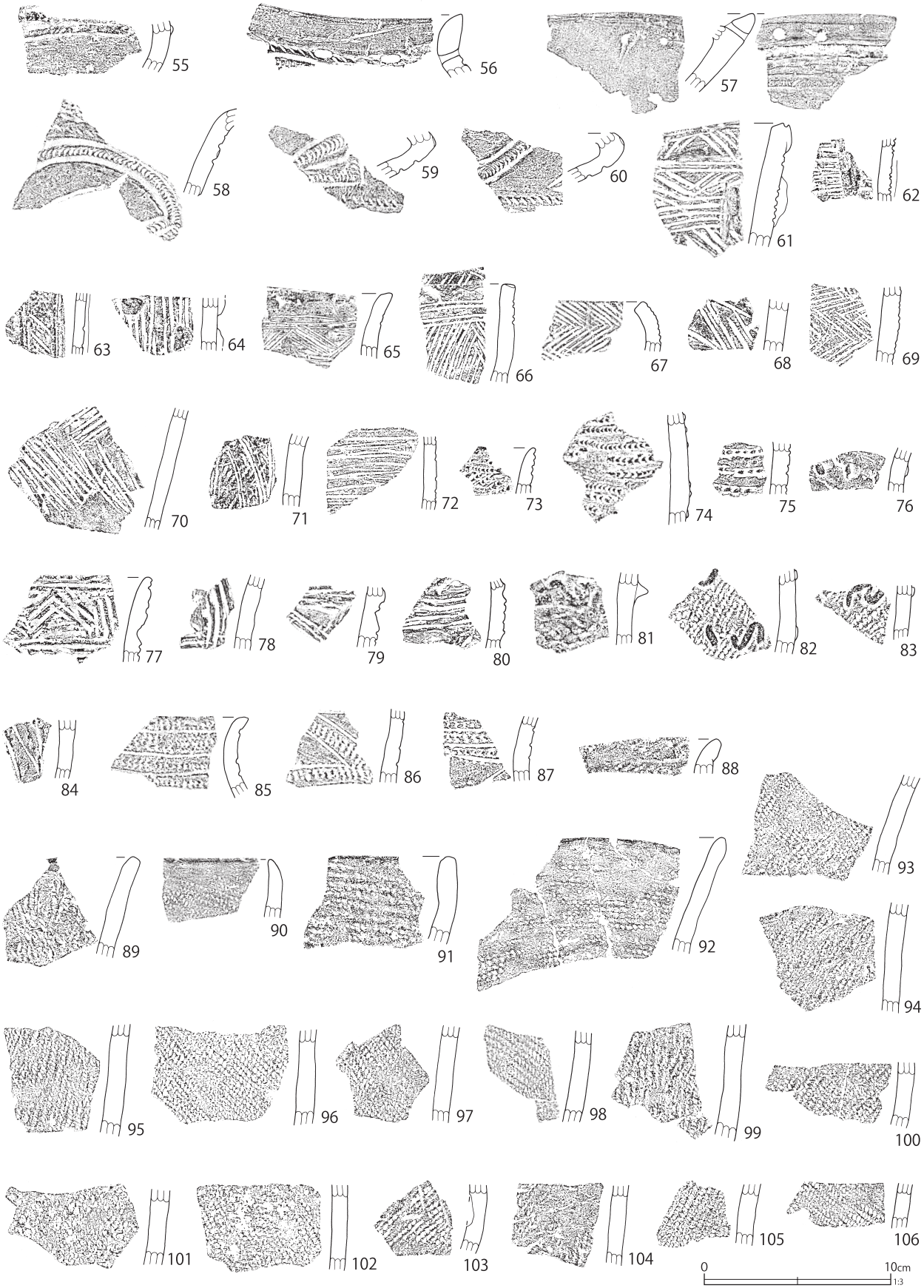


第31図　A区遺物包含層遺物出土状況

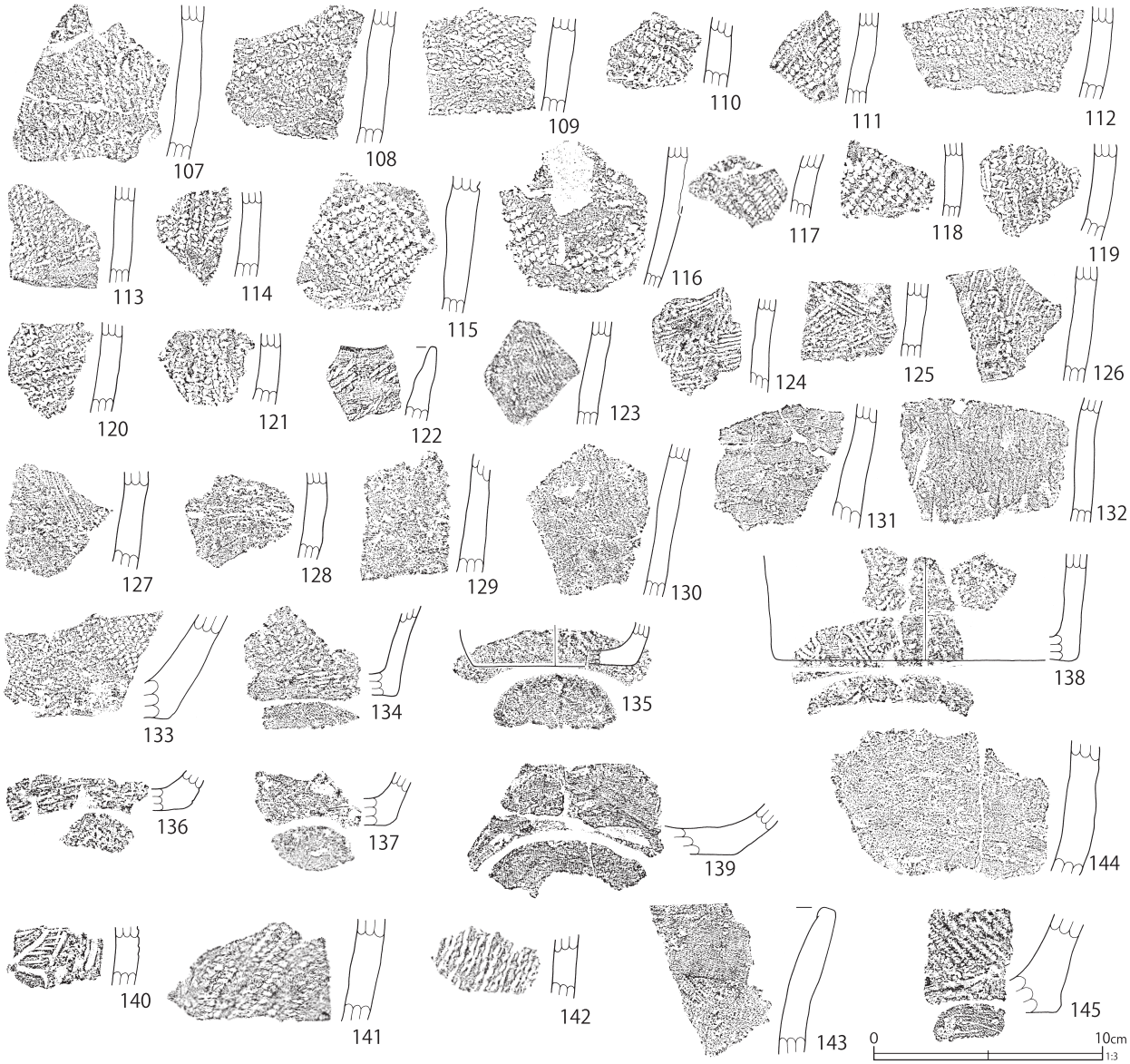
第32図　B区遺物包含層遺物出土状況



第33図　A区遺物包含層出土遺物（1）



第34図　Ａ区遺物包含層出土遺物（２）

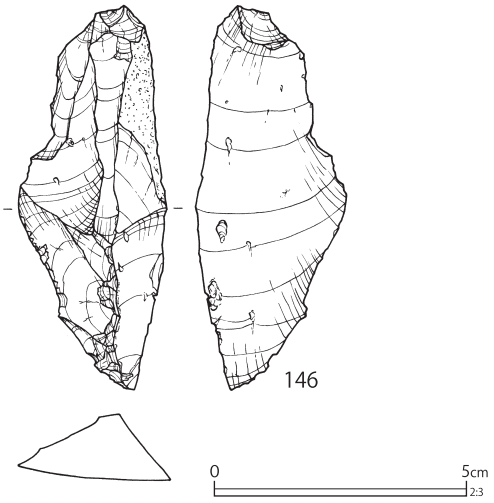


第35図　Ａ区遺物包含層出土遺物（３）

可能性もある。21は細い平行沈線で胴部を区画し、下半部に短節ＲＬ縄文を施文する。原体は１段３本撚りの可能性が高い。22、23は細かな縄文を施文することから、諸磯ａ式の縄文土器と判断した。

第３類（24〜45）

諸磯ｂ１式を中心とした、諸磯式前半段階の爪形文土器を一括する。大半は口縁部が開く深鉢形土器で、胴部を区画して上半部に爪形文のモチーフ、下半部に縄文を施文する土器群である。直線的に交わるモチーフと、曲線的な渦を巻くモチーフが組合っている。爪形文は比較的幅広で、押引状に平行沈線間に施文するものである。24は口縁



第36図　Ａ区遺物包含層出土遺物（４）

部に３条の細い爪形文を巡らしており、刺突文状の爪形文であることから諸磯ａ式からｂ１式にかけての時期に比定されよう。さらに、27、30は爪形文間に斜位の刻みを施しており、浮線文の前段階の様相を示していよう。また、56～60は胴部が大きく屈曲する円盤状の有孔浅鉢で、モチーフを区画する平行沈線内に爪形文を施文する。

第４類（46～54）

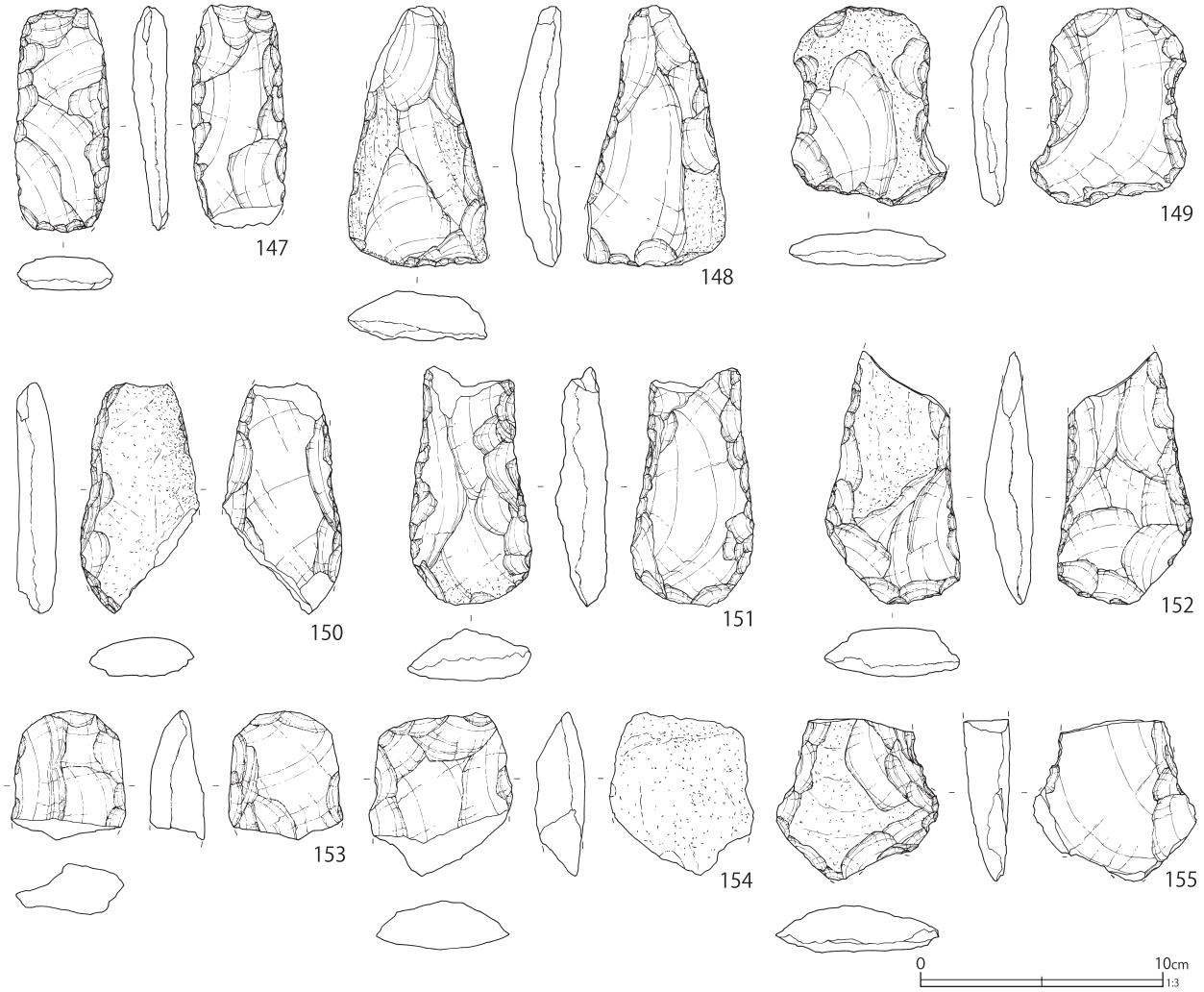
諸磯ｂ式土器の沈線文土器を一括する。46は口縁部が開く深鉢形土器で、幅広平行沈線で口縁部を区画する。48も幅広の平行沈線で横帯区画文内に鋸歯状や曲線のモチーフを施文するものである。両者は爪形文土器と同時期のものと思われ、ｂ１式からｂ２式にかけの土器群であろう。47は口部が内湾するキャリパー形土器で、口縁部に平行沈線で弧線文を描いている。口唇部上に刻みを施す諸磯ｂ２式である。

49～54は胴部の地文縄文上の横帯区画に49は弧状のモチーフ、50は斜行する平行沈線文を描いており、53は屈曲する底部、54は突出する底部に平行沈線を施文する。諸磯ｂ２式に比定されよう。

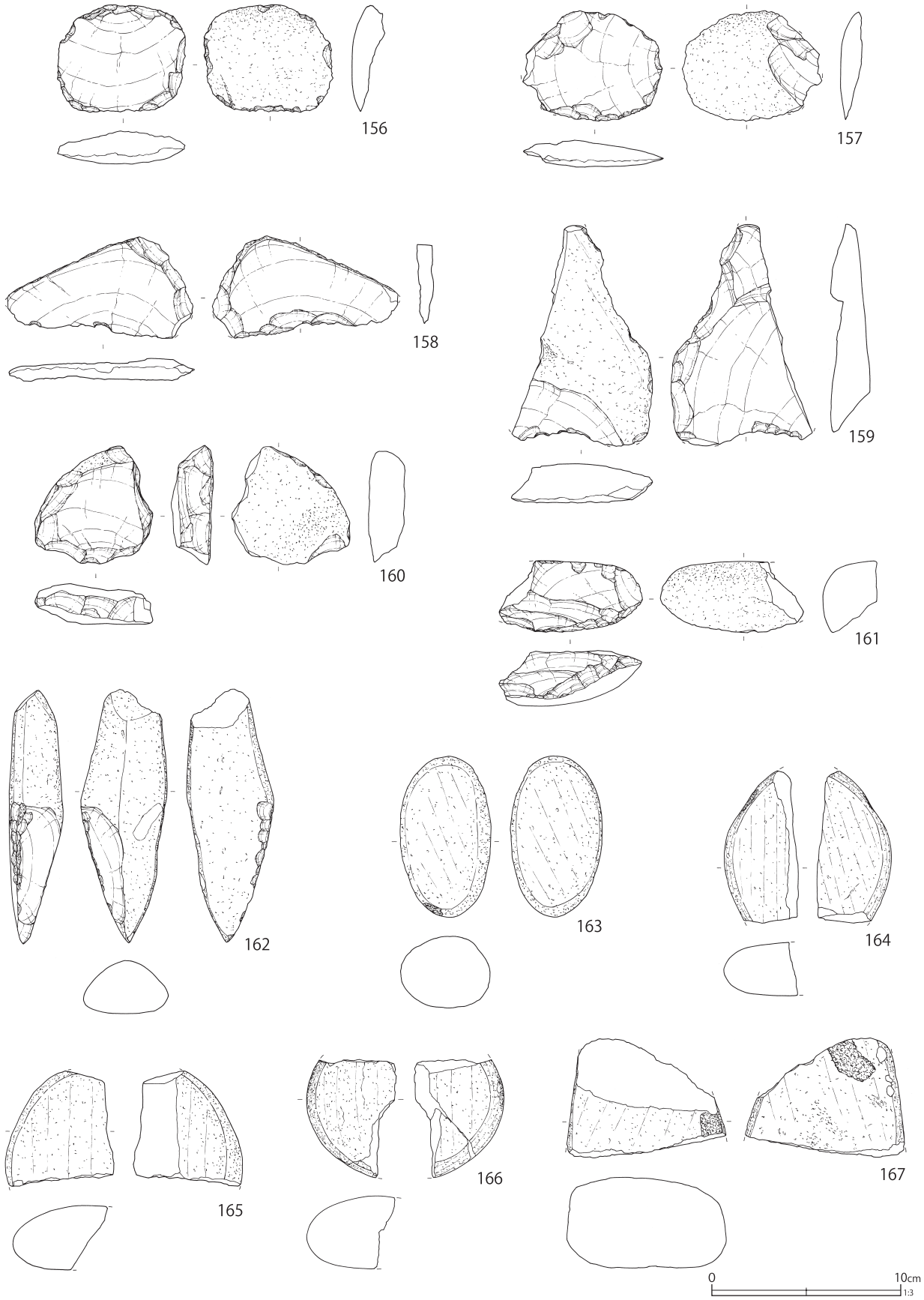
第５類（55）

浮線文土器を一括する。１点のみの出土であるが53に類似する底部形態で、底部への移行部分に２本の浮線文を施文する。浮線文上には斜位の刻みを施している。第４類と同時期で、諸磯ｂ２式に比定されよう。

第６類（61～72）



第37図　Ａ区遺物包含層出土遺物（５）

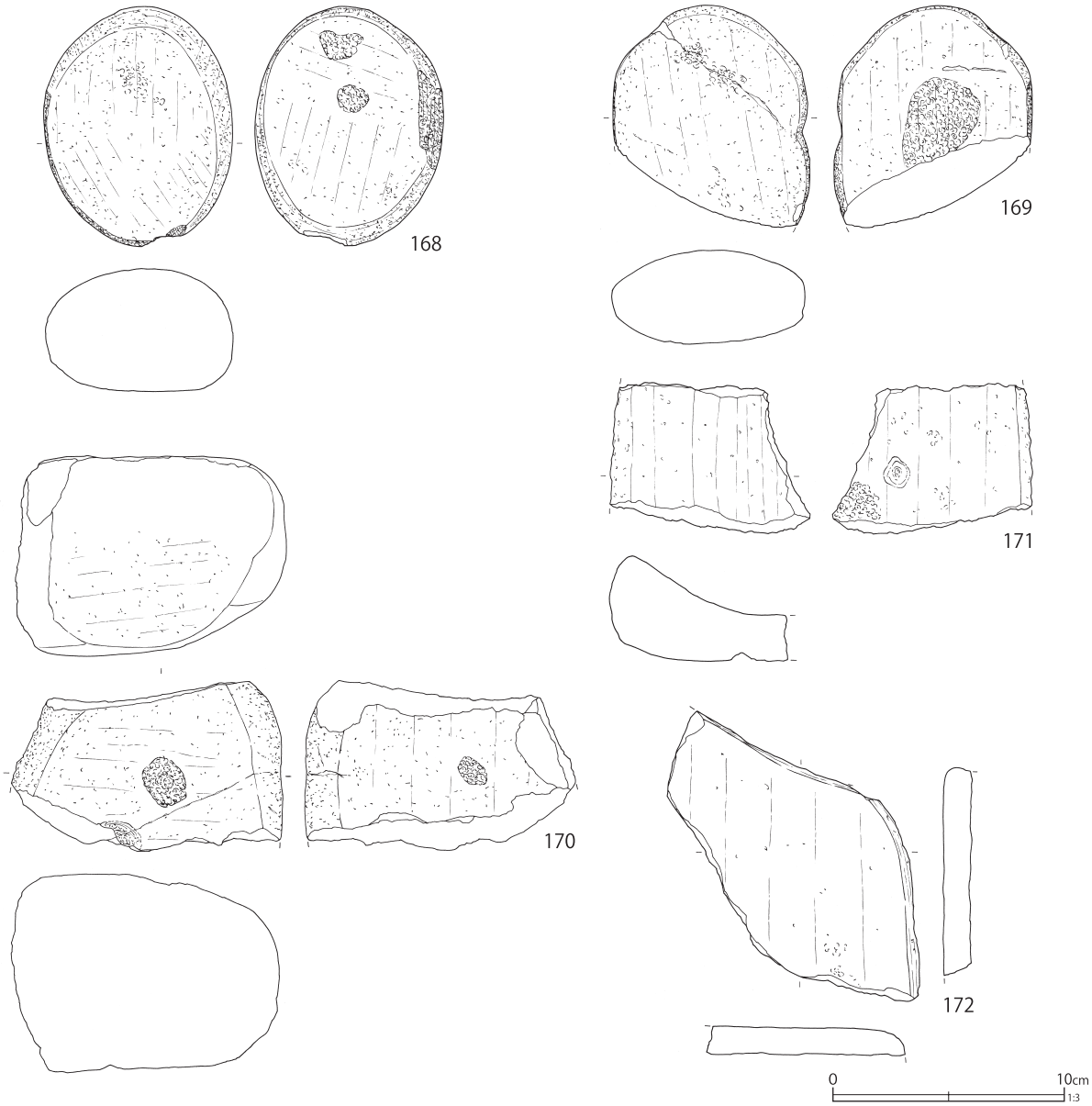


第38図　A区遺物包含出土遺物（6）

諸磯ｃ式土器を一括する。61〜64は貼付文土器である。61は口縁部の開く深鉢形土器で、口縁部が段帯状に肥厚し、鋸歯状の沈線文を施文する。胴部は平行沈線で幅狭な横帯区画を施し、鋸歯状文を描いている。また、横位の区画線上には縦位の瘤状貼付文を施文している。62、63は縦位棒状の貼付文を施文するもので、62は横位の沈線地文上に、63は斜位の沈線地文上に貼付している。64は縦位の平行沈線地文上に円形の貼付文をランダムに施文するものである。

65〜72は沈線文の土器群である。65は外反する口縁部に、66は若干内湾しながら開く口縁部に集合沈線で鋸歯状文を施文する。67は内湾する口縁部に、横羽状の集合沈線文を施文する。68〜70は横羽状の沈線文を施文する胴部破片である。71は地文縄文上に紡錘文状の沈線文を垂下施文している。72は横位の条線文状の平行沈線文を施文するものである。

73、74は結節浮線文土器である。73は外反して開く口縁部に細かな結節浮線文を横位に施文して区画し、斜位の集合結節浮線文を組み合わせている。74は胴部破片で、途切れながらの横位多条の



第39図　Ａ区遺物包含出土遺物（７）

第８表　Ａ区遺物包含層出土石器観察表（第36 ～ 39図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
146	Ａ区	剥片	黒曜石	7.6	3.0	2.2	24.0	№1402
147	Ａ区	打製石斧	ホルンフェルス	[9.2]	3.9	1.4	52.6	№1041　風化
148	Ａ区	打製石斧	結晶片岩	[10.7]	5.8	2.1	143.4	№1183　一部黒色化
149	Ａ区　Ｄ－14	打製石斧	ホルンフェルス	8.2	6.4	1.5	84.9	
150	Ａ区	打製石斧	頁岩	[9.5]	4.9	1.7	89.9	№1150　黒色化
151	Ａ区	打製石斧	ホルンフェルス	[9.8]	5.1	2.1	114.9	№1229　一部黒色化
152	Ａ区	打製石斧	ホルンフェルス	[10.4]	5.6	2.0	113.3	№1057　赤色化　一部黒色化
153	Ａ区　Ｅ－５	打製石斧	ホルンフェルス	[5.3]	4.7	2.3	56.4	一部黒色化　風化
154	Ａ区	打製石斧	ホルンフェルス	[6.3]	6.2	2.2	93.9	№1344　風化
155	Ａ区　Ｅ－４	打製石斧	ホルンフェルス	[6.6]	6.7	[1.9]	96.4	
156	Ａ区	スクレイパー	ホルンフェルス	5.7	6.8	1.7	72.1	№1362
157	Ａ区	スクレイパー	砂岩	5.8	7.4	1.4	54.9	№1171
158	Ａ区	スクレイパー	ホルンフェルス	5.4	[9.8]	1.2	57.1	№1210　風化
159	Ａ区	スクレイパー	ホルンフェルス	[11.7]	[7.5]	2.1	151.5	№1296　風化
160	Ａ区	礫器	ホルンフェルス	6.2	6.3	2.2	101.9	№1257　風化
161	Ａ区	礫器	ホルンフェルス	3.7	[7.6]	2.9	94.7	№1400
162	Ａ区	礫器	緑色岩	[13.4]	4.6	2.8	190.5	№1111
163	Ａ区	磨石	安山岩	8.5	4.9	3.9	220.3	№1082
164	Ａ区　Ｅ－５	磨石	砂岩	[8.0]	[3.9]	2.9	121.7	赤色化
165	Ａ区	磨石	砂岩	[6.1]	[5.8]	3.4	132.4	№1439
166	Ａ区　Ｄ－２	磨石	砂岩	[6.2]	[4.7]	3.9	106.9	赤色化
167	Ａ区	磨石	砂岩	[6.3]	[8.5]	[4.9]	313.5	№1112　赤色化
168	Ａ区	磨石	閃緑岩	10.3	8.2	5.5	683.1	№1442
169	Ａ区	磨石	砂岩	[9.6]	8.6	4.1	440.7	№1211
170	Ａ区	磨石	安山岩	[7.4]	[11.7]	[8.7]	1107.9	№1212　赤色化
171	Ａ区	石皿	安山岩	[6.5]	[8.7]	4.6	266.4	№1246　赤色化　黒色化
172	Ａ区	石皿	緑泥片岩	[12.6]	[10.9]	[1.3]	224.3	№1415

結節浮線を施文するものである。いずれも刺突文の幅が浮線文より狭いことから、諸磯ｃ式～十三菩提式にかけての時期に位置付けられるであろう。

第７類（75～80）

前期終末の十三菩提式土器を一括する。75は結節沈線文土器である。やや間隔を空けた押引結節沈線文を施文するもので、地文は無文である。

76は爪形文で表面を摘まみだし、豆粒状の貼付文を作出するものである。「ハ」字状ではなく、単方向の押引文状に施文を行っている。

77～80は沈線文のモチーフ間を印刻で刳る土器群である。77～80は同一個体と思われる。77は口縁部が外反気味に開く器形で、口縁部に横位の沈線で幅狭な横帯区画を施し、鋸歯状区画と縦位区画を組み合わせたモチーフを構成し、区画内を浅く抉っている。78～80は胴部破片で、78は縦位区画部分、79は三角区画部分、80は横位区画部分である。

第８類（81～83）

東北地方の大木５式相当の土器群である。81はやや断面三角形状の太い隆帯を摘んで、波状文を構成するものである。地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。十三菩提式に伴う在地系の大木５ｂ式土器であろう。82、83は同一個体で、地文ＬＲ縄文上に、断面の丸い浮線文を施文するものである。諸磯ｂ式の新しい段階から諸磯ｃ式にかけて並行する、大木４式から大木５式に比定されよう。

第９類（84）

東関東地方の浮島式系の土器群である。84は、工具は不明であるが、ロッキング文を施文するもので、諸磯ｂ式に伴う浮島式系土器である。

第10類（85～88）

東関東地方の興津式系土器である。平行沈線間に、貝殻腹縁ではなく、細い半截竹管状工具を２

本束ねた施文具で、連続押引刺突文を施文するものである。85は口縁部が外反して開き、胴部が張る器形になるものと思われる。88は有段状の口縁部破片である。ＬＲ縄文を施文する。

第11類（89〜139）

前期の文様が施文されない土器群を一括する。89〜114は横位施文の斜縄文を施文する土器群で、大半は諸磯ｂ式であろう。91、92は横走縄文を施文しており、諸磯ｂ式の新しい段階か、諸磯ｃ式に伴うものであろう。115〜118は羽状縄文を施文するもので、原体末端の結節部の回転文が施文されている。122〜126は前期終末の土器群で、無節の斜縄文や無節の結束羽状縄文を施文するもので、126は無節の結束縄文の縦位施文土器である。127〜132は前期後半の無文土器である。133〜139は底部破片で、138は結束羽状縄文の縦位施文で、前期終末に位置付けられよう。

第Ⅲ群土器（第35図140〜144）

中期の土器群である。140は勝坂式土器、141はＲＬ縄文の縦位施文、142は撚糸文Ｌ、145は０段多条ＲＬ縄文の縦位施文、143、144は、無文土器である。いずれも勝坂式に位置付けられよう。

Ａ区遺物包含層出土石器（第36〜39図）

第36図146、第37図147〜155、第38図156〜167、第39図168〜172は出土した石器である。

146は黒曜石製の剥片である。質の良い石材を使用している。使用の痕跡は認められなかった。

147〜155は打製石斧である。大部分が破損品である。149は完形品であるが、刃部側の欠損後に刃部を再加工したと考えられる。

156〜159はスクレイパーである。つまみ部を有するなど精緻なものはなく、剥片の一部を加工して刃部を作り出している。

160〜162は礫器である。自然礫を加工して刃部を作り出すものを礫器とした。162は縦長の礫を利用したものである。

163〜170は磨石類で、磨面の他敲打痕や、敲打による凹みを有するものをここに含めた。そのほとんどが、破損しており被熱しているものが多くを占めている。

172、173は石皿である。ごく一部のみが残存している。172は裏面に漏斗状の凹みと、敲打痕が認められる。

Ｂ区出土縄文土器（第40〜43図）

Ｂ区からは、Ａ区と同様に前期の諸磯式土器を中心として、早期から後期初頭にかけての土器群が出土している（第40〜43図１〜187）。

第Ⅰ群土器（第40図１〜13）

早期後葉の条痕文系土器群である。器壁に少量の繊維を含み、貝殻腹縁を引きずって器面調整を行った条痕文を残す土器群である。１は有文土器で、太い凹線状の沈線で襷状の区画を施し、さらに異方向の集合沈線を区画内に充填施文するものである。野島式に比定される。２〜10は条痕文土器の胴部破片で、11、12は底部付近の破片、13は尖底部の破片である。

第Ⅱ群土器（第40図14〜51、第41図52〜96、第42図97〜144）

前期の土器群を一括する。

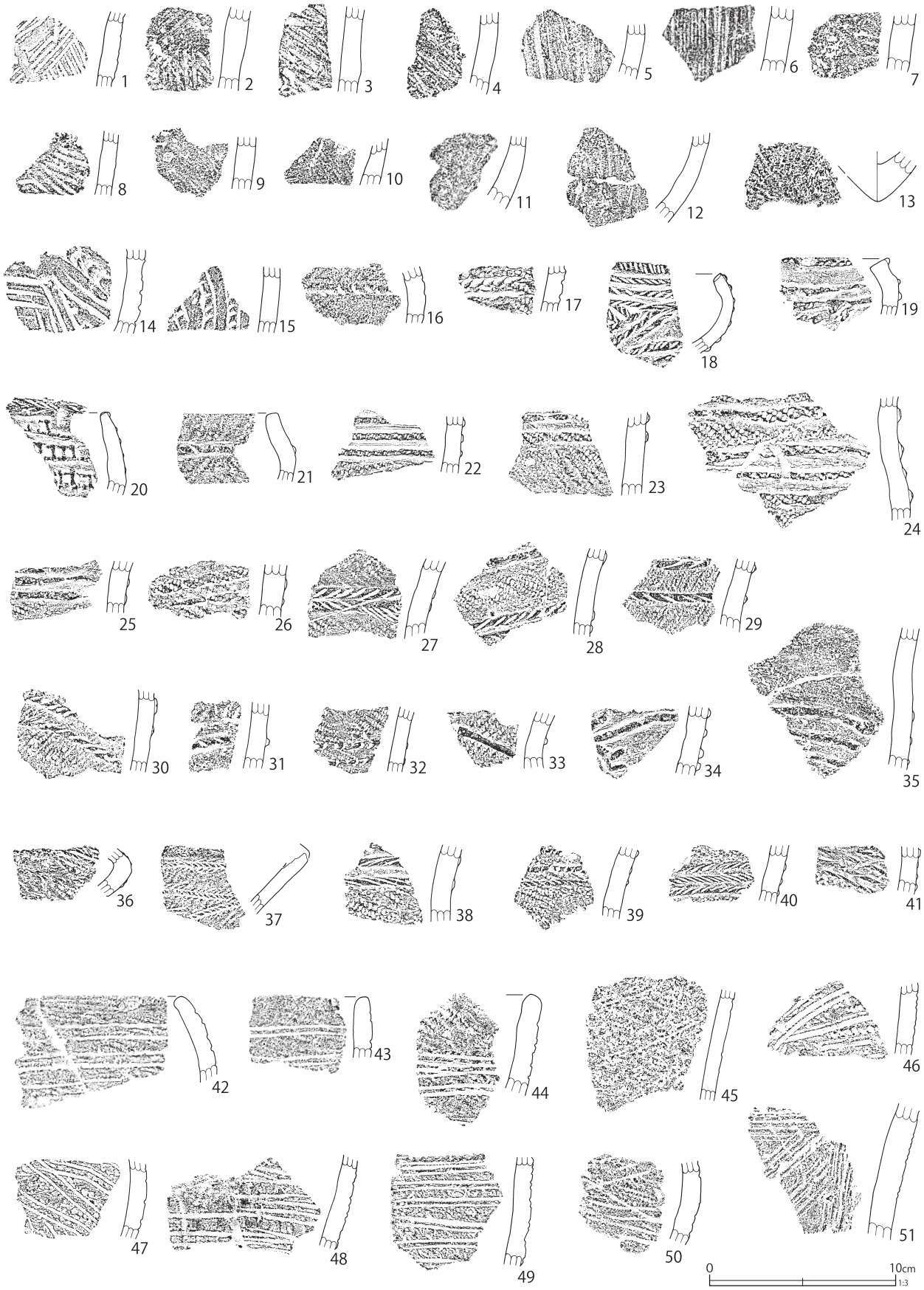
第１類（14〜17、89〜94）

諸磯ｂ式の爪形文土器を一括する。14は平行沈線と爪形文を施文する。15、16は爪形文、17は地文ＲＬ縄文上に爪形文を施文する。諸磯ｂ１式末からｂ２式の古段階に位置付けられる。

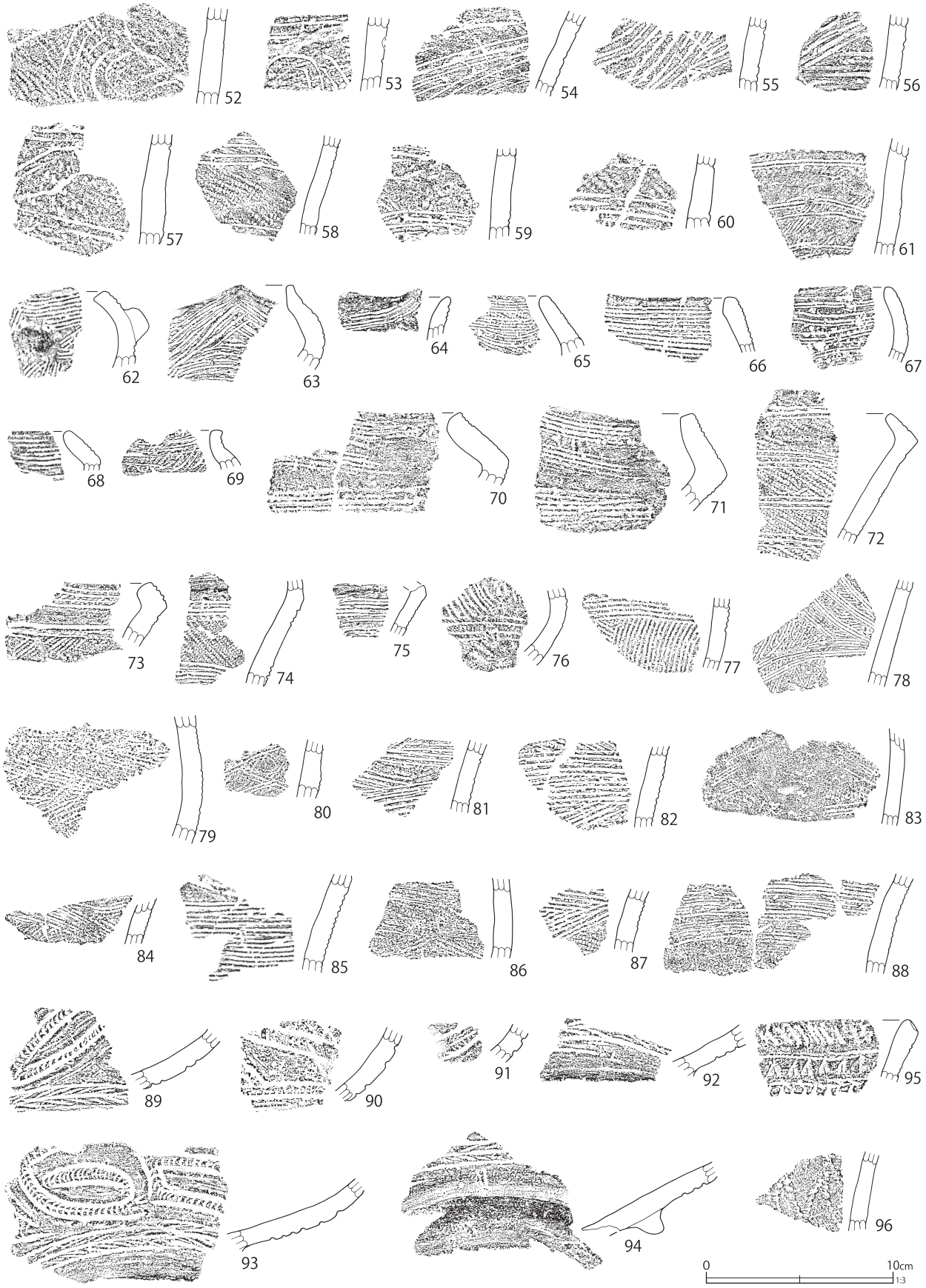
89〜94は扁平な円盤形をした浅鉢で、変形木葉文や渦巻文を爪形文で施文する。有孔浅鉢の可能性がある。

第２類（18〜41）

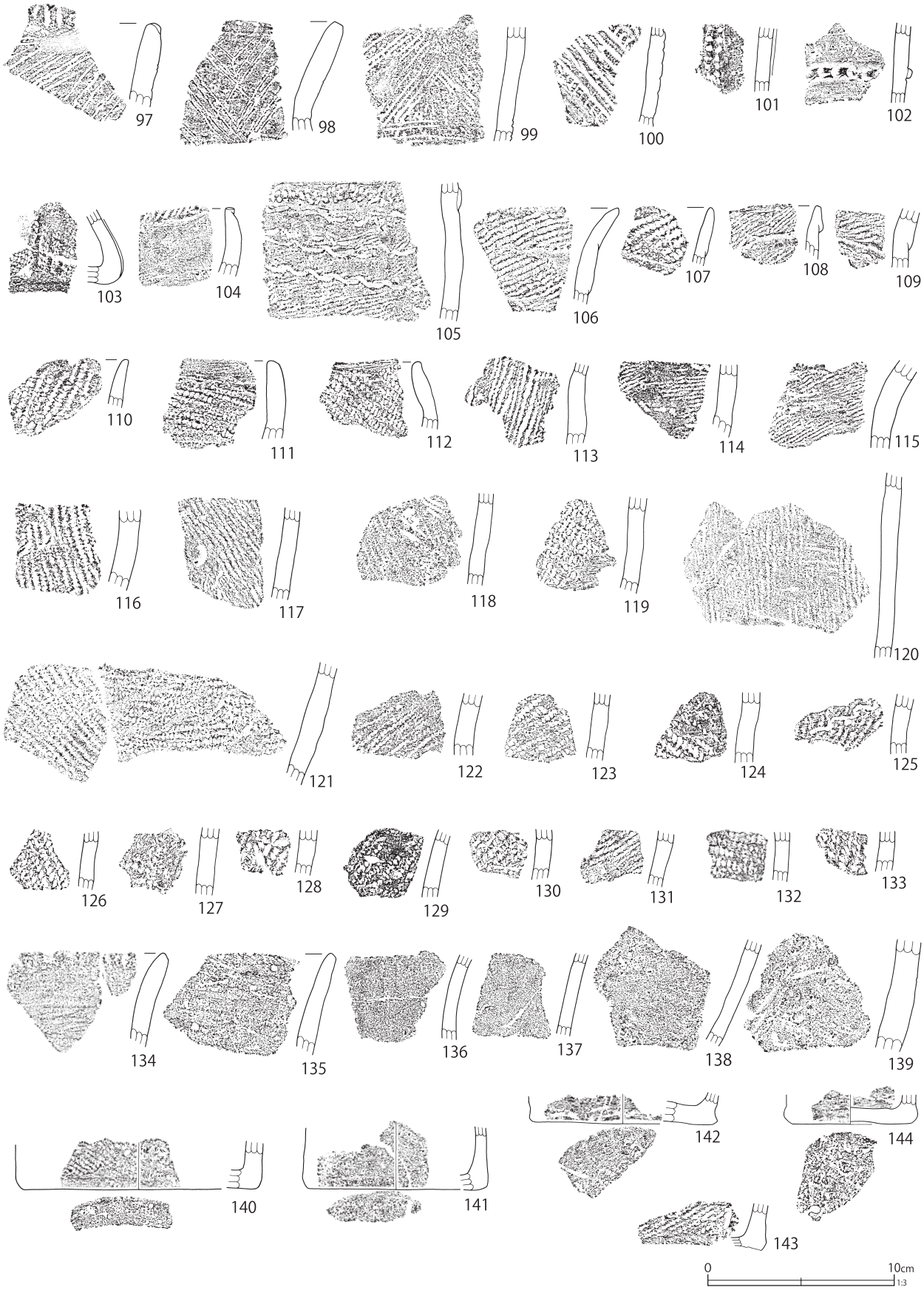
諸磯ｂ式の浮線文土器を一括する。①やや太めの浮線文に斜位の刻みを施すもの（18、21、27〜32）、②浮線文上に縄文を施文するもの（19、22〜26）、③加工を施さない浮線文（20、33〜35）のもの、④非常に扁平な浮線文に細かな斜位の刻みを施すもの（36〜41）がある。概ね、①、②は



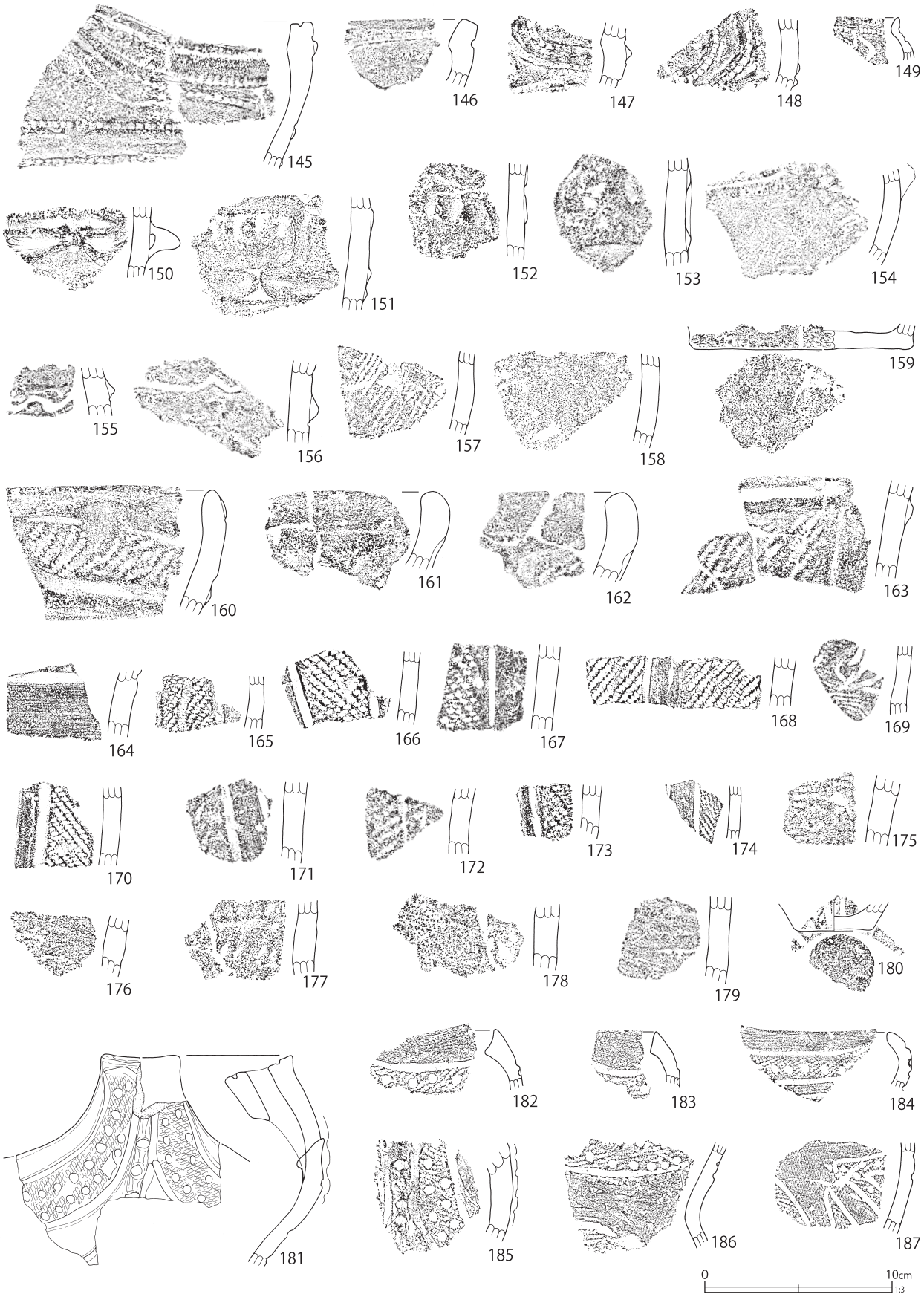
第40図　B区遺物包含層出土遺物（1）



第41図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（２）



第42図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（３）



第43図　B区遺物包含層出土遺物（4）

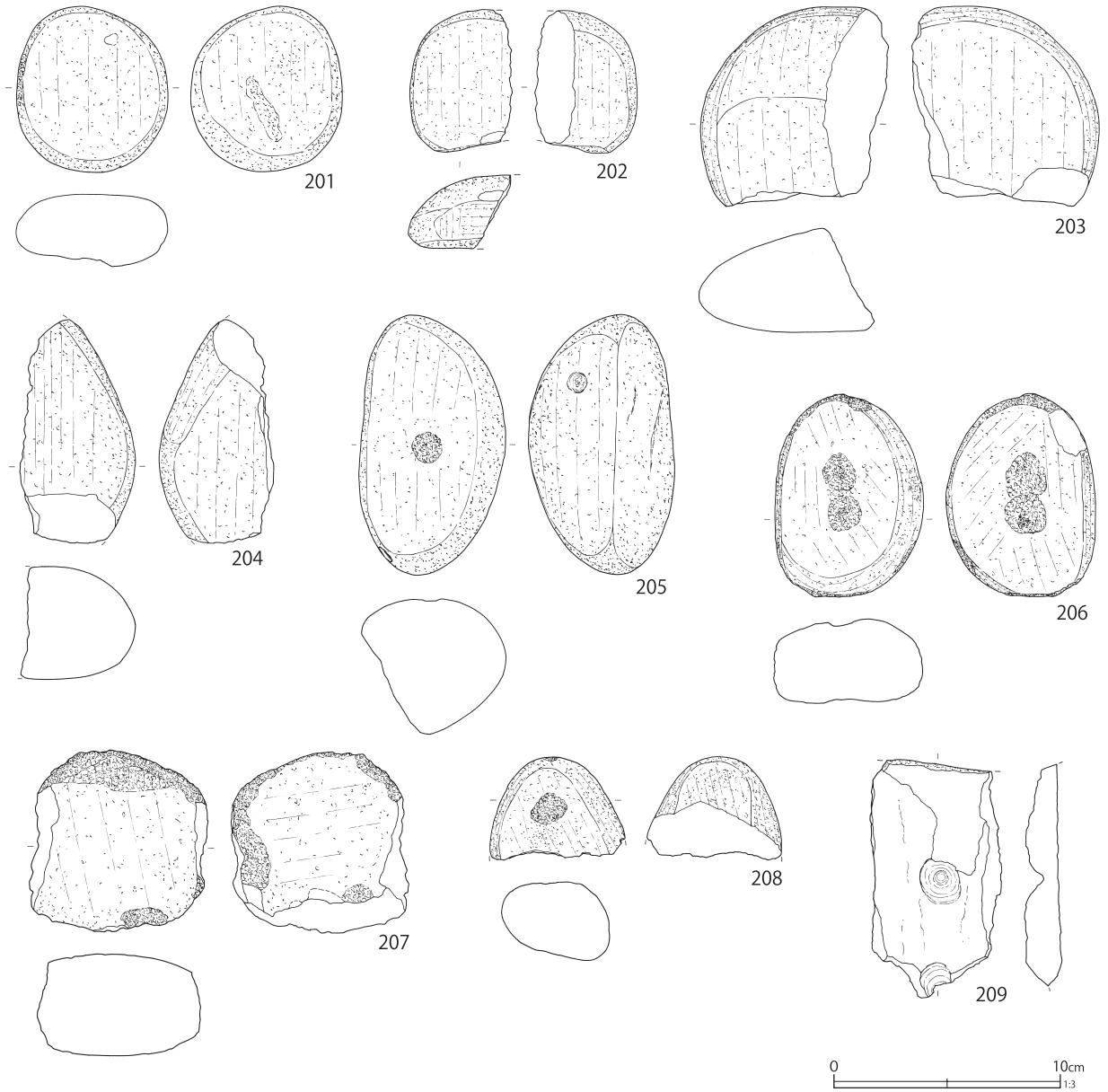
第44図　B区遺物包含層出土遺物（5）

諸磯ｂ２式古段階、③は諸磯ｂ２式新段階、④は諸磯ｂ３式に比定されよう。

18、19、21は口縁部が内湾するキャリパー形深鉢で、18、19は横位連結の渦巻文を施文するものと思われ、21は１本の浮線文で口縁部を区画する。20は口縁部の内湾が弱く、刻みを施さないソーメン状の細い浮線で梯子状文を施文する。ｂ２式のもっとも新しい段階の土器であろう。36〜41はｂ３式に比定される土器であるが、36は屈曲の強い口縁部に、色違いの白色浮線文でモチーフを施文するものである。37は細い浮線状を呈する平行沈線文間に細かな刻みを施すものである。屈曲する口縁部が剥落している。

第３類（42〜88）

諸磯ｂ式の沈線文土器を一括する。地文縄文上に平行沈線でモチーフを描く土器群である。本遺跡の土器群は平行沈線文構成の土器が多く、モチーフを描く土器群は少ない。口縁部は、42が緩く内湾し、43、44は直線的に開く器形である。46、47は曲線的なモチーフを描くものと思われ、45は器面の荒れが著しく不明瞭であるが、斜行格子目文を施文している可能性もある。52、53は平行沈



第45図　Ｂ区遺物包含層出土遺物（６）

第９表　Ｂ区遺物包含層出土石器観察表（第44・45図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
188	Ｂ区	石核	黒曜石	1.6	2.1	1.5	3.6	№101
189	Ｂ区	磨製石斧	緑色岩	[5.2]	[4.3]	0.8	15.4	№538　一部赤色化・黒色化
190	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	12.4	5.2	2.7	207.8	№421　風化
191	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	12.3	4.5	2.0	111.3	№404　風化
192	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	8.7	5.2	1.8	79.3	№491　やや風化
193	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	8.1	5.2	2.0	88.1	№248
194	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	5.2	2.3	142.1	№443　風化
195	Ｂ区	打製石斧	砂岩	[8.6]	5.0	1.2	51.7	№527　一部黒色化
196	Ｂ区	打製石斧	砂岩	[10.0]	5.7	1.9	102.9	№516
197	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	[4.6]	2.1	114.3	№90　風化
198	Ｂ区	打製石斧	ホルンフェルス	[6.4]	5.0	[1.9]	68.6	№134　風化
199	Ｂ区	スクレイパー	ホルンフェルス	6.8	6.7	1.8	79.2	№448　風化
200	Ｂ区	スクレイパー	ホルンフェルス	5.6	8.7	1.7	67.6	№290　やや風化
201	Ｂ区	磨石	砂岩	7.3	6.7	3.8	230.9	№25　赤色化
202	Ｂ区	磨石	砂岩	6.3	[4.5]	[3.3]	111.2	№22　赤色化
203	Ｂ区	磨石	砂岩	[8.8]	[8.3]	[4.7]	409.6	№319　赤色化
204	Ｂ区	磨石	砂岩	[9.9]	[5.1]	6.0	298.6	№259　赤色化
205	Ｂ区	磨石	砂岩	11.4	6.5	6.0	546.3	№30
206	Ｂ区	磨石	閃緑岩	8.9	6.6	3.7	336.9	№422　赤色化
207	Ｂ区	磨石	閃緑岩	[8.0]	[7.9]	4.7	456.6	№252　一部赤色化
208	Ｂ区	磨石	砂岩	[4.5]	[6.0]	[3.8]	108.3	№16　赤色化
209	Ｂ区	石皿	緑泥片岩	[10.5]	[5.8]	[2.0]	157.0	№500

線で渦巻文状の曲線文を描いており、54～56は集合沈線で鋸歯状のモチーフを構成するものと思われる。48、51、54～56のような平行沈線の集合沈線を施文するものや、61のような細い平行沈線文を施文する土器群は、浮線文③に組成するｂ２式でも新しい段階の土器群であろう。

62～88は条線文のような集合平行沈線文でモチーフを描く土器群であり、浮線文④と組み合うｂ３式に比定される。62～73は短い口縁部が大きく内湾もしくは内折し、65は波頂部が内側に押し込まれて花弁状を呈し、内湾する部分に獣面把手から変化したと思われる円形貼付文を施文している。口縁部はいずれも緩い波状を呈するものと思われるが、短く内折するものは平縁の可能性もある。集合沈線文では弧線文（67）や入組み状の対弧線文（76、78）、菱形状文（79～87）等を施文する。80は菱形状文と小さな渦巻文の組み合わさるモチーフを施文している。

第４類（95、96）

浮島式系の土器群を一括する。95は外削状に肥厚する口縁部が外反して開く器形を呈し、口唇部には押圧状の斜位の刻みを施している。口縁部に単沈線で幅狭の横帯区画を施し、沈線間に振幅の小さいロッキング文を施文している。他の破片と比較して、胎土にやや多めの砂粒を含んでいる。

96は貝殻腹縁、もしくはそれに類する先割れ状工具を束ねた施文具によるロッキング文を施文するもので、振幅が大きい。内面を良く磨いている。

第５類（97～109）

十三菩提式土器を中心とする、前期終末の土器群を一括する。97～100は平行沈線で鋸歯状文を描くものである。97は口唇上に１段Ｌの側面圧痕を刻み状に施文する。98は切り込むような細沈線で左右対称の鋸歯状文を描き、中央部に小さな三角形文を施文している。100は平行沈線と結節沈線文で鋸歯状文を構成するものと思われるが、結節沈線脇に抉りを伴う幅広の沈線を施文する。以上の沈線文土器は、97が大木6式の影響を受けて

いるものと思われ、98は類例に乏しく型式比定は難しいが、器形から東関東系の興津式以降の土器群の可能性もある。100は十三菩提式である。

101、102は太い隆帯に結節刺突文を施す十三菩提式古段階の土器群で、103は地文縄文上にソーメン状の結節浮線文を垂下する扇平式系の底部破片である。

104〜109は前期終末の土器群と思われもので、104は無文の口縁が内湾する深鉢である。105は胴部の区画隆帯上に波状の結節刺突文を施し、地文に原体の末端処理の結節回転文を伴う無節Ｌを施文している。106〜109は外反する先細りの折返し状口縁である。いずれも、諸磯ｃ式以降から十三菩提式に位置付けられよう。

第６類（110〜144）

前期の文様が施文されない無文土器を一括する。整然とした横位の斜行縄文を施文するものは、諸磯ｂ式でも比較的古段階のもので、口唇部が先細り状の110や、細かな縄文の114、115、縦走縄文状の120などは前期終末の可能性が高い。

134〜139は無文土器である。134、135はやや外削状の口縁部が外反しながら開く器形で、諸磯ｂ式でも新しい段階であろうか。

140〜144は底部破片で、140は単節ＲＬ、143は単節ＬＲ縄文が横位施文されている。

第Ⅲ群土器（第41図145〜180）

中期の土器群を一括する。

第１類（145〜159）

中期中葉の阿玉台式土器を一括する。145〜149は口縁部破片で、隆帯脇に１条の角押文を施文する阿玉台Ⅰｂ式に比定される。145は波状口縁を呈し、角頭状を呈する口唇部上にも１列の角押文を巡らせる。146は口縁部区画に、147、148は隆帯の曲線状モチーフに沿って角押文を１列施文する。149はミニチュアの壷形土器である。150は胴部の幅狭楕円区画文の合わせ目に沈線の渦巻文を持つ貼付文を施文している。151は幅狭楕円区画文と襞状整形文、152〜154は低隆帯のモチーフと襞状整形文を施している。155、156は隆帯脇に押引状の沈線文を施文する。167はＲＬ縄文の横位施文、158は無文土器で、159は底部破片である。いずれも雲母を含んでおり、阿玉台Ⅰｂ式古段階に位置付けられよう。

第２類（160〜180）

中期末葉の磨消懸垂文を持つ加曽利ＥⅢ式土器である。160〜162は口縁部破片で、163〜175は２本沈線間を磨り消す磨消懸垂文である。180は磨消懸垂文を垂下する径の小さな底部破片である。

176〜179は無文土器であるが、器面の荒れが著しいものである。第１類の破片も含まれよう。

第Ⅳ群土器（第43図181〜187）

後期初頭の称名寺式土器を一括する。181は筒形の把手を持つ波状口縁を呈し、波頂部から刻み隆帯が垂下して胴部を縦位分割する。

182・183・185・186は、縄文間に１〜２列の円形刺突文を施文する同一個体と思われる。称名寺式の中段階あたりに位置付けられよう。

Ｂ区遺物包含層出土石器（第44、45図）

第44図188〜200、第45図201〜209は出土した石器である。

188は黒曜石製の石核である。夾雑物が大きく含まれている。

189は磨製石斧表面の一部である。破片全体が被熱しており、被熱のため破砕したと考えられる。

190〜198は打製石斧である。６はいわゆる分銅形の打製石斧である。

199、200はスクレイパーである。剥片の一部を加工し、刃部を作り出している。

201〜208は磨石類で、磨面の他敲打痕や、敲打による凹みを有するものをここに含めた。19は表裏面中央に２箇所ずつ、敲打による凹みが残存している。

209は石皿の小破片である。漏斗状の凹みが２箇所認められる。

２　古代の遺構と遺物

（１）　住居跡

第１号住居跡（第46、47図）

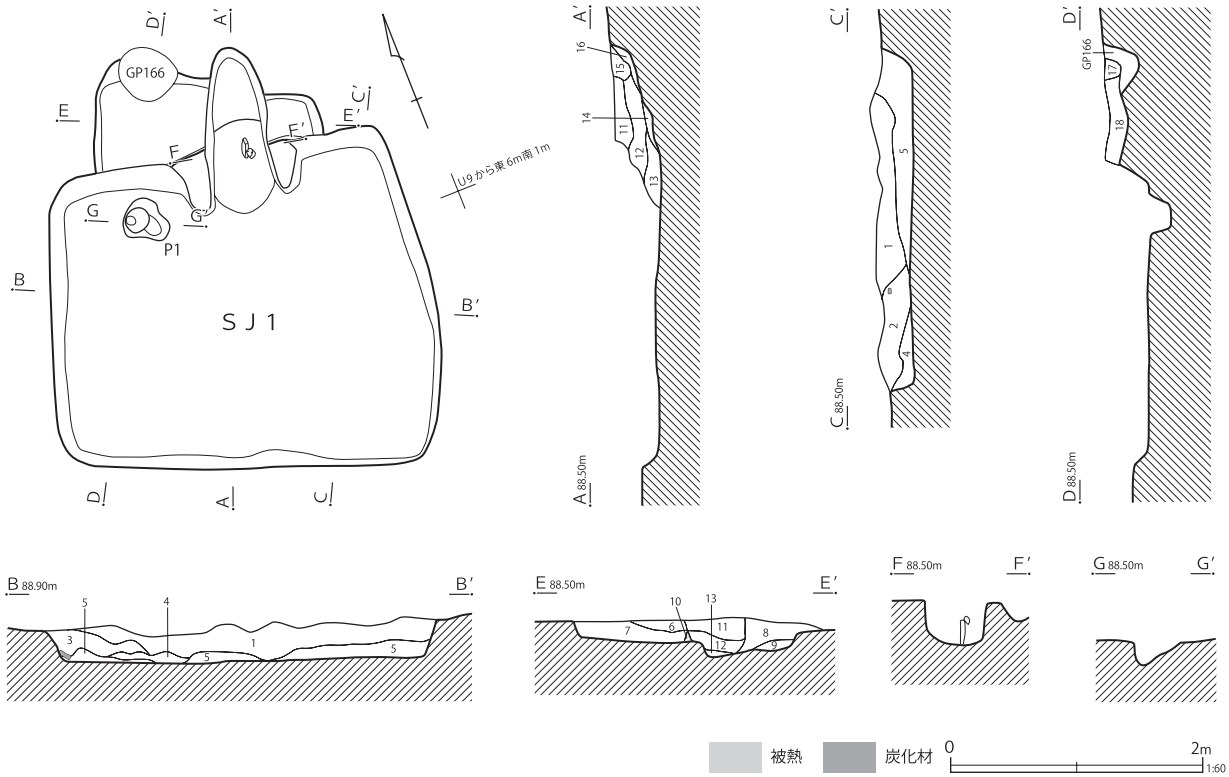
平安時代の住居跡は、Ｂ区南尾根端部の平坦面において１軒のみ検出された。Ｔ・Ｕ－９グリッドに位置する。ＧＰ166と重複し、これに壊されている。

平面形態は、やや不整な方形を呈する。規模は、主軸長3.35m、副軸長3.03m、深さ0.30～0.40mである。主軸方位はＮ－20°－Ｅである。

カマドは、北側の壁面に１基設けられており、カマドからは支脚に使用したと思われる緑泥片岩が直立した状態で出土した。カマドの底面には灰が堆積しており、天井の崩落土と考えられる焼土ブロックを多量に含む土によって埋没していた。ただし、焚口部や住居の床面に灰の堆積は認められなかった。精査後、住居跡の北側に深さ0.25mの掘り込みが検出された。カマドを中心とした非対称な掘り込みで、住居跡に付帯した棚状施設の可能性がある。

ピットは、住居跡の北西隅より１基検出されたのみであり、柱穴や貯蔵穴とするにはやや浅い。

住居跡の床面上からは、炭化材片がまばらに確認された。これらの炭化材について、自然科学分析による樹種同定を行った。その結果、炭化材の樹種は、クヌギ節、カエデ属、ミズキ属であることが分かった。いずれも堅硬な樹種である。住居



ＳＪ１
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒多量
2　褐色土　１層より炭化物粒多い
3　明褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロック少量　層下面被熱する部分あり
4　３層よりやや色調暗い
5　黒褐色土　炭化物・炭化材多量　焼土粒・焼土ブロック多量
6　褐色土　焼土粒少量
7　暗褐色土　焼土粒微量　土器片含む
8　暗褐色土
9　暗褐色土　焼土粒少量
10　褐色土　一部被熱
11　褐色土　暗褐色土ブロック多量　焼土粒少量　粘性強い　カマド天井崩落土
12　赤褐色土　焼土ブロックを主体とする　カマド天井崩落土
13　黒色土　灰層　赤褐色土粒含む
14　褐色土　黒色土少量　焼土粒多量
15　赤褐色土　褐色土・暗褐色土含む　カマド天井崩落土
16　褐色土　焼土粒・暗褐色土粒少量　流入土か
17　黒色土
18　暗黄褐色土　焼土・炭化物少量

第46図　第１号住居跡

の部材、あるいは、カマドの燃料として使用されたものであろう。

遺物は、住居跡の中央部にややまとまって出土し、カマドや棚状施設からの出土はわずかであった。袋状鉄斧は、このまとまりのなかから出土している。また、住居跡南西隅より、紡錘車２点が出土した。

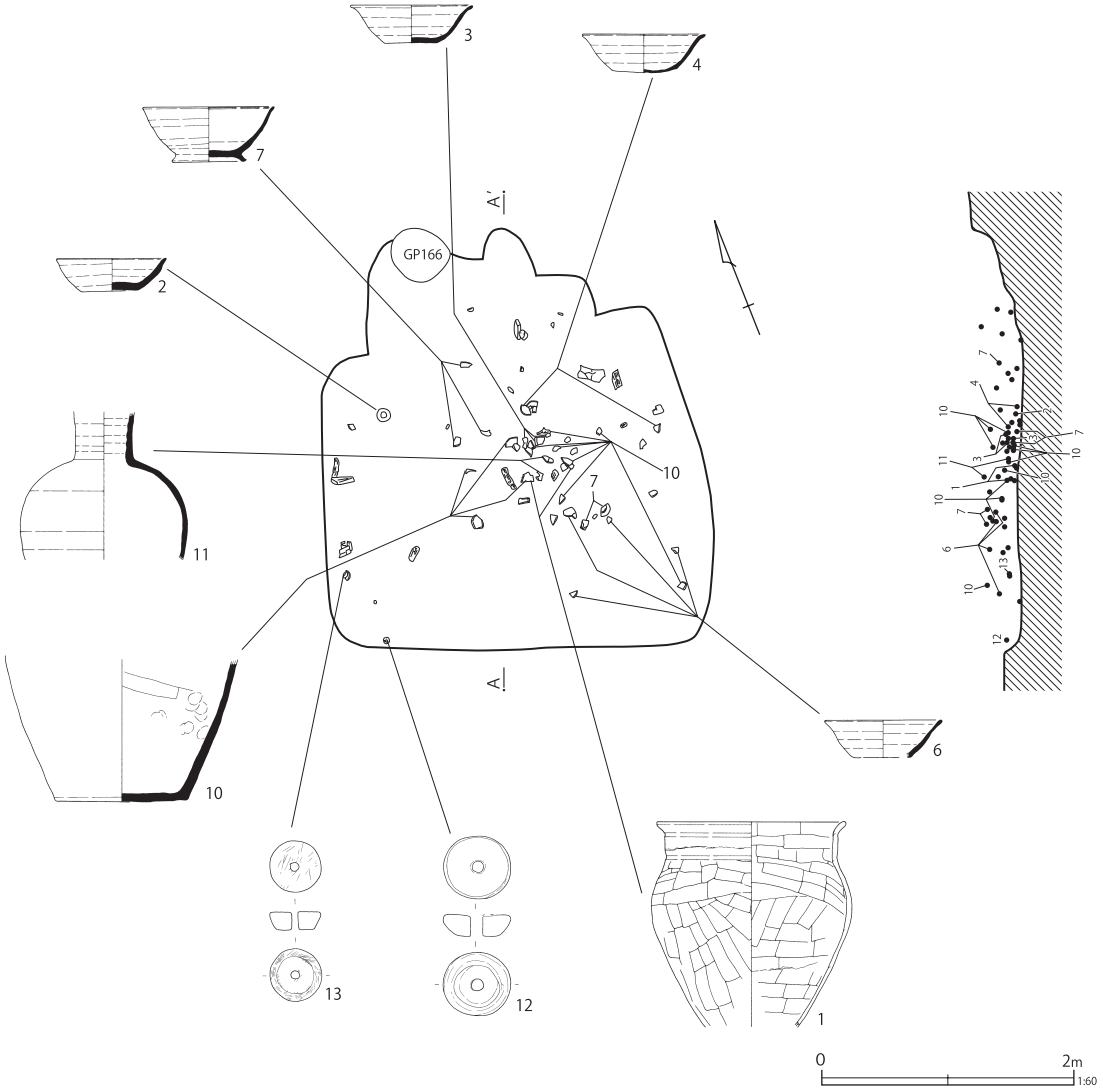
後述する第48図10には、住居跡の南側斜面より出土した破片との接合関係が認められた。このことから、住居跡の遺物の一部は斜面側に流出していることがうかがわれる。

出土遺物より、住居跡は９世紀の中頃から後半に属するものと考えられる。

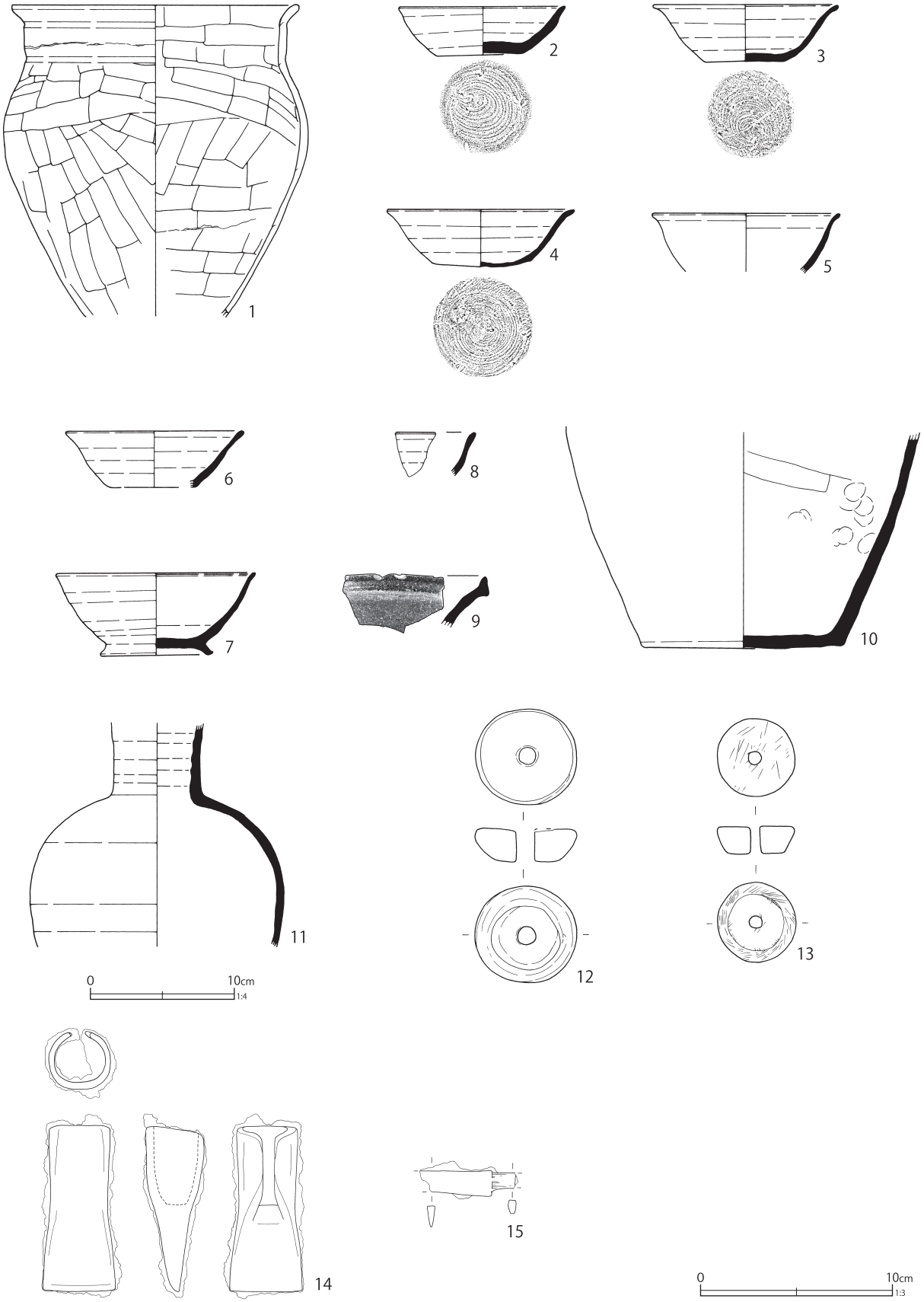
第１号住居跡出土遺物（第48図）

１は、土師器の甕である。胴部の器壁は薄手であり、口縁部はいわゆるコの字状を呈する。出土した土師器片について、非掲載となったものも含めてほとんどが1と同一個体と考えられる。

２～６は須恵器の坏である。いずれも胎土が粗く粒の大きな含有物が目立つのが特徴であり、生産地が同一であるものと想定される。７は須恵器の高台付埦である。２～６と胎土の特徴が類似しており、共通の生産地である可能性が高い。８は、須恵器の坏と思われる小破片である。胎土は緻密で、白色針状物質を含むことから南比企産と考えられる。坏、および高台付埦は、使用のためか内



第47図　第１号住居跡遺物出土状況



第48図　第１号住居跡出土遺物

第10表　第１号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(20.0)	[21.6]	－	ＥＧＩＫ	40	普通	明赤褐	№25・57	31-1
2	須恵器	坏	11.6	3.3	5.6	ＥＩＪ	100	良好	黄灰	№11　底部回転糸切り	31-2
3	須恵器	坏	12.7	3.9	5.5	ＨＩＫ	70	不良	にぶい黄橙	№32・34・37　底部回転糸切り	31-3
4	須恵器	坏	13.0	3.9	7.0	ＩＫ	98	普通	黄灰	№42・46　底部回転糸切り	31-4
5	須恵器	坏	13.0	[4.0]	－	ＩＫ	5	普通	褐灰	№382	32-3
6	須恵器	坏	12.4	3.8	(6.0)	ＨＩＪＫ	70	普通	灰白	№16・20・21・49	
7	須恵器	高台付埦	13.8	5.7	7.5	ＨＫ	90	普通	褐灰	№13・17・18・41・43・64・381　底部回転糸切り	31-7
8	須恵器	坏	－	[3.0]	－	ＨＪＫ	5	普通	灰白	南比企産	32-3
9	須恵器	甕	－	[3.5]	－	Ｉ	5	良好	灰褐	ＢNo.371　内外面自然釉　10と同一個体か	32-3
10	須恵器	甕	－	[25.0]	(27.0)	Ｉ	25	良好	灰褐	№14・15・23・25 ～ 27・29・33・35・39・50　内外面自然釉　9と同一個体か	31-6
11	須恵器	長頸壺	－	24.5	－	ＩＫ	21	普通	にぶい黄橙	№24・30・334・386　外面自然釉	31-11
12	土製品	紡錘車	径5.3　厚さ1.7　重さ45.8							№10	32-1
13	石製品	紡錘車	径4.1　厚さ1.4　重さ37.2　片岩							№9	32-2
14	鉄製品	鉄斧	長さ8.6　刃幅3.3　袋部3.2×3.0　厚さ0.4　重さ157.8							№53　袋部円形	33-1
15	鉄製品	刀子	長さ[5.31]　刃長[3.7]　背幅0.4　刃幅1.1　重さ6.7							№54　切先・茎先欠損　茎部表面に柄木痕跡あり	33-1

面が磨滅しているものが多かった。

10は須恵器の甕である。底部を含めた全面に自然釉が付着し、外面は黒色を呈する。器壁は厚手である。９の口縁部と同一個体と考えられる。11は須恵器の長頸壺である。外面に薄く自然釉が付着する。頸部は厚く、内面のロクロ目が顕著である。東金子産と考えられる。

12・13は紡錘車である。12は土製であり、13は石製である。13の石材は、片岩と考えられる。いずれも、表面に使用に伴う細かな擦痕が認められる。14・15は鉄製品である。14は､袋状鉄斧である。袋状鉄斧は小型の斧であり、木材の製品加工等に使われたものと推察される。また、住居跡からは離れるものの、Ｍ－13グリッドからは、似た形態の袋状鉄斧が出土している点が留意される。15は、刀子である。切先と茎先を欠損する。茎部の表面には、柄木痕が認められる。本住居跡からは、糸をつむぐための紡錘車や、木材の加工に用いたものと推察される袋状鉄斧など生産にかかわる遺物が出土している点が特徴であり、住居跡の性格を知るうえで貴重な資料と考えられる。

（２）炭焼窯跡

炭焼窯跡は、西尾根・南尾根からそれぞれ１基ずつ、合計２基が検出された。規模や形態はそれぞれ異なるが、いずれも斜面に面した位置に立地する。

第１号炭焼窯跡（第49図）

Ｓ－９グリッドに位置する。第３号土壙・Ｐ173～Ｐ175と重複し、これを壊している。規模は、遺存値で、長軸4.72m、短軸1.65m、深さ0.37m、主軸方位は、Ｎ－41°－Ｗである。底面は、北西方向の斜面に向かって緩やかに傾斜している。

底面の南西側半分に溝状の掘り込みを有し、北東半分よりも20cmほど深く掘り込まれている。

覆土の中位に被熱面があり、少なくとも２回の操業の可能性があるが、底面においては被熱面が確認されなかった。

時期を特定する遺物が出土しなかったため、炭化材１点の自然科学分析を行い、平安時代中期～鎌倉時代に相当する年代値が得られた。このことから、第１号炭焼窯跡は、第１号住居跡の北側に隣接するものの、住居跡よりは操業時期は新しい

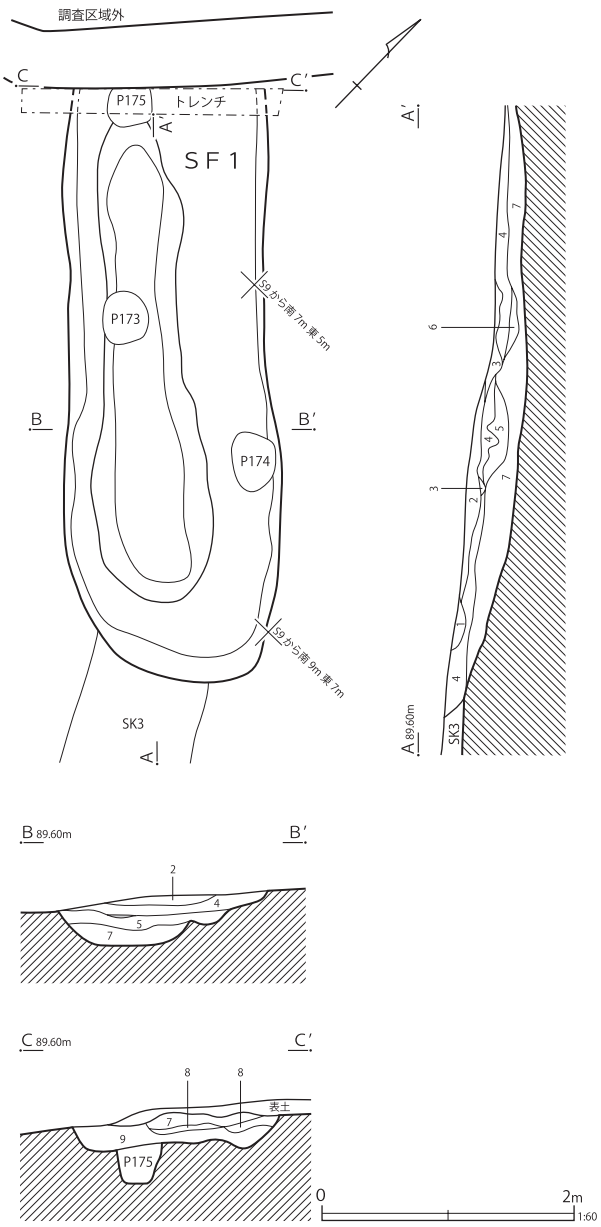
と想定される。自然科学分析から得られた年代に並行する時期の遺構・遺物は、今回の調査においては確認されなかった。

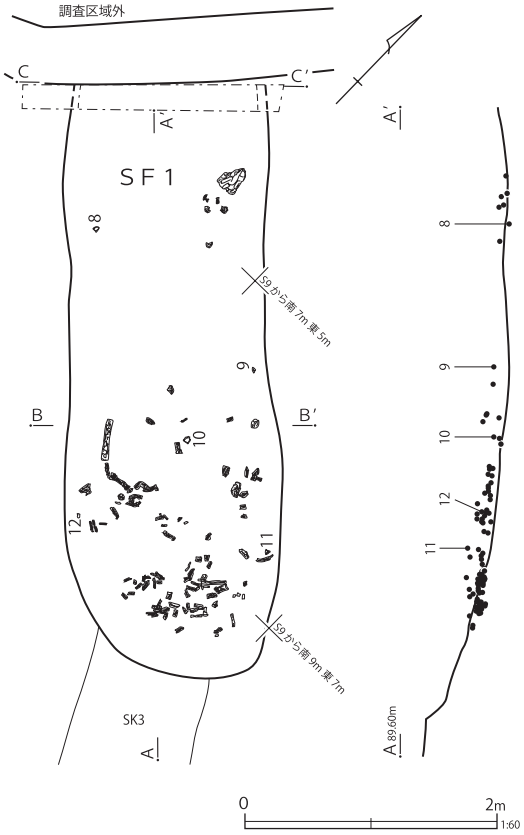
また、併せて行った炭化材の樹種同定では、炭化材の樹種はクヌギ節であることが判明した。クヌギ節は燃料材としての火力は高くないが長時間燃焼する特徴をもつ木材である。第１号炭焼窯跡においては、燃料材もしくは炭材として利用されたものと考えられる。

第２号炭焼窯跡（第50・51図）

Ｃ－５・６グリッドに位置する。南に向かって傾斜する斜面を臨む尾根上に築造されている。規模は、長軸7.50m、短軸2.0m、深さ0.50mであり、主軸方位はN－20°－Wである。第１号炭焼窯跡より、規模は大きい。

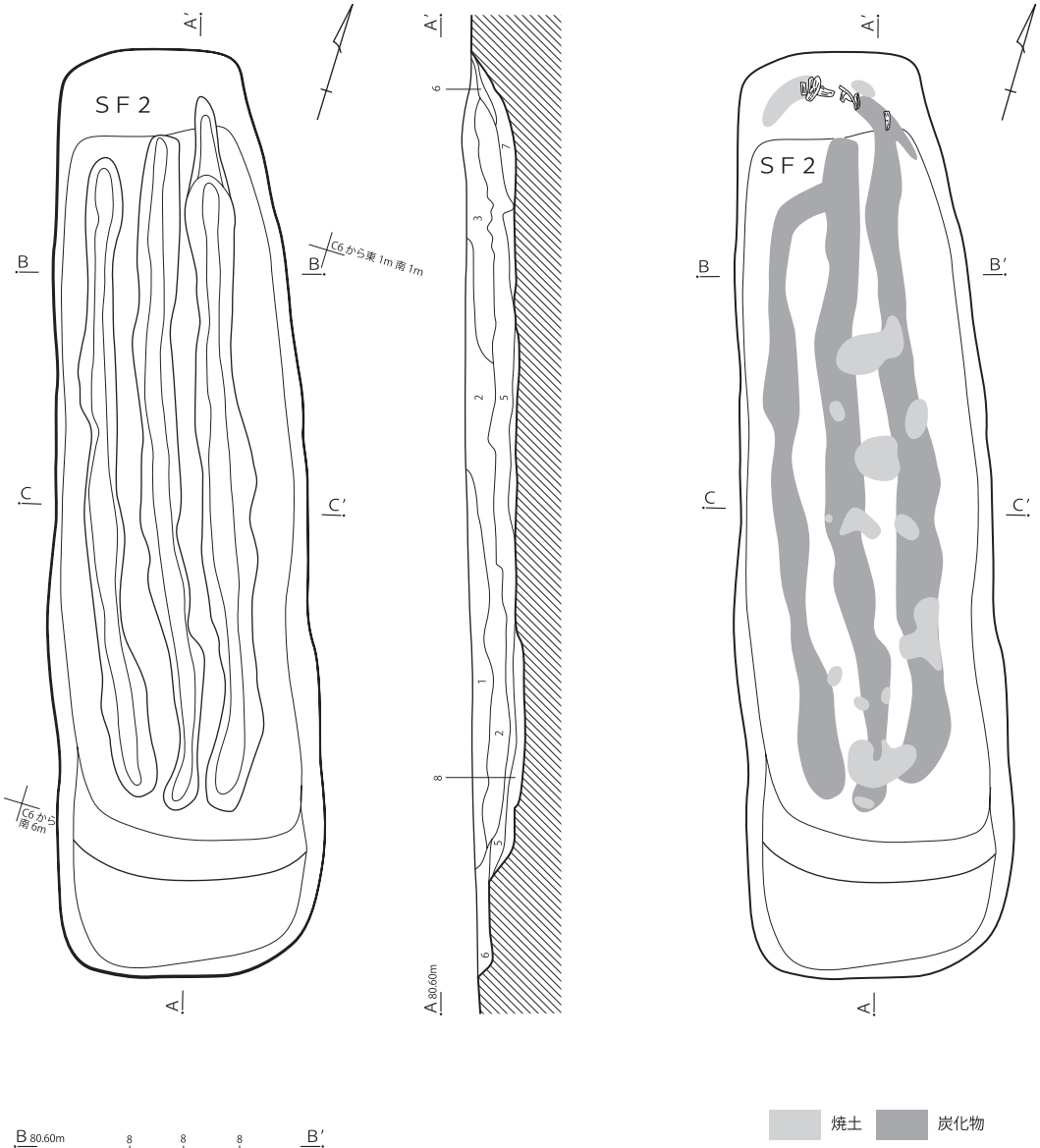
長軸の南側およそ6.20mの位置で一段高くなり、およそ0.70mのテラス状の施設を有する。焚口、あるいは作業場と推察されるが、やや狭い点が気

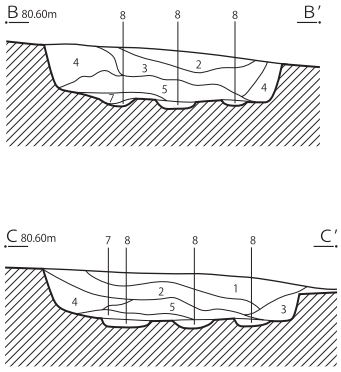




ＳＦ１
1　暗褐色土　炭化物粒多量　焼土粒中量
2　黒褐色土　焼土粒少量　黄褐色土ブロック中量 消火時の被覆土
3　黄褐色土　ロームを主体とする　消火時の被覆土か
4　黒褐色土　底面部分的にわずかに被熱　木炭多量　木炭焼成面
5　黄褐色土　炭化物ブロック粒微量　埋め戻し土
6　黒褐色土　炭化物多量　底面に炭化物層形成する　旧床面
7　黄明褐色土　ローム質土　室天井被覆土か
8　暗黄褐色土　ローム質土　室天井被覆土か
9　黒褐色土　炭化物粒・炭化物小ブロック多量　炭焼窯埋土か

第49図　第１号炭焼窯跡





SF2
1　褐色土　　黄褐色砂粒多量　炭化物粒少量
2　暗褐色土　ローム質土含む　炭化物粒多量　埋め戻し土
3　黄褐色土　ローム質土・炭化物多量　埋め戻し土
4　黄褐色土　ローム質土を主体とする　炭化物微量　埋め戻し土
5　黒褐色土　炭化物層状に含む　底面部分的に被熱する
6　褐色土　　細礫(φ10～30㎜)多量　炭化物粒少量
7　黄褐色土　炭化物ブロック含む
8　炭

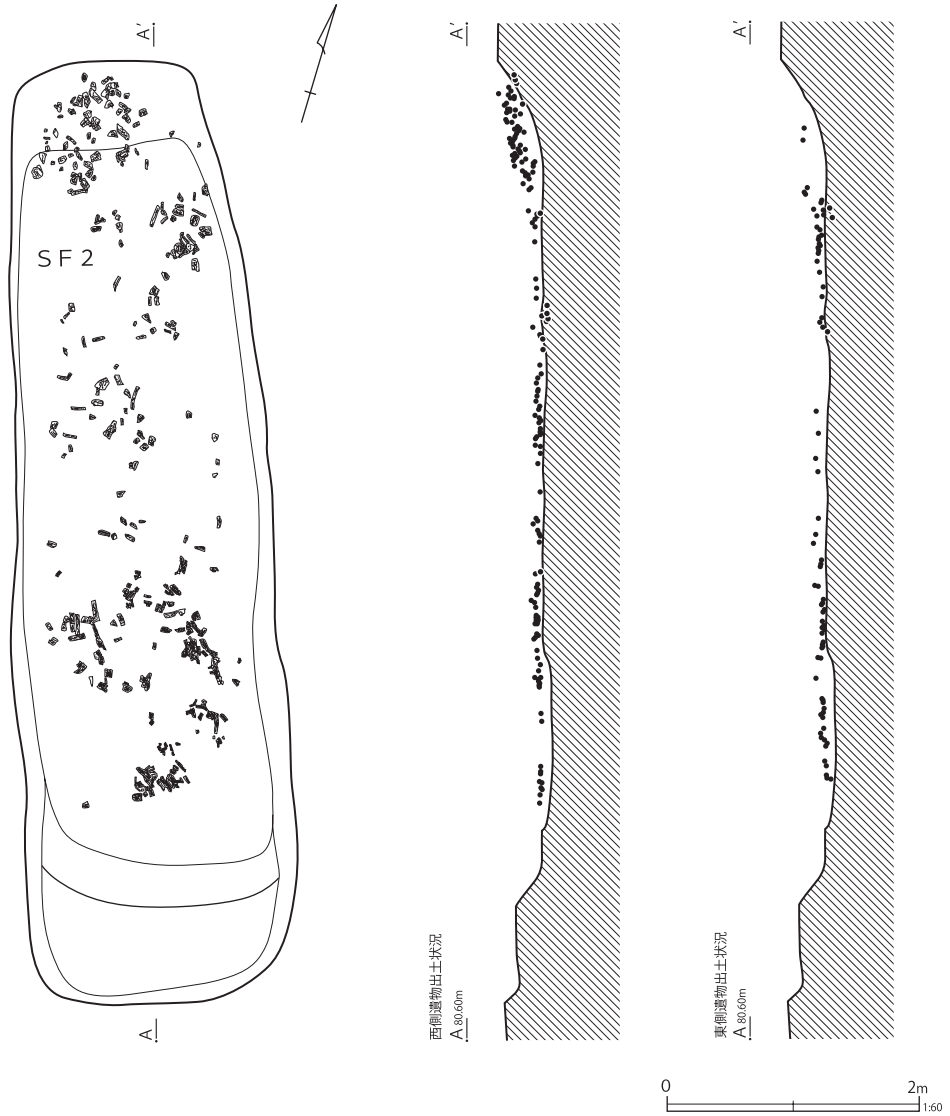
0　2m
1:60

第50図　第２号炭焼窯跡（1）

にかかる。底面には、長軸方向に沿って３条の溝状の施設が掘削されていた。

覆土の堆積状況を確認すると、底面および溝状の施設には灰が堆積しており、また、炭化材の分布も認められる。さらに灰層の上に堆積する第４層の上にも炭化材の分布が認められることから、少なくとも２回の操業が想定されるが、どの面においても明瞭な被熱面は確認できなかった。

本遺構でも遺物の出土がなかったため、第１号炭焼窯跡と同様に、出土した炭化材４点に対して自然科学分析による年代測定と炭化材の樹種同定を行った。その結果、炭化材３点で11世紀前半～12世紀後半の平安時代中期から後期の年代が得られ、１点で11世紀中頃～13世紀前半の平安時代中期から鎌倉時代の年代が得られた。よって、本遺構は、第１号炭焼窯跡と並行する時期か、やや新しい時期のものと想定される。また、炭化材の樹種はすべてアカガシ亜属であった。アカガシ亜属の材は非常に硬質で、火持ちがよいことが特徴である。第１号炭焼窯跡のクヌギ節の材とは対照的な木材である。木炭は、樹種によって生成される木炭の特徴が異なり、用途によって使い分けられる。例えば製鉄には、硬質で火持ちの良い木炭が使用される。このことから、第１・２号炭焼窯跡で焼成された木炭は、それぞれ用途によって、異なる供給先があった可能性が想定できる。



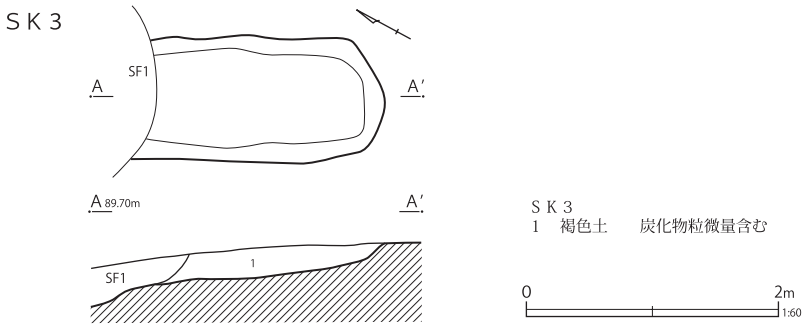
第51図　第２号炭焼窯跡（2）

（３） 土壙

検出された土壙のうち、当該時期に属するものは１基のみである。Ｂ区に位置する。平面形態と覆土から、古代のものと認定した。

第３号土壙（第52図）

Ｓ・Ｔ－９グリッドに位置する。平安～鎌倉時代に比定される第１号炭焼窯跡と重複し、これに壊されている。平面形態は、隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は、遺存値で、長軸1.80m、短軸1.00m、深さ0.25mである。第１号炭焼窯跡の一部と思われたが、断面観察によって重複関係が認められたため、土壙とした。



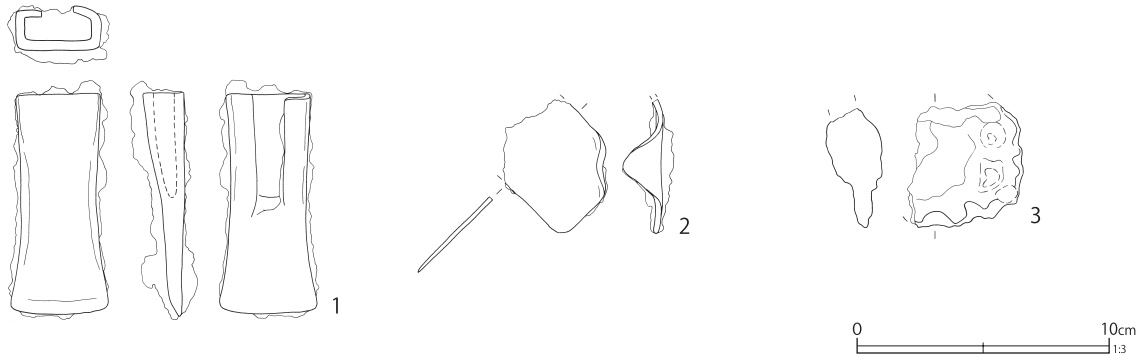
第52図　土壙

第11表　土壙一覧表

遺構番号	グリッド	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
ＳＫ３	Ｓ・Ｔ－９	楕円形	1.80	1.00	0.25	Ｎ－29°－Ｗ	SF1より古	

（４） グリッド出土遺物

第53図１～３は、鉄製品である。１は、Ｍ－13グリッドより出土した袋状鉄斧である。第１号住居跡より出土したものと異なり袋部は方形である。２は、鎌である。柄装着部の破片である。３は、椀形滓である。本調査区からは、鍛冶遺構は検出されなかったが、周辺遺跡における鍛冶遺構の存在が想定される。



第53図　グリッド出土遺物

第12表　グリッド出土遺物観察表（第53図）

番　号	出土位置	器　種	法量	備　考
1	Ｍ－13	袋状鉄斧	長さ8.7 刃幅3.9 袋部3.4×1.8 厚さ0.4 重さ123.9	№487 袋部方形
2	－	鎌	刃長[4.7] 刃幅4.0 背幅0.2 重さ20.2	№337 柄装着部の破片
3	－	椀形滓	長さ[4.9] 幅[4.6] 厚さ2.2 重さ66.5	№297 磁着極めて弱い

３　中・近世の遺構と遺物

（１）溝跡

溝跡は、Ａ区から２条、Ｂ区から１条、合計で３条検出された。第１・２号溝跡は東尾根に位置し、第３号溝跡は中央から南への尾根を分断している。

第１・２号溝跡は、細く浅く尾根沿いを走っており、第１・２号溝跡の間に位置する第１号道路跡と一連のものと考えられる。

第１号溝跡（第54図）

Ｆ－18・19・20・21グリッドに位置する。第12号焼土跡と重複し、これを壊している。また、第13号焼土跡と重複し、これに壊されている。規模は、長さ15.06m、幅0.74m、深さ0.26m、走行方向Ｎ－88°－Ｗである。断面形態は、Ｕ字状を呈する。底面には段を有しており、溝掘削時の掘削単位とも思われる。

東尾根を斜めに横断するように、南東方向から北西方向に走る溝である。遺物は出土していないため時期は不明であるが、並行して走る第２号溝跡と、隣接する第１号道路と一連のものと考えられる。第１号道路は、硬化面の上層に浅間Ａ軽石の混入が認められることから、近世の道路跡と考えられる。よって、本溝跡も近世に属する可能性が高い。

第２号溝跡（第54図）

Ｆ－21グリッドに位置する。第１号道路跡と重複し、これに壊されている。規模は、長さ6.25m、幅0.45m、深さ0.10m、走行方向Ｎ－85°－Ｗである。断面形態は、Ｕ字状を呈する。

第１号溝跡と並行して、南東方向から北西方向に走る溝であるが、溝跡の深さや幅は、第２号溝跡が細く浅い。南東側は調査区外へと続くものと想定される。遺物は出土していない。

第１号溝跡および第１号道路跡と一連のものと考えられる。前述のとおり、第１号道路跡は近世の道路跡と考えられ、これと一連のものと考えられる本溝跡も近世に属する可能性が高い。

第３号溝跡（第55図）

Ｋ－14・15グリッドに位置する。

規模は、長さ5.78m、幅3.10m、深さ0.50m、走行方向Ｎ－80°－Ｗである。断面形態は、碗形を呈する。

尾根に直行して、東方向から西方向へ走る溝跡である。両端とも斜面となるため、調査した長さが溝跡の全長と思われる。当初、中世の尾根切り溝の可能性を考えたが、後述する覆土の状況から、中世の遺構とするには疑問が残る。

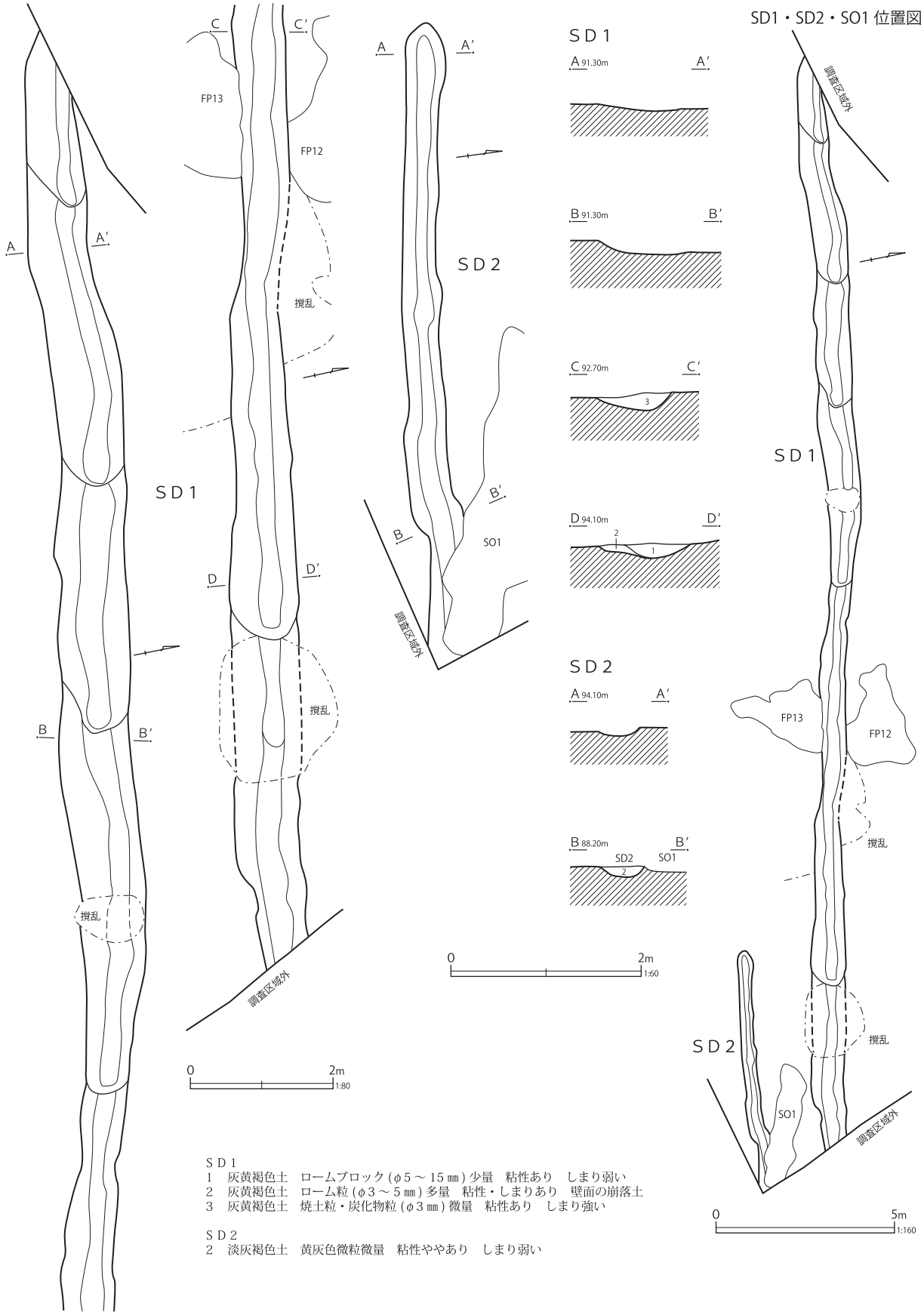
遺物は出土していないため、時期は不明であるが、覆土の堆積状況を確認すると、最も新しい表土層が堆積した際、溝はわずかにくぼんでいたことが分かる。他の遺構が、埋没したのち上部を削平された状態で検出されていることを考えると、相対的に新しい時期の遺構である可能性が高い。

（２）道路跡

道路跡は、７条検出された。①第１・４・５・６号道路、②第２・３号道路、③第７号道路のまとまりに大別できる。いずれも硬化面のみが確認された。第56図に硬化面の位置を示した。網掛けをした部分が硬化面である。硬化面の厚さは、第１号道路跡において確認した。

ほとんどが、尾根沿いを走る道路である。①は西尾根と東尾根を結ぶ東西方向、②は中央尾根と南尾根を結ぶ南北方向、③は斜面に直行して南北方向に走る。

第７号道路跡を除いた硬化面上層より浅間Ａ軽石が検出され、特に第１・２・３号道路跡で顕著であった。このことから、硬化面の最新の形成年



ＳＤ１
1　灰黄褐色土　ロームブロック（φ５～15㎜）少量　粘性あり　しまり弱い
2　灰黄褐色土　ローム粒（φ３～５㎜）多量　粘性・しまりあり　壁面の崩落土
3　灰黄褐色土　焼土粒・炭化物粒（φ３㎜）微量　粘性あり　しまり強い

ＳＤ２
2　淡灰褐色土　黄灰色微粒微量　粘性ややあり　しまり弱い

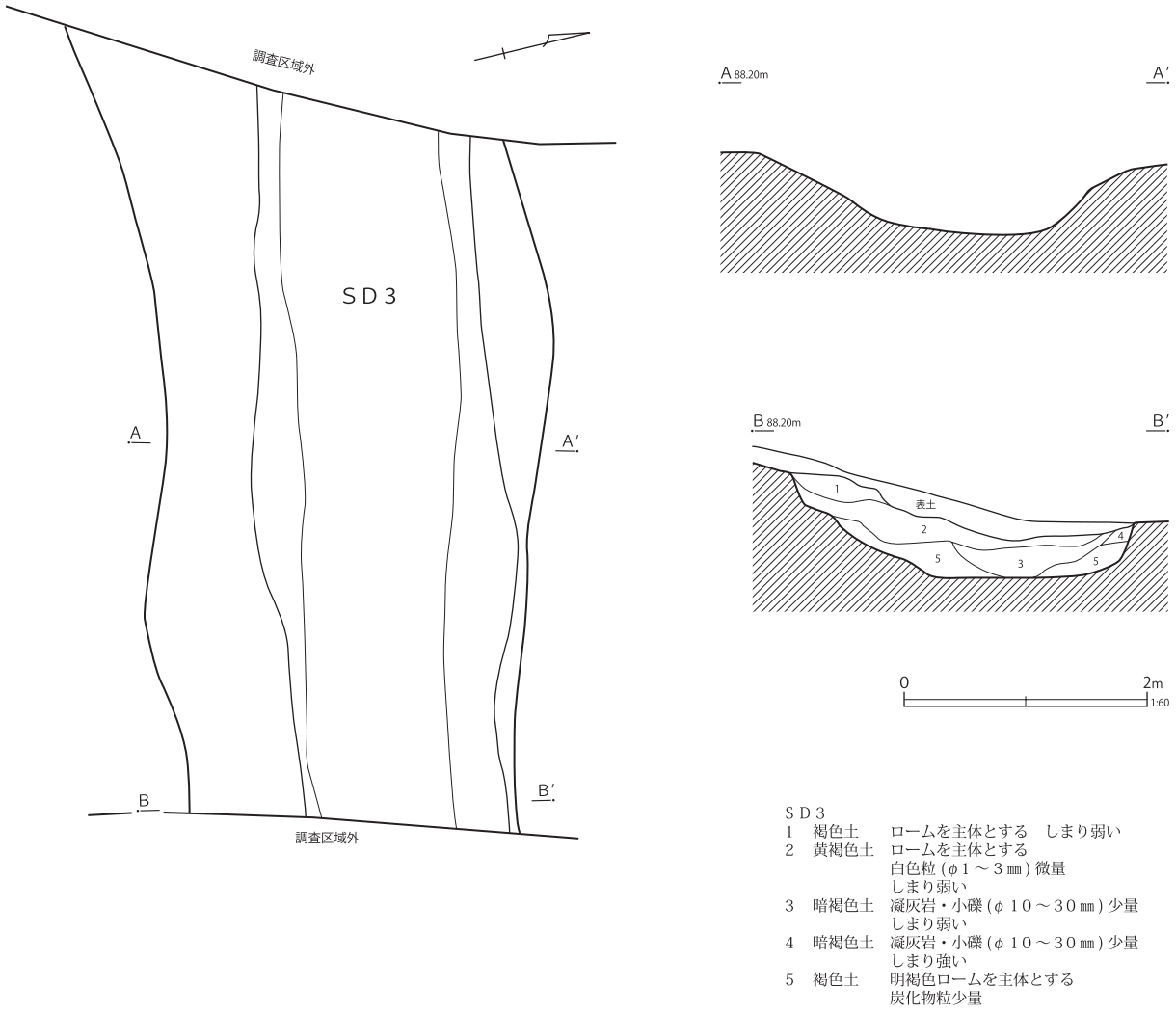
第54図　第１・２号溝跡

代は、1783年前後と想定される。

第１号道路跡（第56図）

Ｆ－21グリッドに位置する。規模は、長さ3.40ｍ、幅0.64ｍである。走行方位は、Ｎ－68°－Ｗである。硬化面の厚さは、0.06ｍである。尾根に沿って走る道路であり、東側の調査区外へと続く可能性が高い。また、中央尾根に位置する第４・５・６号道路跡に続くものと想定される。

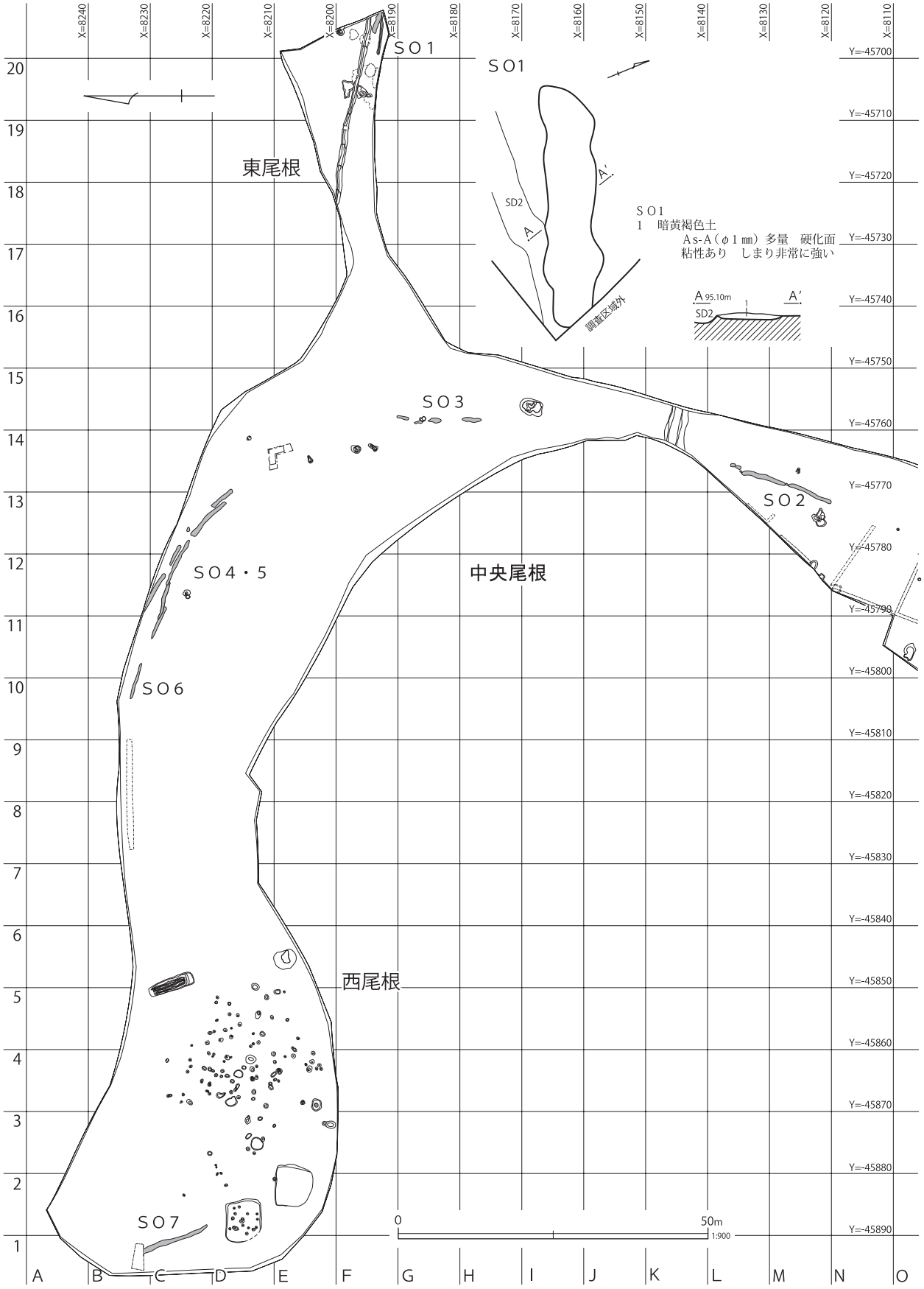
本道路跡の両側に位置する、第１・２号溝跡と一連のものと考えられる。



第55図　第３号溝跡

第13表　溝跡一覧表

遺構番号	グリッド	断面形態	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
ＳＤ１	Ｆ－18～21	U字状	15.06	0.74	0.26	Ｎ－88°－Ｗ	FP12より新　FP13より古	
ＳＤ２	Ｆ－21	U字状	6.25	0.45	0.10	Ｎ－85°－Ｗ	S01より古	
ＳＤ３	Ｋ－14・15	碗形	5.78	3.10	0.50	Ｎ－80°－Ｗ		


SO1
SO1
東尾根
SD2
A
A′
調査区域外
SO1
1　暗黄褐色土
As-A（φ1㎜）多量　硬化面
粘性あり　しまり非常に強い
A 95.10m
A′
SD2
1
SO3
SO2
SO4・5
中央尾根
SO6
西尾根
SO7
0
50m
1:900
X=8240
X=8230
X=8220
X=8210
X=8200
X=8190
X=8180
X=8170
X=8160
X=8150
X=8140
X=8130
X=8120
X=8110
Y=-45700
Y=-45710
Y=-45720
Y=-45730
Y=-45740
Y=-45750
Y=-45760
Y=-45770
Y=-45780
Y=-45790
Y=-45800
Y=-45810
Y=-45820
Y=-45830
Y=-45840
Y=-45850
Y=-45860
Y=-45870
Y=-45880
Y=-45890
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O

第56図　道路跡位置図

第２号道路跡（第56図）

Ｌ－14グリッド、Ｍ－13・14グリッドに位置する。規模は、長さ17.28m、幅0.80mである。走行方位は、Ｎ－16°－Ｅである。

硬化面の表層には、浅間Ａ軽石の混入が顕著に認められた。

南尾根に沿って南北方向に走る道路であり、第３号道路跡に接続するものと考えられる。

第３号道路跡（第56図）

Ｇ・Ｈ－15グリッドに位置する。規模は、長さ13.56m、幅0.8mである。走行方位は、Ｎ－４°－Ｗである。南尾根に沿って中央尾根へと走る道路で、第２号道路跡に接続するものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間Ａ軽石の混入が顕著に認められた。

第４号道路跡（第56図）

Ｂ－12グリッド、Ｃ－12・13グリッドに位置する。規模は、長さ24.00m、幅0.60mである。走行方位は、Ｎ－60°－Ｗである。

中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する、第５・６号道路跡、走行方位が近い第１号道路跡と一体のものと考えられる。第５号道路跡が尾根沿いに西尾根に向かうのに対して、本道路跡は斜面を下る道であるものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間Ａ軽石の混入が認められた。

第５号道路跡（第56図）

Ｃ－11・12グリッドに位置する。規模は、長さ24.60m、幅0.66mである。走行方位は、Ｎ－75°－Ｗである。

中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する第４・６号道路跡、走行方位が近い第１号道路跡と一体のものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間Ａ軽石の混入が認められた。

第６号道路跡（第56図）

Ｂ－11グリッドに位置する。規模は、長さ6.00m、幅0.38mである。走行方位は、Ｎ－74°－Ｗである。硬化面の上層には、浅間Ａ軽石の混入がわずかに認められた。中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する、第４・５号道路跡、走行方位が近い第１号道路跡と一体のものと考えられる。

第７号道路跡（第56図）

Ｂ－１グリッド、Ｃ－１・２グリッドに位置する。規模は、長さ11.04m、幅0.88mである。走行方位は、Ｎ－20°－Ｗである。第１～６号溝跡と比較して、硬化面はやや薄く、また、浅間Ａ軽石の混入は認められなかった。

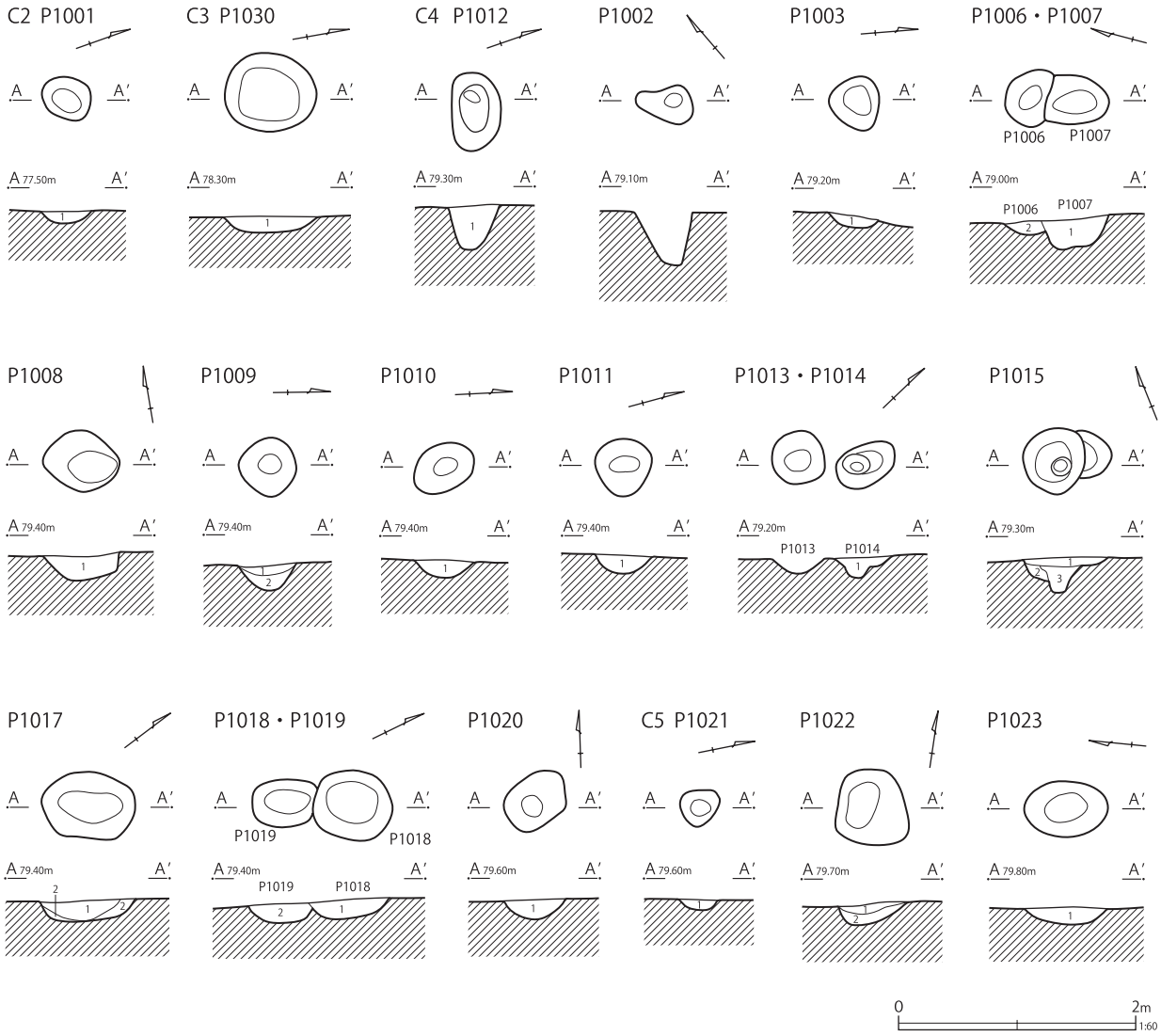
（３）ピット（第57～67図）

ピットは、Ａ区で94基、Ｂ区で130基、合計224基が検出された。その多くが、他の遺構と同様に西尾根と南尾根端部の平場に分布する。住居跡の柱穴の可能性もあるが、断面観察で柱穴と認められたものはごくわずかである。

遺物が出土したものも少なく、遺物はすべて縄文時代のものであった。

ピット出土遺物（第68図１～11）

１はＰ５出土の中期中葉の阿玉台式土器で、襞状整形痕を残す胴部破片である。砂粒を多く含み、少量の雲母を含む。２はＰ120出土の阿玉台式土器で、胴部の屈曲部を隆帯で区画している。器面が荒れていて不明瞭であるが、隆帯に沿ってやや幅広の角押文もしくはキャタピラ文の痕跡が残っている。砂粒を多く、雲母を少量含む。３はＰ120出土の前期後葉の諸磯ｂ式土器であろう。不明瞭であるが地文縄文上に、斜位の集合平行沈線文を施文する。４はＰ134出土の前期末の諸磯ｃ式土器であろう。垂下するやや幅広の隆帯に、半截竹管状工具による叉状の連続押引刺突文を施文する。地文は無文である。５はＰ162出土の諸磯ｂ３式土器である。胴部の単節ＲＬ縄文上に、灰白色の低平な浮線文を３本施文し、交互に異方向の斜位



C２　P1001
1　黒褐色土　黒土主体　ローム混　炭化物粒微量

C３　P1030
1　黄褐色土　ローム主体　黒色土含む　粘性・しまりやや強い

C４　P1012
1　暗褐色土　ロームブロックと黒色土ブロックの混合層　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

C４　P1003
1　暗褐色土　黒色土ブロック少量・砂粒・炭化物粒微量含む
　　粘性・しまりあり

C４　P1006・P1007
1　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い
2　黄褐色土　ローム主体　焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

C４　P1008
1　黒褐色　ロームブロックと黒色ブロックの混合層　砂粒微量
　　粘性・しまりやや強い

C４　P1009
1　黒褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまり強い
2　暗褐色土　黒色ブロック斑状に少量含む　粘性・しまりやや強い

C４　P1010・P1011・P1020
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）微量　黒褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

C４　P1014
1　黄灰色土　黒色土斑に含む　砂粒微量　粘性・しまりあり

C４　P1015
1　暗褐色土　砂粒・炭化物粒微量・ローム粒少量含む
2　暗赤褐色土　黒色粒微量含む　粘性・しまりやや強い
3　暗褐色土　粘性・しまりあり

C４　P1017
1　暗褐色土　ロームブロックと黒色ブロックの混合層　焼土粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黄灰色土　ロームブロックと黒色ブロックの混合層
　　１層より黒色ブロック少ない　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

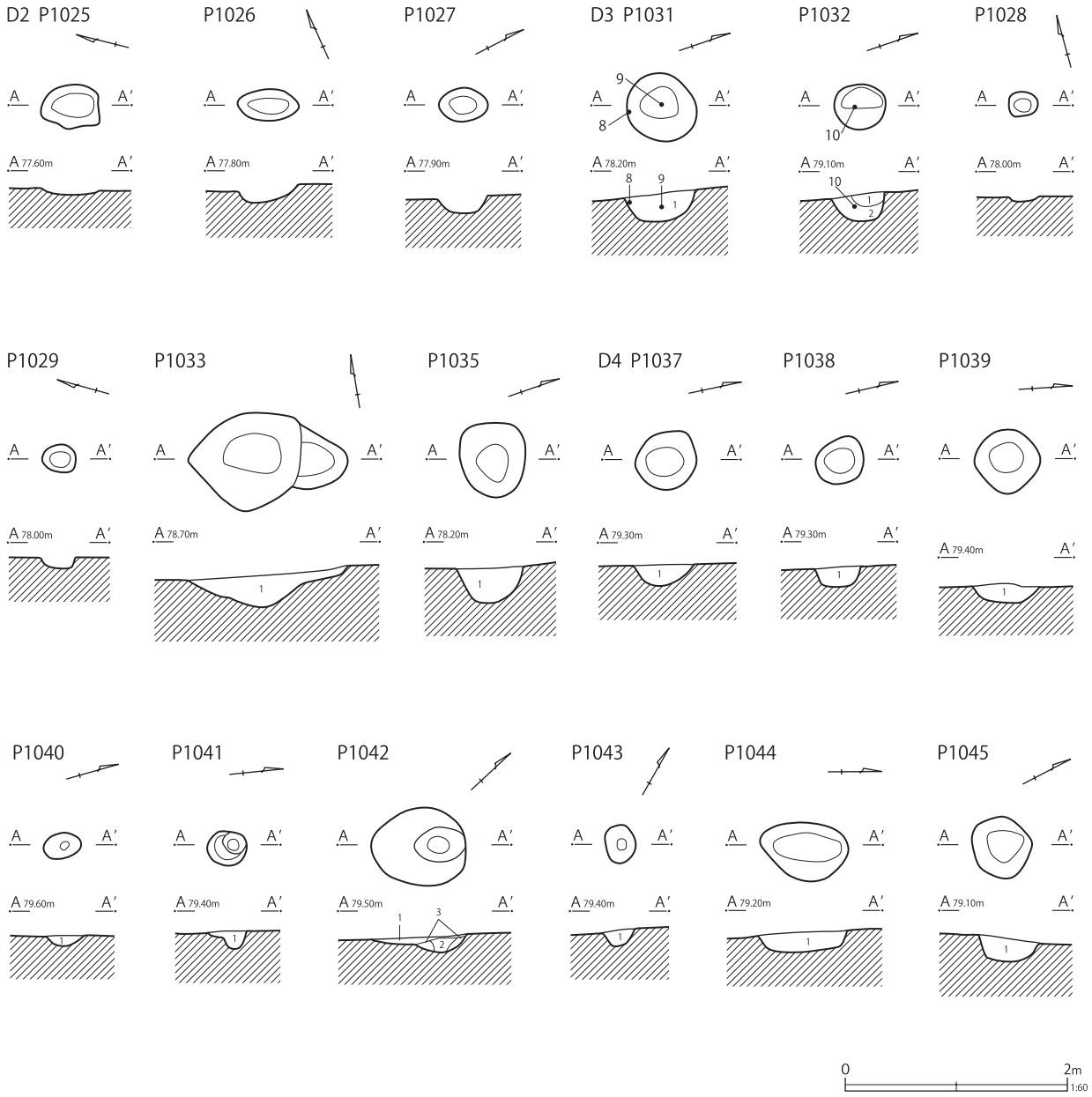
C４　P1018・P1019
1　暗褐色土　黒色土斑状に含む　焼土粒微量　粘性・しまりやや強い

C５　P1021
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）微量　黒褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

C５　P1022
1　赤褐色土　ロームブロック主体　黒色ブロック少量・焼土粒微量
　　粘性やや強い　しまり強い
2　暗黄灰色土　黒色土ブロック少量　粘性やや強い　しまり強い

C５　P1023
1　赤褐色土　As-A 微量・黒褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

第57図　A区ピット（1）



D3　P1031
1　黄褐色土　　ローム主体　黒色土斑に含む

D3　P1032
1　黄褐色土　　ローム主体　黒色土斑に含む
2　暗褐色土　　ロームと黒色土の混合層　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや弱い

D3　P1033
1　暗褐色土　　ロームブロックが斑状に入る　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや弱い

D3　P1035
1　暗黄褐色土　ロームブロックと暗褐色土の混合層　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや弱い

D4　P1037・P1038
1　暗褐色土　　黒色土斑状に含む　焼土粒微量　粘性・しまりやや強い

D4　P1039
1　黒褐色土　　白色粒・焼土粒微量　粘性・しまりやや強い

D4　P1040
1　暗褐色土　中央にアタリ状にくぼみあり　柱穴か

D4　P1041
1　暗褐色土　ローム少量含む　焼土粒・炭化物粒微量

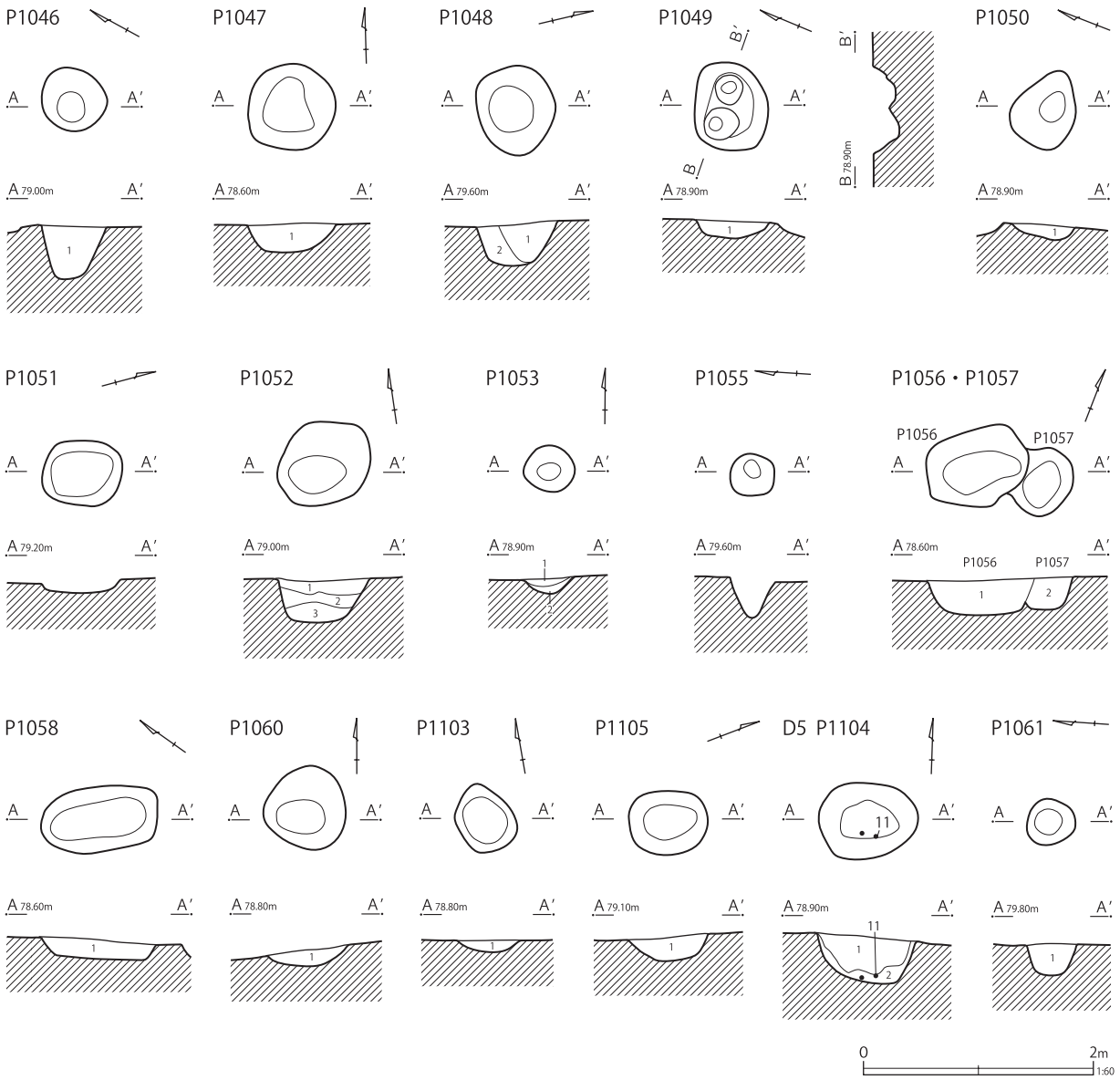
D4　P1042
1　黄灰色土　粘性あり　しまりやや弱い
2　黄灰色土　白色粒微量　粘性あり　しまりやや弱い
3　黄灰色土　ローム主体　白色粒微量含む

D4　P1043
1　暗褐色土　ローム少量　焼土粒・炭化物粒微量含む

D4　P1044
1　黄灰色土　ロームブロックと暗褐色土ブロックの混合層
　　橙色粒・As-A 微量　粘性・しまりあり

D4　P1045
1　黄灰色土　黒色土少量　粘性あり　しまりやや弱い

第58図　A区ピット（2）



D4　P1046（柱穴）
1　黒褐色土　ロームブロック・焼土粒・炭化物粒微量
2　暗褐色土　ローム主体　黒色土斑にふくむ

D4　P1047
1　黄褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　炭化物粒微量　粘性・しまりあり

D4　P1048
1　黒褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　黒色土斑に含む　ローム粒含む　粘性・しまりやや強い

D4　P1049
1　黒褐色土　白色粒・焼土粒・炭化物粒微量・ローム粒含む
　　粘性あり　しまり強い

D4　P1050
1　黒褐色土　黒色土ブロック含む　粘性・しまりやや強い

D4　P1052
1　黒褐色土　As-A 微量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　As-A 微量
3　暗褐色土　砂粒・As-A 微量　粘性・しまりやや強い

D4　P1053
1　暗褐色土　ローム主体　黒色土含む　土器粒・焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

D4　P1056・P1057
1　黄褐色土　ローム主体　黒褐色土を斑に含む　炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

D4　P1058
1　暗褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

D4　P1060
1　暗褐色土　砂粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

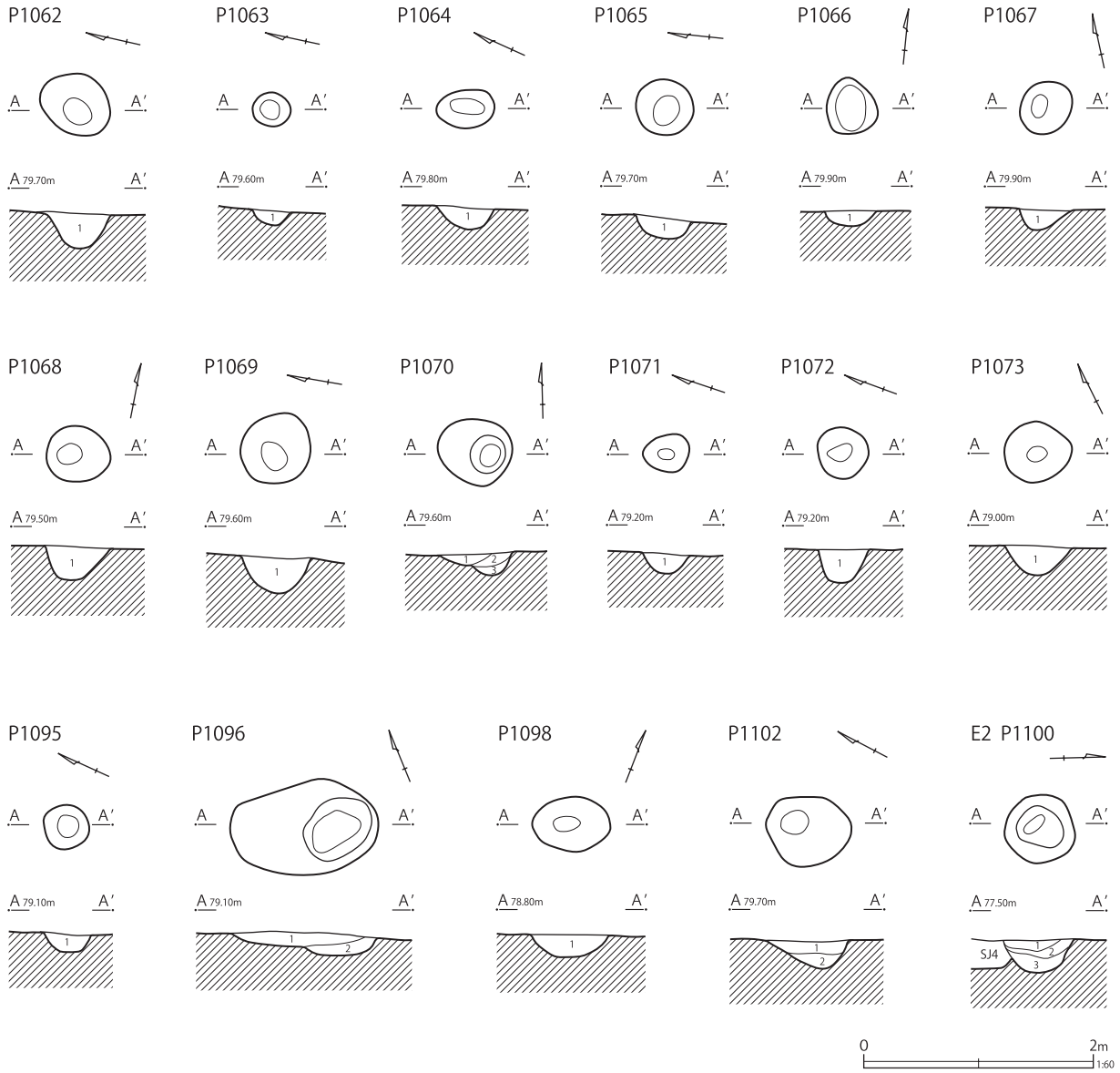
D4　P1103
1　暗褐色土　ロームブロック・黒色土ブロック含む
　　砂粒・炭化物粒微量

D4　P1105
1　黄褐色土　ローム主体　黒色土ブロック・砂粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや弱い

D5　P1104
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまり強い
2　黄褐色土　黒色土斑に含む　粘性・しまり強い

D5　P1061
1　暗褐色土　ロームと暗褐色土の混合層　炭化物粒・砂粒微量
　　粘性あり　しまりやや弱い

第59図　A区ピット（3）



D5　P1062
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）微量・黒褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

D5　P1063
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）・ローム粒微量・褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

D5　P1064
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）微量・褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

D5　P1065・P1066・P1067・P1068
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

D5　P1069
1　赤褐色土　白色微粒（As-A か）微量　黒褐色ブロック少量
　　粘性・しまりやや強い

D5　P1070
1　黒褐色土　ロームブロック含む　As-A 微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黄褐色土　ロームブロックと黒色土ブロックの混合層
　　As-A・焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い
3　黄褐色土　ロームブロック主体　暗褐色土斑に含む　粘性・しまりやや強い

D5　P1071
1　暗赤褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　砂粒・焼土粒微量
　　粘性・しまりやや強い

D5　P1072・P1073
1　暗褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　砂粒・焼土粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黄灰色土　黒色土斑に含む　粘性・しまりやや強い

D5　P1095
1　暗褐色土　ローム粒主体　赤色ロームブロック・砂粒微量
　　粘性・しまりやや強い

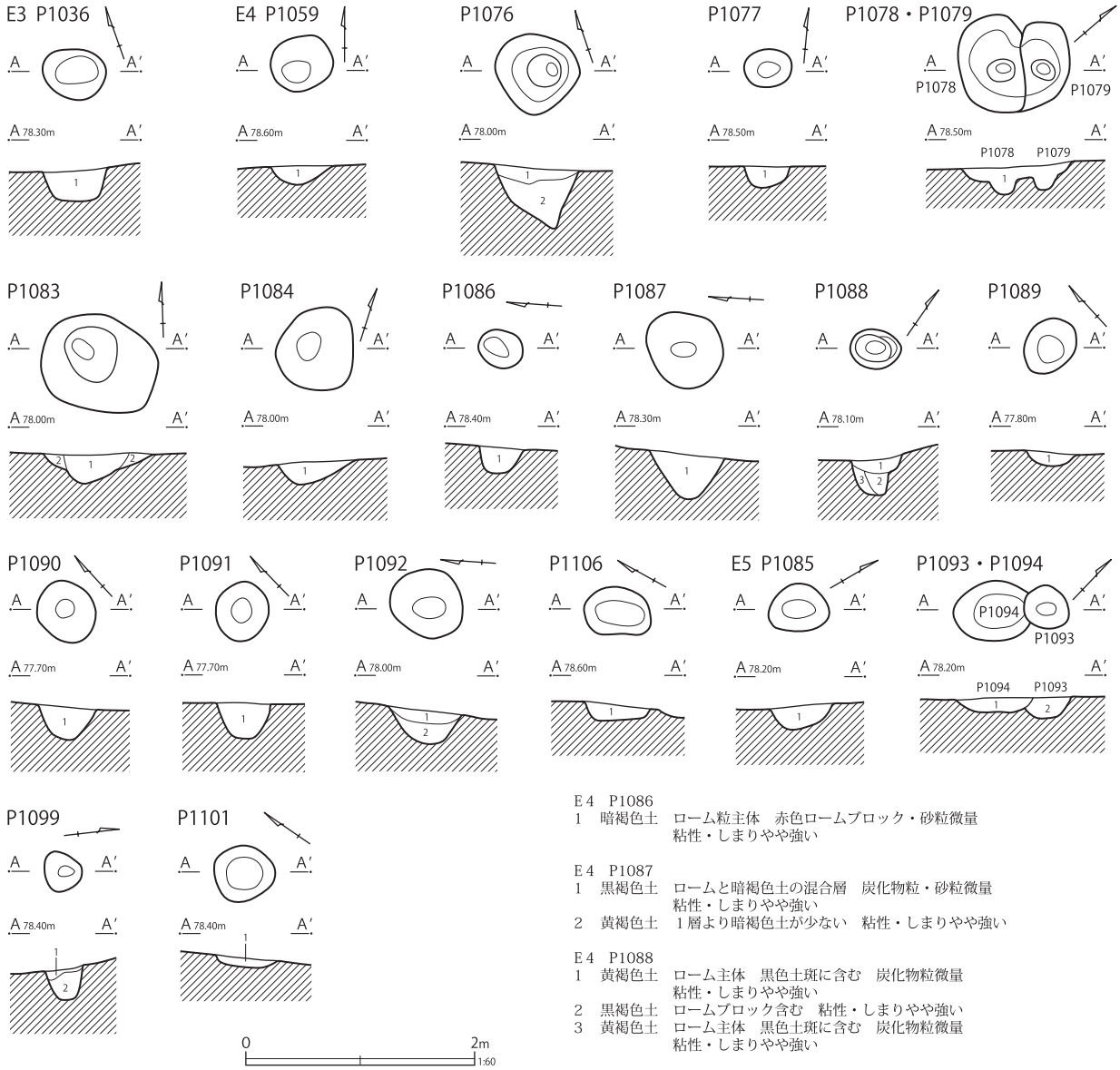
D5　P1096
1　暗褐色土　砂粒・焼土粒微量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　１層に似るがやや暗色味が強い

D5　P1098
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・焼土粒微量

D5　P1102
1　暗褐色土　黒色土・砂粒微量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　黄褐色粒少量

D5　P1100
1　暗褐色土　炭化物粒・凝灰岩片少量
　　粘性あり　しまり弱い

第60図　A区ピット（4）



E３　P1036
1　暗褐色土　ロームと黒色土の混合層　炭化物粒微量　粘性・しまりやや弱い

E４　P1059
1　暗褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

E４　P1076
1　赤褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　粘性・しまりやや弱い
2　赤褐色土　ロームブロックと黒色土ブロックの混合層　砂粒微量
　　粘性・しまりやや弱い

E４　P1077
1　暗褐色土　ロームブロックと黒色土の混合層　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い　※柱穴か

E４　P1078・P1079
1　暗褐色土　ロームと暗褐色の混合層　砂粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い　柱穴

E４　P1083
1　赤褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　粘性・しまりやや強い
2　黒褐色土　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

E４　P1084
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　焼土粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

E４　P1086
1　暗褐色土　ローム粒主体　赤色ロームブロック・砂粒微量
　　粘性・しまりやや強い

E４　P1087
1　黒褐色土　ロームと暗褐色土の混合層　炭化物粒・砂粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黄褐色土　１層より暗褐色土が少ない　粘性・しまりやや強い

E４　P1088
1　黄褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黒褐色土　ロームブロック含む　粘性・しまりやや強い
3　黄褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

E４　P1089・P1091
1　赤褐色土　黒色土斑に含む　焼土粒・炭化物粒微量

E４　P1090
1　赤褐色土　ローム主体　黒色土斑に含む　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

E４　P1092
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い
2　黄褐色土　ローム主体　黒色土ブロック・炭化物粒微量

E４　P1106
1　暗褐色土　ローム主体　砂粒微量　粘性・しまりあり

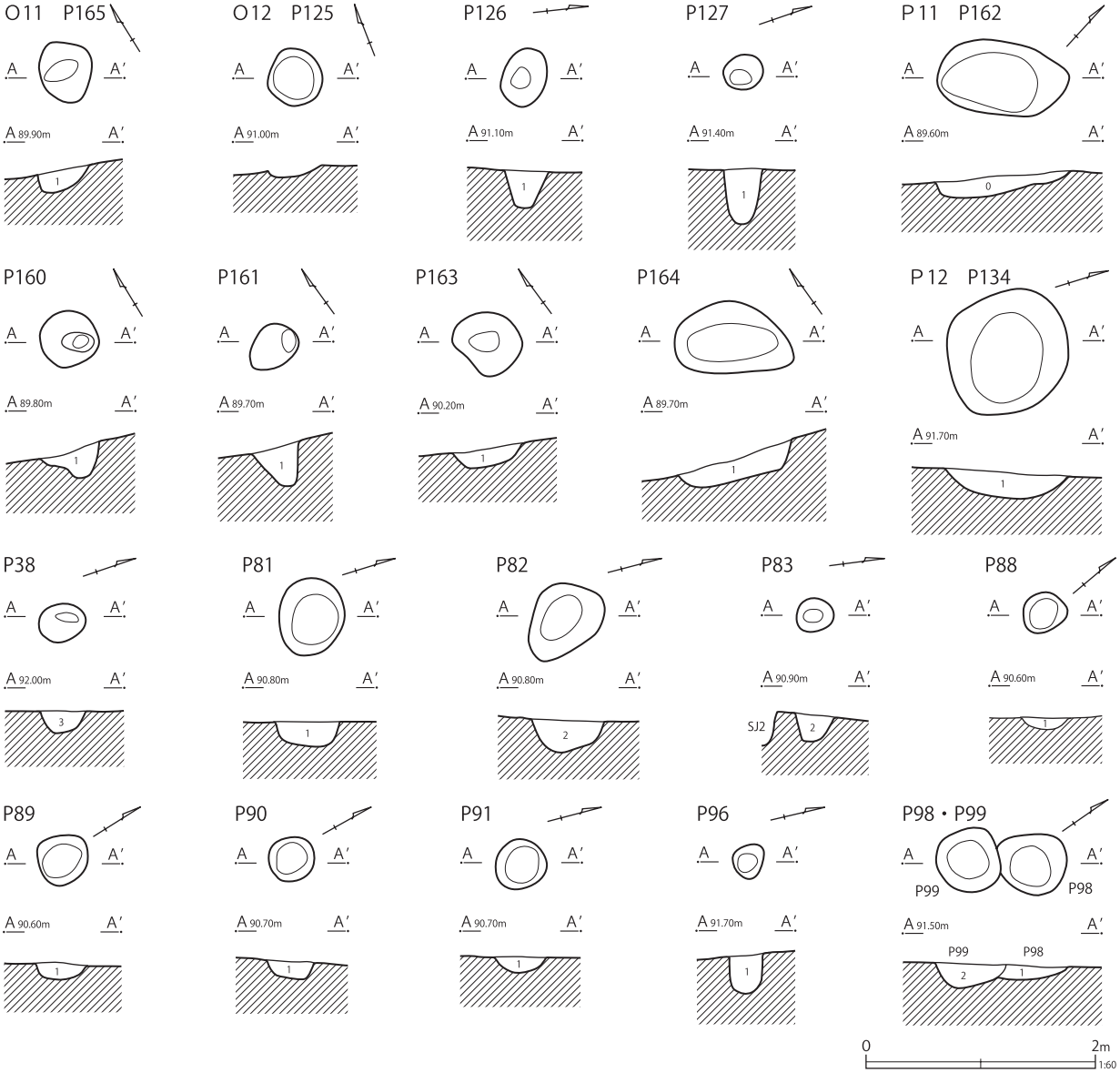
E５　P１085
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量　粘性・しまりやや強い

E５　P1093・P1094
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒微量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒微量

E５　P1099
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量
2　暗褐色土　黒色土斑に含むが１層より少ない

E５　P1101
1　暗褐色土　黒色土斑に含む　砂粒・炭化物粒微量

第61図　Ａ区ピット（５）



O11 P165
1 暗褐色土 炭化物粒・雲母片・小礫片微量 粘性・しまりややあり

O12 P126
1 黒褐色土 礫少量

O12 P127
1 暗褐色土 砂粒・礫微量 粘性・しまりやや強い

P11 P162
0 明褐色土 粘性・しまりややあり

P11 P160・P161・P163
1 暗灰褐色土 明黄褐色土粒微量 粘性ややあり しまりなし

P11 P164
1 暗灰褐色土 炭化物粒・焼土粒中量

P12 P134
1 褐色土と暗褐色土の相互堆積 礫・焼土粒・炭化物粒極微量

P12 P38
1 暗褐色土 黒色土を含む 砂粒微量 礫極微量 粘性・しまりあり

P12 P81
1 暗褐色土 黒灰褐色土を含む 礫微量 炭化物粒・焼土粒極微量
粘性あり しまりやや強い

P12 P82・P83
1 黒褐色土 礫少量 炭化物粒極微量
粘性あり しまりやや強い

P12 P88・P89
1 黒褐色土 礫微量 焼土粒・炭化物粒極微量
粘性・しまりやや強い

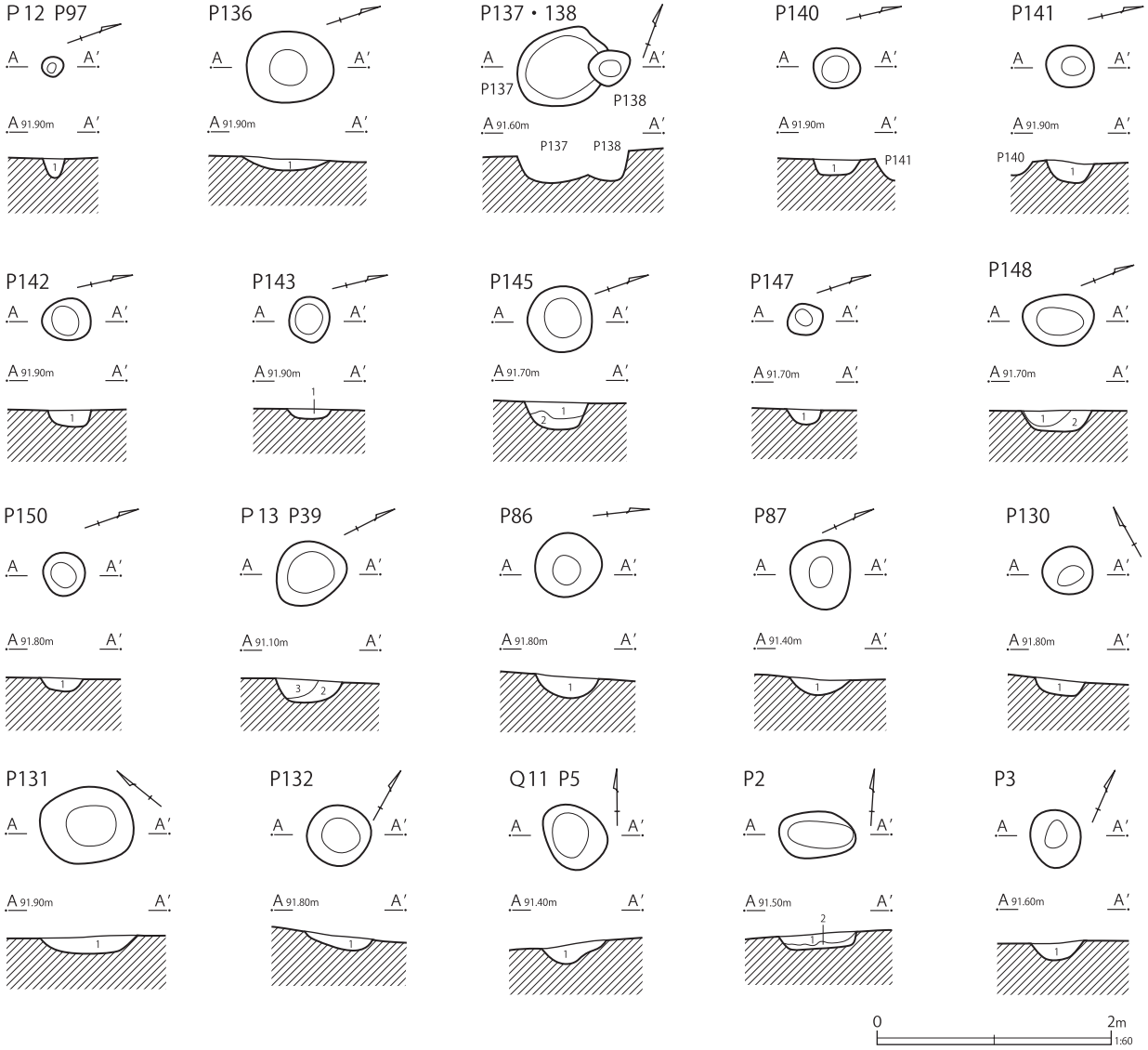
P12 P90
1 暗褐色土 黒色土ブロック少量 砂粒微量
焼土・炭化物粒極微量

P12 P91
1 暗褐色土 黒色土ブロック少量 炭化物粒極微量
礫微量 粘性・しまりやや強い

P12 P96
1 暗褐色土 砂粒極微量

P12 P98・P99
1 暗褐色土 黒色土・砂粒微量 焼土・炭化物粒極微量
粘性・しまりやや強い
2 暗褐色土 黒色土・砂粒少量 焼土・炭化物粒極微量
粘性・しまりやや強い

第62図 B区ピット（1）



P12　P97
1　暗褐色土　黒褐色粒・砂粒少量　炭化物粒極微量
　　粘性・しまりあり

P12　P136
1　黒褐色土　砂粒微量　礫極微量
　　粘性・しまりやや強い

P12　P140～P143
1　褐色土　砂粒含む　粘性あり　しまりやや弱い

P12　P145
1　暗褐色土　焼土粒・砂粒少量　炭化物粒微量
2　黒褐色土　砂粒含む　粘性やや強い

P12　P147
1　褐色土　砂粒含む　しまり弱い

P12　P148
1　褐色土　黄褐色土粒含む　粘性ややあり
2　褐色土　礫多量

P12　P150
1　褐色土　砂粒少量　しまり弱い

P13　P39
2　明褐色土と黒色土の混土　礫・炭化物微量
3　暗褐色土と黒色土の混土　２と３の境は漸移的　柱穴

P13　P86
1　暗褐色土　礫微量　焼土粒極微量
　　粘性・しまりやや強い

P13　P87
1　暗褐色土　黒色土ブロック・硬化ロームブロック・砂粒微量
　　焼土粒・炭化物粒極微量

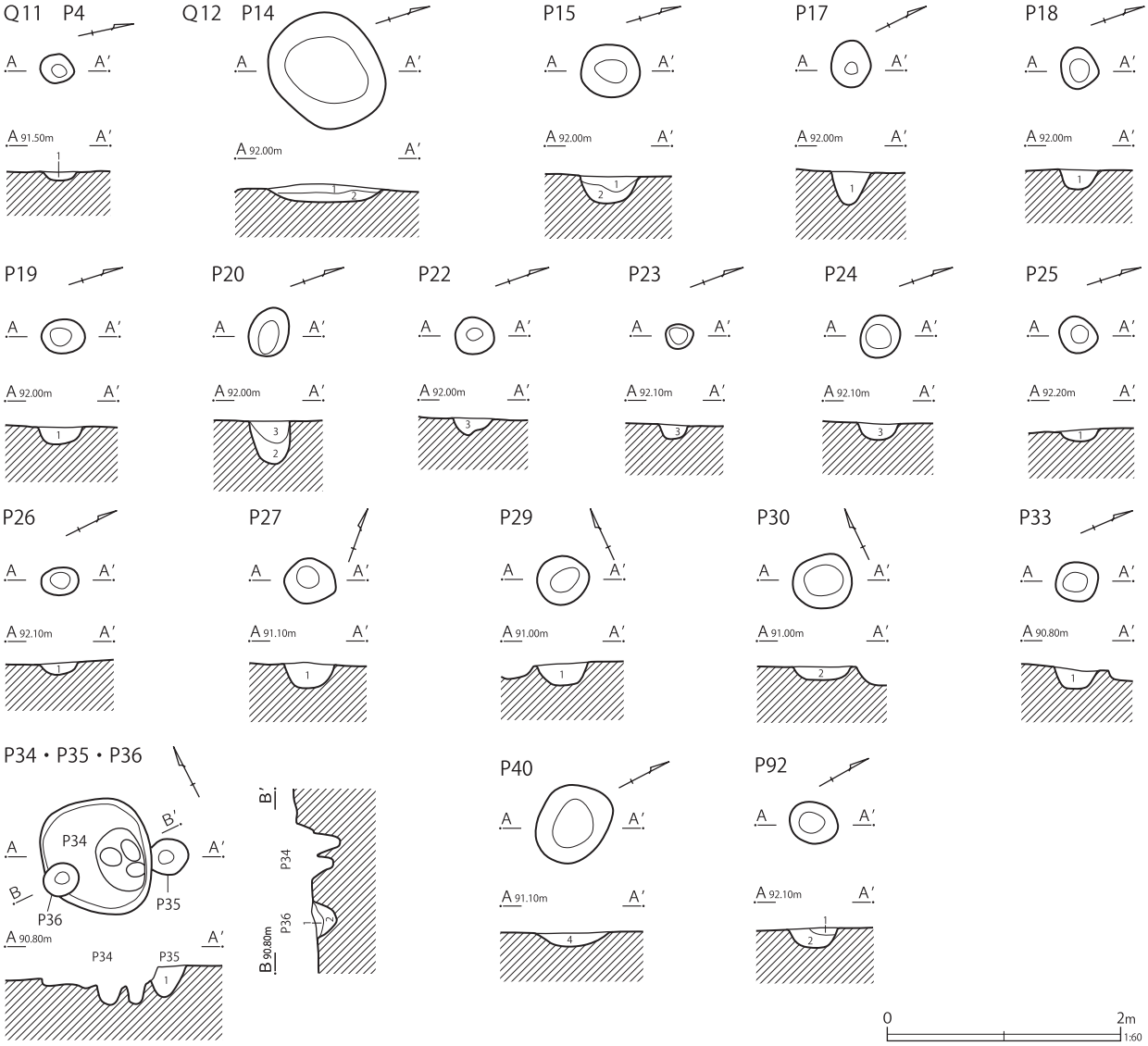
P13　P130
1　暗黄褐色土　礫少量　炭化物粒極微量

P13　P131・P132
1　暗褐色土　礫微量
　　しまり・粘性やや強い

Q11　P5
1　暗褐色土　白色粒微量　炭化物粒極微量
　　粘性あり　しまり強い

Q12　P2・P3
1　暗褐色土　岩盤破片少量　粘性ややあり　しまり弱い

第63図　Ｂ区ピット（２）



Q11　P4
1　暗褐色土　橙色・白色スコソア少量　炭化物粒・黒灰色粒微量
　　粘性あり　しまり強い

Q12　P14・P15
1　暗褐色土　シルト質　黒色ブロック少量　赤色粒極微量
　　粘性あり　しまり強い
2　明褐色土　シルト質　黒色土を斑に含む　礫少量　黒色粒極微量
　　粘性あり　しまりやや強い

Q12　P17
1　暗褐色土　礫と土の混合層　礫微量　粘性・しまりやや弱い

Q12　P18
1　暗褐色土　黒褐色土を斑に含む　砂粒微量　礫極微量

Q12　P19
1　暗褐色土　黒褐色土を斑に含む　砂粒・礫微量
　　焼土粒・炭化物粒極微量

Q12　P20
2　明褐色土　黒色土を含む　礫微量　炭化物粒極微量

Q12　P22・P23・P24
3　暗褐色土　黒色土を含む　砂粒微量　礫極微量
　　粘性・しまりあり

Q12　P25・P26
1　黒褐色土　礫含む　砂粒少量　礫・焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

Q12　P27
1　暗褐色土　礫少量　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

Q12　P29・P30
1　黒褐色土　シルト質　礫少量　橙色粒極微量
　　粘性やや強い　しまり強い

2　明褐色土　シルト質　黒色土を斑に含む　礫・橙色粒極微量
　　粘性あり　しまりやや強い

Q12　P33
1　暗褐色土　シルト質　暗褐色土を斑に含む　砂粒微量
　　粘性あり　しまりやや強い

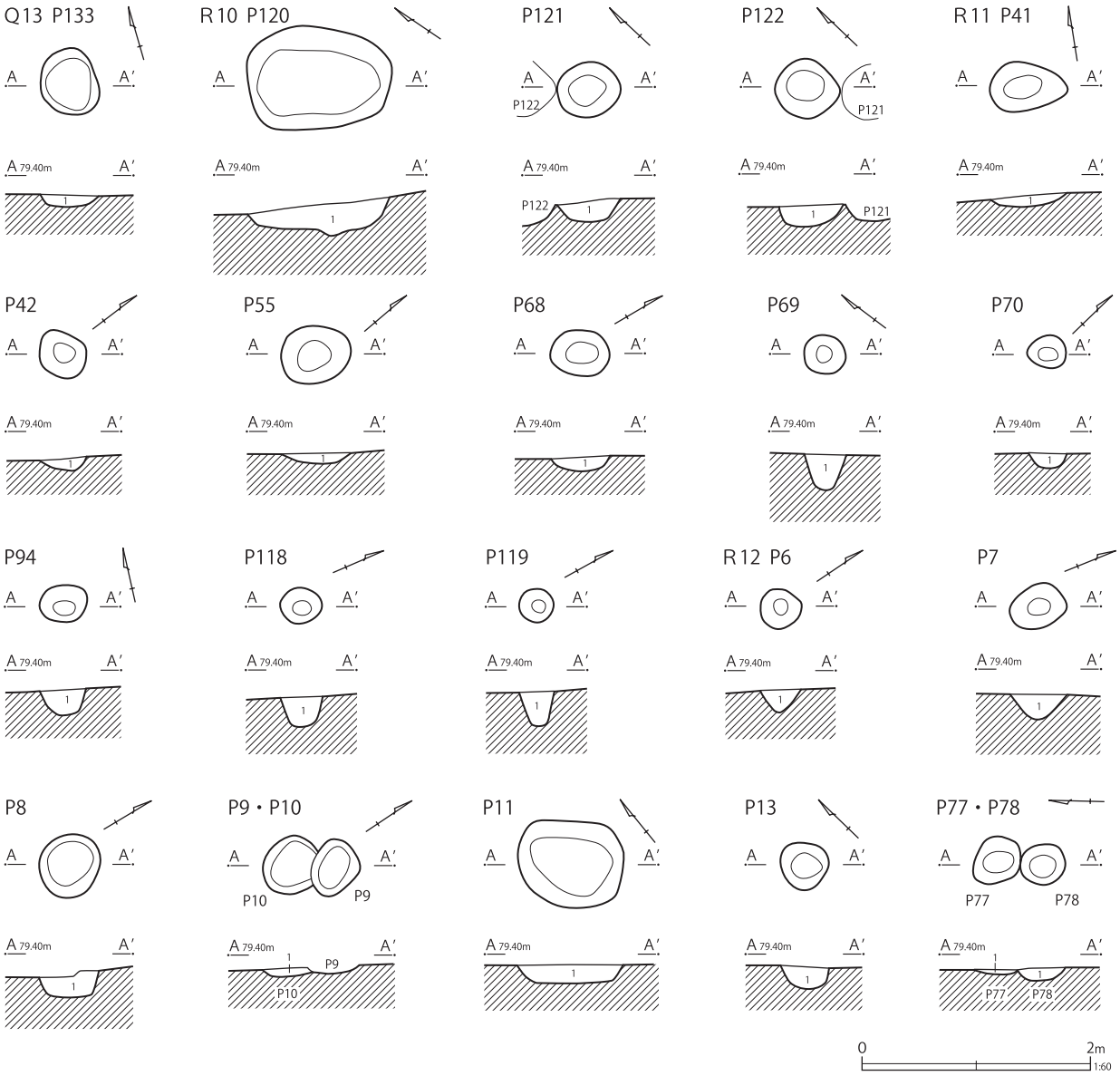
Q12　P35
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む

Q12　P36
1　暗褐色土　黒色土を含む
2　暗褐色土　黒色土を斑に含む

Q12　P40
1　暗褐色土　シルト質　砂粒少量　礫・焼土粒微量
　　粘性・しまりやや強い

R12　P92
1　黒色土　礫少量　粘性・しまりやや強い
2　暗褐色土　黒色土を斑に含む　礫少量　粘性・しまりやや強い

第64図　B区ピット（3）



Q13　P133
1　暗褐色土　礫少量　粘性・しまりあり

R10　P120
1　黒褐色土　礫微量　粘性・しまりやや強い

R10　P121
1　暗褐色土　礫極微量　粘性・しまりやや強い

R10　P122
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む　礫微量　粘性・しまりやや強い

R11　P41
1　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・礫微量

R11　P42
1　黒褐色土　砂粒少量　炭化物粒・赤色粒極微量

R11　P55
1　暗褐色土　砂粒微量

R11　P68
1　暗褐色土　礫微量　炭化物粒極微量　粘性・しまりやや強い

R11　P69
1　暗褐色土　礫微量　炭化物粒極微量

R11　P70
1　暗褐色土　黒色土ブロック含む　砂粒少量　焼土粒極微量

R11　P94
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む　炭化物粒極微量　砂粒微量
粘性・しまりあり

R11　P118・P119
1　暗褐色土　砂粒・焼土粒・礫微量　粘性・しまりやや強い

R12　P6・P7・P8
1　暗褐色土　シルト質　焼土粒含む　砂粒微量
粘性あり　しまりやや強い

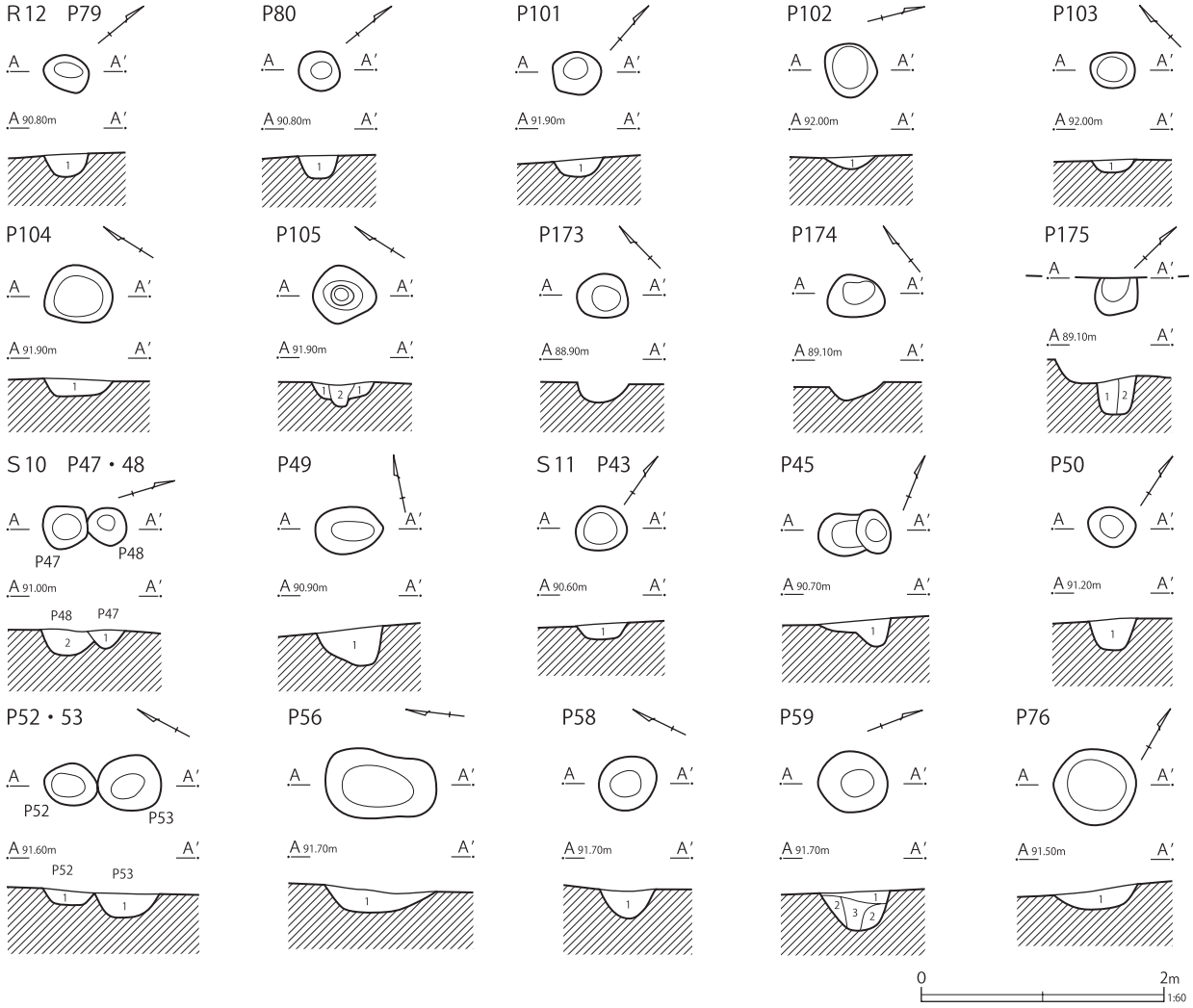
R12　P10
1　黒色土　礫砂粒微量　焼土粒極微量　粘性・しまりやや強い

R12　P11
1　暗褐色土　礫含む　礫（φ1㎜）微量　炭化物粒・焼土粒極微量
しまりやや強い

R12　P13
1　暗褐色土　礫微量　しまり・粘性あり

R12　P77・P78
1　黒褐色土　砂粒少量

第65図　B区ピット（4）



R12 P79
1 暗褐色土 黒褐色土を含む 礫少量

R12 P80
1 黒褐色土 砂粒少量

R12 P101
1 暗褐色土 礫微量 粘性やや強い しまりあり

R12 P102
1 暗褐色土 粘性・しまりやや強い

R12 P103
1 暗褐色土 礫少量 砂粒微量 炭化物粒極微量 粘性・しまりやや強い

R12 P104
1 暗褐色土 黒色土を斑に含む 砂粒・焼土粒微量 礫極微量
粘性・しまりやや強い

R12 P105
1 暗褐色土 黒色土を斑に含む 砂粒・焼土粒微量 礫極微量
粘性・しまりやや強い
2 暗褐色土 砂粒微量 炭化物粒極微量
粘性・しまりやや強い

R12 P175
1 黒色土
2 暗褐色土

S10 P47・P48
1 暗褐色土 黒色土を斑に含む 礫含む 粘性あり しまりやや強い
2 暗褐色土 明赤褐色土を含む

S10 P49
1 暗褐色土 黒色土を斑に含む 礫含む 粘性・しまりやや強い

S11 P43
1 暗褐色土 黒色土を斑に含に含む 礫微量 赤色粒・焼土粒極微量
粘性あり しまりやや強い

S11 P45
1 黒褐色土 砂粒少量 炭化物粒・赤色粒極微量

S11 P50
1 暗褐色土 黒色土を含む 礫少量

S11 P52
1 暗褐色土 砂粒少量 焼土粒極微量
粘性・しまりやや強い
2 暗褐色土 礫含む 砂粒少量 焼土粒極微量
粘性・しまりやや強い

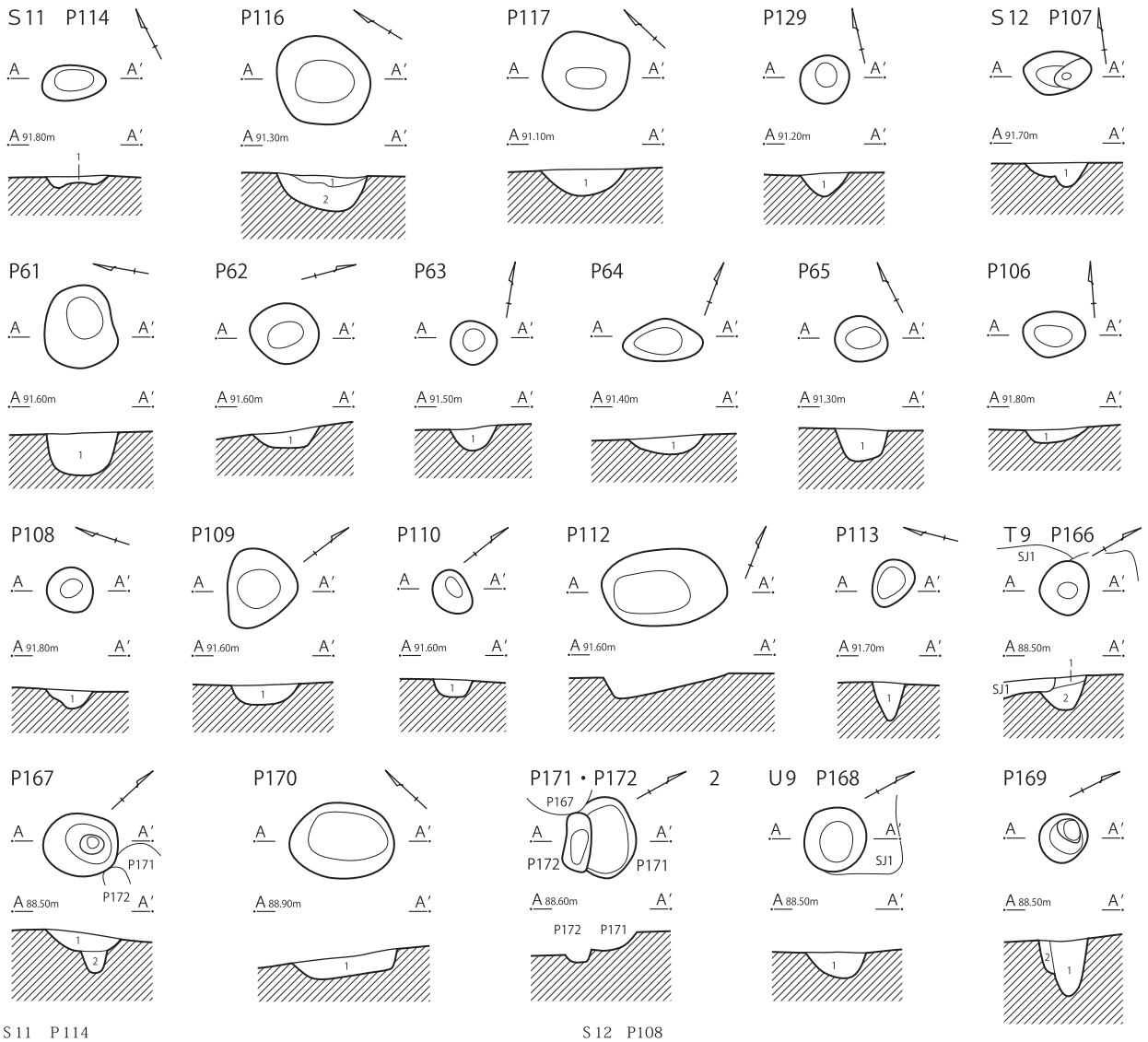
S11 P56
1 暗褐色土 黒土が雲状に入る 礫微量 炭・焼土極微量
粘性・しまりやや強い

S11 P58
1 暗～黒褐色土 焼土粒・炭化物粒極微量 礫微量
粘性・しまりやや強い

S11 P59
1 暗褐色土 砂粒微量
2 暗褐色土 砂粒極微量
3 暗褐色土 礫少量

S11 P76
1 暗褐色土 黒色土を斑に含む 礫微量 赤色粒・焼土粒極微量
粘性あり しまりやや強い

第66図 B区ピット（5）



S11　P114
1　黒褐色土　砂粒微量　粘性・しまりやや強い

S11　P116
1　黄褐色土　黒色土を斑に含む　焼土粒・炭化物粒極微量
2　黄褐色土　焼土粒・炭化物粒極微量

S11　P117
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む　砂粒少量　礫極微量
　　粘性・しまりやや強い

S11　P129
1　暗褐色土　粘性・しまりあり

S12　P107
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む

S12　P61
1　暗褐色土　砂粒微量　粘性・しまりやや強い

S12　P62
1　暗褐色土　砂粒少量　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりやや強い

S12　P63
1　黒褐色土　黒色土を斑に含む　礫極微量　粘性・しまりやや強い

S12　P64・P65
1　褐色土　黒色土を斑に含む　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

S12　P106
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む　焼土粒・炭化物粒微量
　　粘性・しまりあり

S12　P108
1　暗褐色土　黒色土を斑に含む　やや暗褐色土多量

S12　P109
1　黒～暗褐色土　漸移層土主体　黒土が入り礫が少ない　粘性・しまりあり

S12　P110
1　暗褐色土　礫少量　粘性・しまりやや強い

S12　P113
1　褐色土　焼土粒・炭化物粒極微量　砂粒微量
　　粘性・しまりあり

T9　P166
1　暗黄褐色土　焼土・炭化物少量
2　暗褐色土　黄褐色土多量　焼土やや多量

T9　P167
1　暗黄褐色土　炭化物粒少量
2　黄褐色土　暗褐色土ブロックやや多量

T9　P170
1　暗黄褐色土　炭化物粒少量含む

U9　P168
1　暗褐色土　ローム質土やや多量

U9　P169
1　黒褐色土　柱痕と思われる　しまり良い
2　黄褐色土　黒色土含む

0　2m
1:60

第67図　B区ピット（6）

第14表　Ａ区ピット一覧表（第57 ～ 61図）

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P1001	Ｃ－２	0.42	0.34	0.10
P1030	Ｃ－３	0.76	0.65	0.13
P1002	Ｃ－４	0.48	0.32	0.46
P1003	Ｃ－４	0.46	0.42	0.10
P1006	Ｃ－４	0.50	(0.36)	0.10
P1007	Ｃ－４	(0.52)	0.42	0.14
P1008	Ｃ－４	0.64	0.51	0.20
P1009	Ｃ－４	0.48	0.48	0.20
P1010	Ｃ－４	0.54	0.40	0.14
P1011	Ｃ－４	0.48	0.46	0.16
P1012	Ｃ－４	0.66	0.42	0.36
P1013	Ｃ－４	0.44	0.44	0.12
P1014	Ｃ－４	0.46	0.32	0.16
P1015	Ｃ－４	0.54	0.54	0.30
P1017	Ｃ－４	0.78	0.56	0.16
P1018	Ｃ－４	0.66	0.58	0.14
P1019	Ｃ・Ｄ－４	(0.50)	0.40	0.16
P1020	Ｃ－４	0.56	0.40	0.16
P1021	Ｃ－５	0.34	0.30	0.08
P1022	Ｃ－５	0.70	0.64	0.16
P1023	Ｄ－５	0.70	0.46	0.14
P1025	Ｄ－５	0.52	0.40	0.06
P1026	Ｄ－２・３	0.54	0.28	0.10
P1027	Ｄ－２・４	0.54	0.30	0.12
P1028	Ｄ－３	0.26	0.22	0.04
P1029	Ｄ－３	0.30	0.24	0.08
P1031	Ｄ－３	0.64	0.60	0.24
P1032	Ｄ－３	0.46	0.40	0.24
P1033	Ｄ－３	1.42	0.58	0.30
P1035	Ｄ－３	0.68	0.60	0.30
P1036	Ｄ・Ｅ－３	0.54	0.44	0.26
P1037	Ｄ－４	0.56	0.50	0.18
P1038	Ｄ－４	0.56	0.40	0.18
P1039	Ｄ－４	0.60	0.58	0.18
P1040	Ｃ・Ｄ－４	0.34	0.22	0.08
P1041	Ｄ－４	0.34	0.30	0.16
P1042	Ｄ－４	0.84	0.70	0.14
P1043	Ｄ－４	0.34	0.26	0.14
P1044	Ｄ－４	0.78	0.52	0.18
P1045	Ｄ－４	0.54	0.54	0.22
P1046	Ｄ－４	0.56	0.56	0.46
P1047	Ｄ－４	0.78	0.74	0.24
P1048	Ｄ－４	0.78	0.68	0.36
P1049	Ｄ－４	0.80	0.66	0.22
P1050	Ｄ－４	0.68	0.52	0.12
P1051	Ｄ－４	0.68	0.58	0.08
P1052	Ｄ－４	0.88	0.74	0.36
P1053	Ｄ－４	0.44	0.40	0.12
P1055	Ｃ・Ｄ－４	0.40	0.40	0.24
P1056	Ｄ－４	0.90	0.76	0.30
P1057	Ｄ－４	0.60	(0.40)	0.28
P1058	Ｄ・Ｅ－４	1.00	0.58	0.16
P1059	Ｄ・Ｅ－４	0.54	0.46	0.16
P1060	Ｄ・Ｅ－４	0.70	0.70	0.14
P1061	Ｄ－５	0.42	0.40	0.28
P1062	Ｄ－５	0.62	0.52	0.30
P1063	Ｄ－５	0.32	0.30	0.12
P1064	Ｄ－５	0.50	0.34	0.18
P1065	Ｄ－５	0.50	0.50	0.16
P1066	Ｄ－５	0.48	0.42	0.12
P1067	Ｄ－５	0.50	0.42	0.16
P1068	Ｄ－５	0.46	0.48	0.28
P1069	Ｄ－５	0.64	0.60	0.30
P1070	Ｄ－５	0.62	0.54	0.20
P1071	Ｄ－５	0.40	0.32	0.16
P1072	Ｄ－５	0.44	0.44	0.28
P1073	Ｄ－５	0.58	0.52	0.24
P1076	Ｅ－４	0.70	0.62	0.50
P1077	Ｅ－４	0.42	0.34	0.18
P1078	Ｅ－４	0.86	0.56	0.24
P1079	Ｅ－４	0.60	(0.40)	0.20
P1083	Ｅ－４	1.04	0.84	0.24
P1084	Ｅ－４	0.74	0.64	0.20
P1085	Ｅ－４	0.52	0.52	0.20
P1086	Ｅ－４	0.38	0.32	0.22
P1087	Ｅ－４	0.70	0.64	0.38
P1088	Ｅ－４	0.44	0.34	0.30
P1089	Ｅ－４	0.52	0.42	0.12
P1090	Ｅ－４	0.56	0.48	0.28
P1091	Ｅ－４	0.52	0.46	0.30
P1092	Ｅ－４	0.66	0.58	0.30
P1093	Ｅ－５	0.40	0.36	0.18
P1094	Ｅ－５	0.66	0.42	0.12
P1095	Ｄ－５	0.38	0.38	0.14
P1096	Ｄ－５	1.28	0.80	0.18
P1098	Ｄ－５	0.74	0.56	0.18
P1099	Ｅ－５	0.34	0.30	0.26
P1100	Ｄ・Ｅ－２	0.60	0.60	0.28
P1101	Ｅ－５	0.52	0.50	0.08
P1102	Ｄ－５	0.72	0.60	0.22
P1103	Ｄ－４	0.60	0.48	0.10
P1104	Ｄ－５	0.86	0.66	0.40
P1105	Ｄ－４	0.68	0.56	0.20
P1106	Ｄ・Ｅ－４	0.56	0.42	0.14

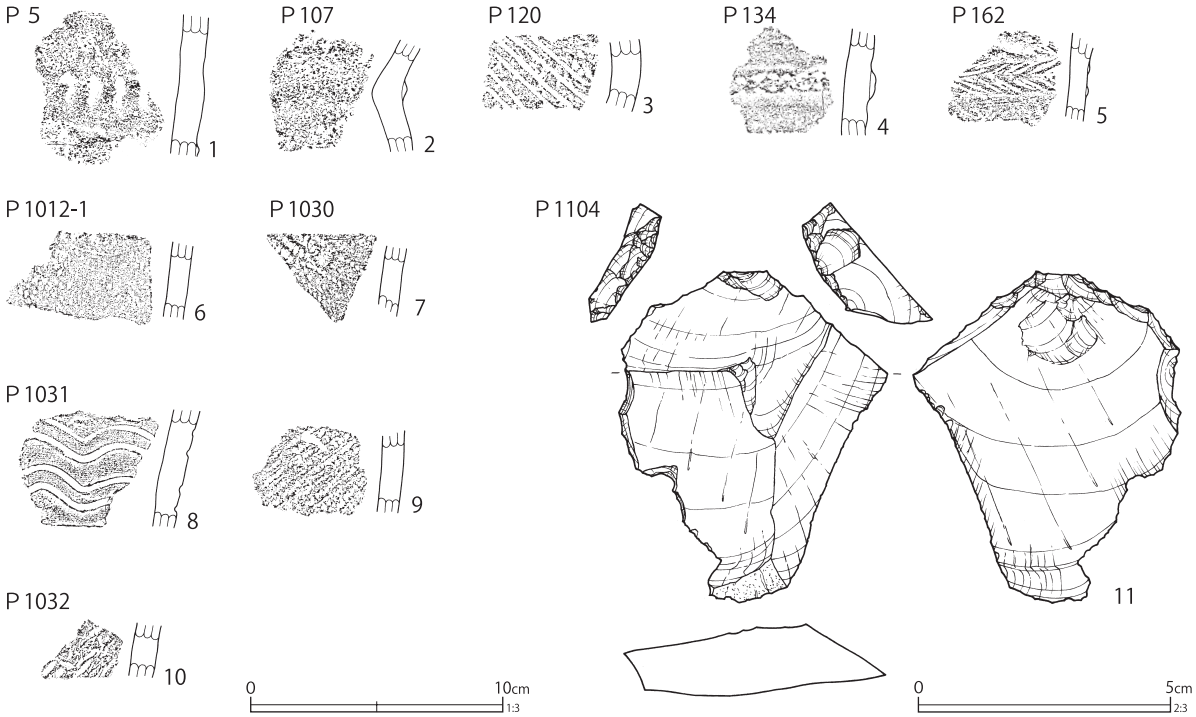
第15表　Ｂ区ピット一覧表（第62 ～ 67図）

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
Ｐ２	Ｑ－11	0.66	0.40	0.12
Ｐ３	Ｑ－11	0.50	0.42	0.14
Ｐ４	Ｑ－11	0.28	0.24	0.08
Ｐ５	Ｑ－11	0.58	0.48	0.16
Ｐ６	Ｒ－12	0.36	0.34	0.20
Ｐ７	Ｒ－12	0.46	0.36	0.10
Ｐ８	Ｒ－12	0.56	0.52	0.22
Ｐ９	Ｒ－12	0.50	0.40	0.06
P10	Ｒ－12	0.52	0.48	0.08
P11	Ｒ－12	0.92	0.76	0.18
P13	Ｒ－12	0.42	0.40	0.20
P14	Ｑ－12	1.02	0.88	0.14
P15	Ｑ－12	0.50	0.44	0.24
P17	Ｑ－12	0.40	0.32	0.28
P18	Ｑ－12	0.34	0.30	0.16
P19	Ｑ－12	0.36	0.28	0.14
P20	Ｑ－12	0.42	0.32	0.18
P22	Ｑ－12	0.32	0.32	0.14
P23	Ｑ－12	0.24	0.22	0.12
P24	Ｑ－12	0.38	0.32	0.14
P25	Ｑ－12	0.34	0.30	0.10
P26	Ｑ－12	0.32	0.24	0.10
P27	Ｑ－12	0.44	0.38	0.22
P29	Ｑ－12	0.42	0.42	0.18
P30	Ｑ－12	0.50	0.44	0.10
P33	Ｑ－12	0.38	0.34	0.16
P34	Ｑ－12	1.08	0.94	0.30
P35	Ｑ－12	(0.36)	0.30	0.26
P36	Ｑ－12	0.30	0.26	0.18
P38	Ｑ－12	0.40	0.32	0.18
P39	Ｐ－13	0.62	0.52	0.20
P40	Ｑ－12	0.70	0.58	0.12
P41	Ｒ－11	0.66	0.44	0.10
P42	Ｒ－11	0.42	0.38	0.10
P43	Ｒ－11	0.42	0.36	0.14
P45	Ｒ－11	0.60	0.32	0.22
P47	Ｓ－10	0.32	0.30	0.16
P48	Ｓ－10	0.40	0.36	0.20
P49	Ｓ－10	0.56	0.38	0.30
P50	Ｓ－11	0.40	0.32	0.26
P52	Ｓ－11	0.44	0.34	0.10
P53	Ｓ－11	0.52	0.46	0.20
P55	Ｒ－11	0.60	0.48	0.08
P56	Ｓ－11	0.92	0.52	0.18
P58	Ｓ－11	0.48	0.52	0.22
P59	Ｓ－11	0.58	0.50	0.32
P61	Ｓ－12	0.72	0.56	0.36
P62	Ｓ－12	0.60	0.54	0.14

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P63	S－12	0.40	0.38	0.18
P64	S－12	0.70	0.36	0.16
P65	S－12	0.46	0.38	0.28
P68	R－11	0.52	0.40	0.12
P69	R－11	0.36	0.34	0.30
P70	R－11	0.34	0.28	0.12
P76	S－11	0.74	0.62	0.16
P77	R－12	0.46	0.38	0.04
P78	R－12	0.38	0.36	0.12
P79	R－12	0.38	0.30	0.18
P80	R－12	0.34	0.32	0.18
P81	P－12	0.68	0.56	0.22
P82	P－12	0.76	0.58	0.28
P83	P－12	0.32	0.28	0.22
P86	P－13	0.55	0.55	0.16
P87	P－13	0.60	0.50	0.14
P88	P－12	0.38	0.32	0.10
P89	P－12	0.46	0.44	0.14
P90	P－12	0.40	0.38	0.14
P91	P－12	0.44	0.40	0.14
P92	Q－12	0.42	0.34	0.16
P94	R－11	0.38	0.38	0.22
P96	P－12	0.30	0.26	0.32
P97	P－12	0.18	0.16	0.16
P98	P－12	(0.58)	0.52	0.12
P99	P－12	0.54	0.54	0.22
P101	R－12	0.40	0.30	0.14
P102	R－12	0.44	0.40	0.10

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P103	R－12	0.36	0.30	0.10
P104	R－12	0.36	0.26	0.14
P105	R－12	0.52	0.46	0.18
P106	S－12	0.54	0.40	0.12
P107	S－12	0.58	0.38	0.20
P108	S－12	0.40	0.38	0.16
P109	S－12	0.70	0.58	0.20
P110	S－12	0.40	0.30	0.14
P112	S－12	1.00	0.66	0.19
P113	S－12	0.44	0.32	0.32
P114	S－11	0.54	0.30	0.08
P116	S－11	0.84	0.74	0.30
P117	S－11	0.72	0.64	0.22
P118	R－11	0.36	0.32	0.26
P119	R－11	0.30	0.30	0.30
P120	R－10	1.26	0.90	0.28
P121	R－10	0.54	0.48	0.18
P122	R－10	0.56	0.52	0.18
P125	O－12	0.50	0.46	0.32
P126	O－12	0.52	0.38	0.06
P127	O－12	0.34	0.30	0.48
P129	S－11	0.42	0.40	0.20
P130	P－13	0.54	0.50	0.12
P131	P－13	0.80	0.66	0.14
P132	P－13	0.54	0.52	0.12
P133	Q－13	0.58	0.48	0.10
P134	P－11	1.18	1.06	0.22
P136	P－12	0.74	0.60	0.10

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P137	P－12	0.76	0.64	0.22
P138	P－12	0.34	0.28	0.24
P140	P－12	0.40	0.34	0.14
P141	P－12	0.40	0.34	0.14
P142	P－12	0.42	0.36	0.14
P143	P－12	0.38	0.36	0.08
P145	P－12	0.56	0.56	0.24
P147	P－12	0.32	0.26	0.12
P148	P－12	0.60	0.44	0.18
P150	P－12	0.36	0.34	0.10
P160	P－11	0.52	0.48	0.26
P161	P－11	0.46	0.34	0.36
P162	P－11	1.14	0.64	0.16
P163	P－11	0.60	0.56	0.14
P164	P－11	1.04	0.62	0.18
P165	O－11	0.50	0.46	0.09
P166	T－9	0.46	0.42	0.26
P167	T－9	0.64	0.52	0.34
P168	U－9	0.54	0.58	0.22
P169	U－9	0.42	0.40	0.48
P170	T・U－9	0.90	0.74	0.16
P171	T－9	0.70	(0.38)	0.14
P172	T－9	0.50	0.22	0.44
P173	S－9	0.42	0.36	0.16
P174	S－9	0.46	0.34	0.14
P175	S－9	0.34	(0.32)	0.30



第68図　ピット出土遺物

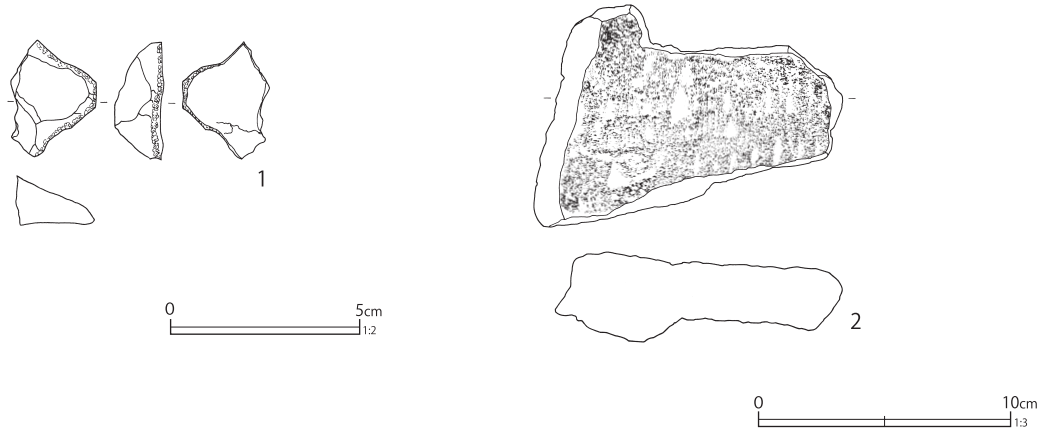
の刻みを施している。６はＰ1012出土の縄文施文の胴部破片で、細かなＲＬ縄文を施文することから諸磯ｂ式の古い段階に位置付けられよう。７はＰ1031出土の縄文施文土器で、ＲＬの細い縄文上にＲＬの太い縄文を施文しているものと思われる。８、９はＰ1031出土の諸磯ｂ式土器で、８は無地文上に半截竹管の平行波状文を施文している。文様帯下端部を沈線で区画しており諸磯ｂ１式に比定されようか。９は単節ＬＲを施文する胴部破片である。10はＰ1032出土の撚り戻し状の無節Ｌ縄文を施文する胴部破片で諸磯ｂ式に比定されよう。

第16表　Ａ区ピット出土石器観察表（第68図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
11	Ａ区Ｐ1104	剥片	黒曜石	6.6	5.4	1.7	34.1	№1

（４）グリッド出土遺物

中・近世のグリッド出土遺物は、陶磁器片などがわずかに確認されたのみで、いずれも小破片であった。そのため、ここでは、２点のみ図示した。第69図１は、石英製の火打石である。２は、用途不明の石材である。第12号焼土跡の上層より出土しているが、流れ込みの可能性が高い。表面には工具痕が複数認められ被熱により赤色化している。



第69図　グリッド出土遺物

第17表　グリッド出土遺物観察表（第69図）

番　号	出土位置	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
1	Ｖ－９	火打石	石英	3.1	2.3	1.3	7.4	№508
2	Ｆ－20	不明	砂岩	[8.8]	[12.3]	[4.2]	343.1	№1　赤色化　工具痕のある石材

Ⅴ　自然科学分析

１　出土炭化材の樹種同定（１）

１　はじめに

埼玉県嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２　試料と方法

試料は、時期不明の第６号焼土跡から出土した炭化材１点、平安時代の第１号炭焼窯跡から出土した炭化材１点、９世紀中頃～後半の第１号住居跡から出土した炭化材４点の、計６点である。なお、放射性炭素年代測の結果、第６号焼土跡の試料No.１は平安時代前期～中期、第１号炭焼窯跡の試料No.２は平安時代中期～鎌倉時代の暦年代を示した。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を数えた。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

３　結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）とブナ科、カエデ属、ミズキ属の、計４分類群がみられた。クヌギ節とカエデ属が各２点、ブナ科とミズキ属が各１点であった。同定結果を第18表に、一覧を第19表に示す。以下に同定された材の特徴を記載し、第72･73図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

第18表　樹種同定一覧

樹種	時期	平安時代前期～中期	9世紀中頃～後半	平安時代中期～鎌倉時代	
	種類	FP6	SJ1	SF1	合計
コナラ属クヌギ節			1	1	2
ブナ科		1			1
カエデ属			2		2
ミズキ属			1		1
合計		1	4	1	6

（１）コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

第70図　１a-１c(No.２)、２a-２c(No.６)

年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

（２）ブナ科　Quercus

第70図　３a-３c(No.１)

年輪のはじめに道管が並ぶ環孔材であるが、節部のため横断面の形状が不明瞭であった。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。以上の特徴により、ブナ科までの同定に留めた。

（３）カエデ属　Acer　ムクロジ科

第71図　４a-４c(No.４)、５a-５c(No.５)

小型の道管が単独ないし２～３個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。

道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅１～６列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

（４）ミズキ属　Swida　ミズキ科

第71図　６a-６c(No.３)

小型の道管がほぼ単独で散在する散孔材である。晩材部では、道管の径が減じる傾向がみられる。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端１～３列が直立ないし方形となる異性で、幅４～８列となる。

ミズキ属にはミズキやクマノミズキなどがあり、丘陵地や平地に分布する落葉中高木の広葉樹である。代表的なミズキの材は、やや硬いが、切削加工は容易である。

４　まとめ

第６号焼土跡の炭化材は、ブナ科であった。試料は燃料材として利用されていたと考えられる。ブナ科の木材は、全般的に火力は高くないが、長時間燃焼するという材質をもつ（伊東ほか，2011）。

９世紀中頃～後半の住居跡である第１号住居跡の炭化材は、クヌギ節とカエデ属、ミズキ属であった。試料はいずれも焼けた建築材と考えられる。クヌギ節とカエデ属、ミズキ属は、いずれも堅硬な部類の樹種であり（伊東ほか，2011）、堅硬な樹種を建築材として利用していたと考えられる。埼玉県内で確認されている平安時代の竪穴住居跡の建築材では、クリやクヌギ節、コナラ節を中心とした堅硬な広葉樹が多くみられる（伊東ほか，2012）。

第１号炭焼窯跡の平安時代中期～鎌倉時代の炭化材は、クヌギ節であった。試料は燃料材もしくは焼成した炭製品と考えられる。復元直径は2.0cmであった。クヌギ節は、燃料材としてみると火力は高くないが、長時間燃焼するという材質をもち、現在でも薪炭材として多く利用されている（伊東ほか，2011）。埼玉県内で確認されている平安時代頃の炭窯跡の炭化材では、クヌギ節およびコナラ節が多く確認されており（伊東･山田編，2012）、傾向は一致する

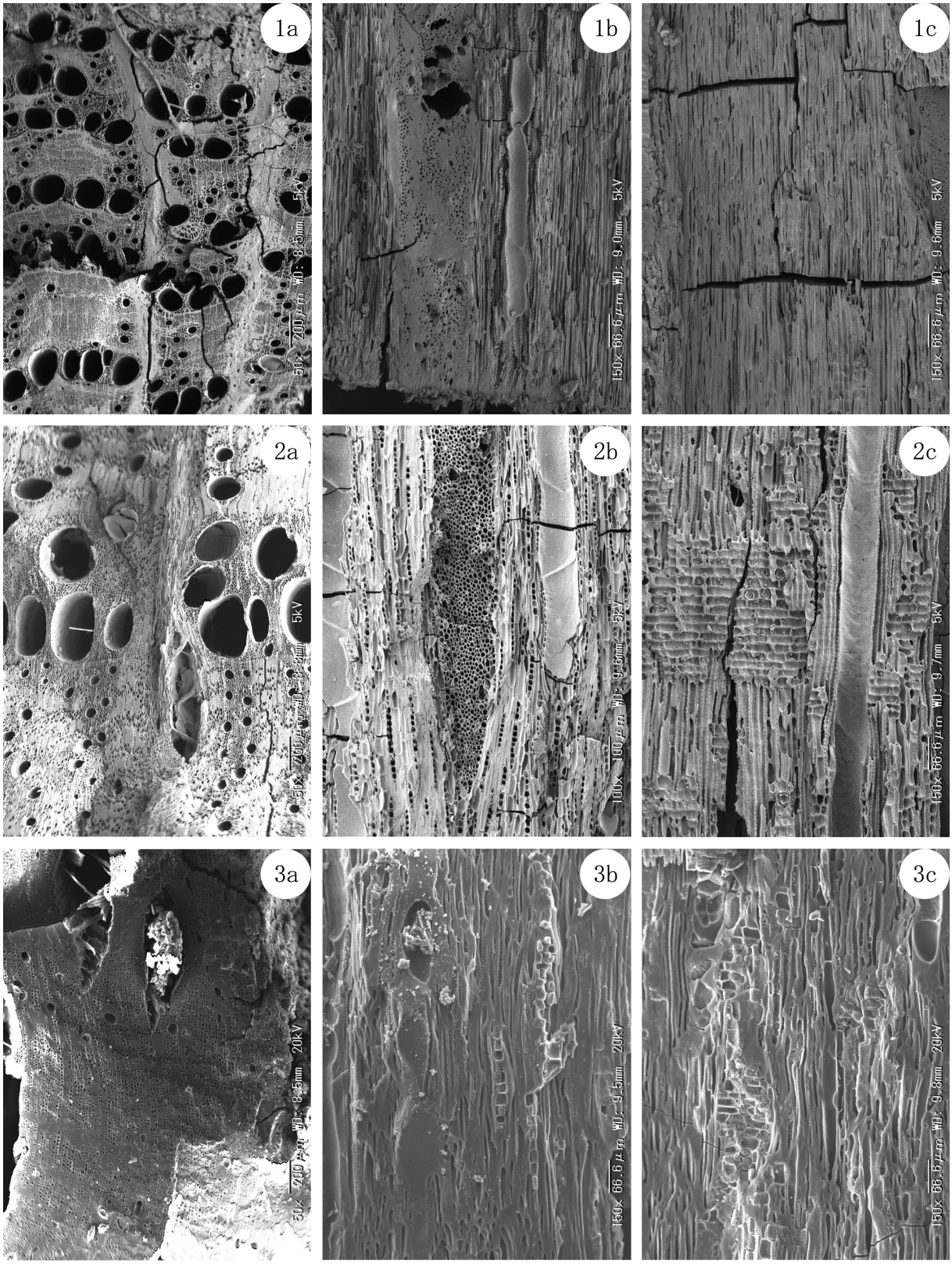
引用文献

伊東隆夫･佐野雄三･安部　久･内海泰弘･山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫･山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

第19表　炭化材の樹種同定結果一覧

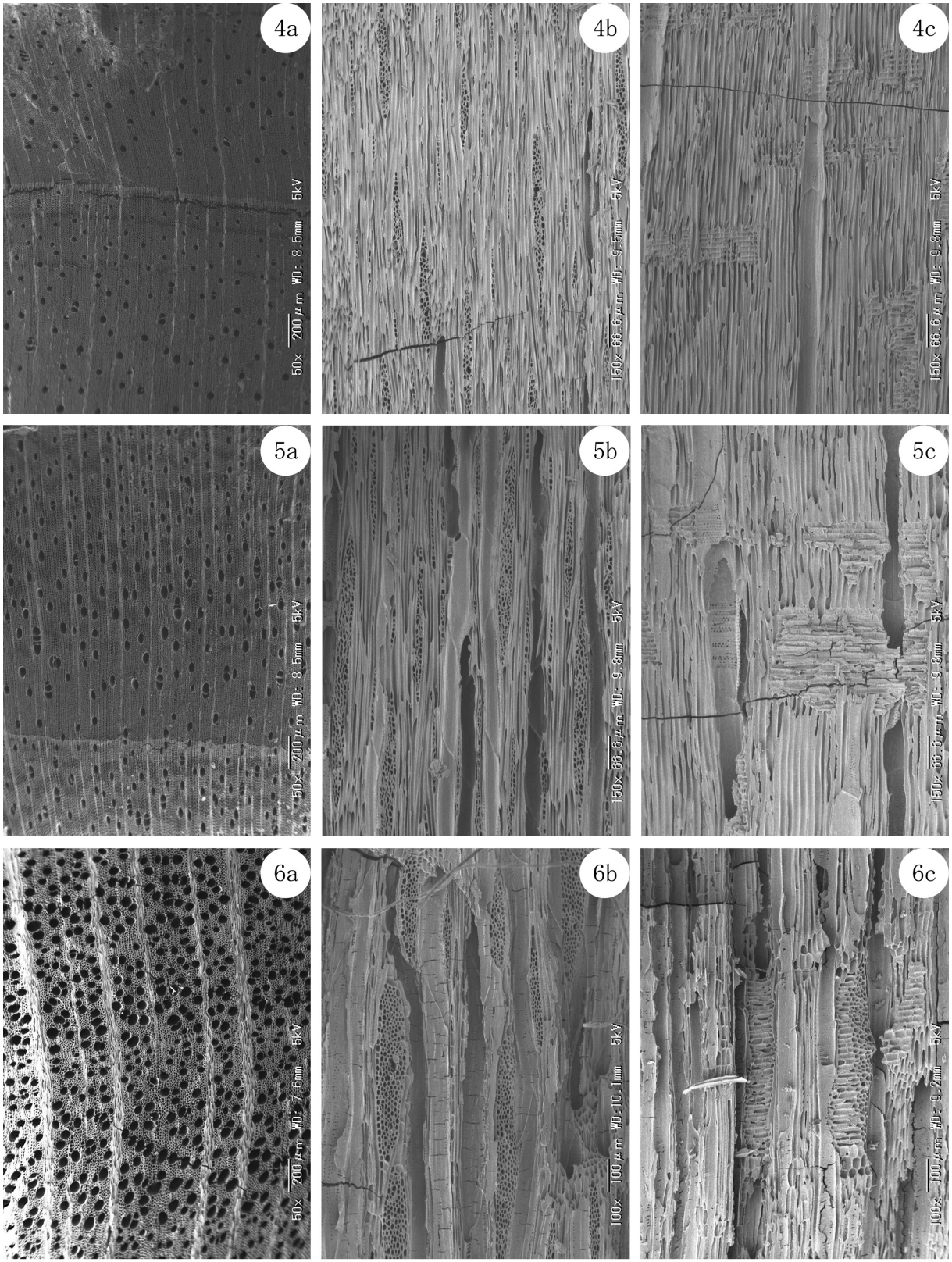
試料No.	調査区	遺構名	遺物No.	器種	樹種	残存半径（cm）	残存年輪数	復元直径（cm）	遺構の推定時期	年代測定による時期	年代測定番号
1	B区	FP6		炭化材	ブナ科	-	-	-	時期不明	平安時代前期～中期	ＰＬＤ－38858
2		SF1	4	炭化材	コナラ属クヌギ節	1.0	15	2.0	平安時代	平安時代中期～鎌倉時代	ＰＬＤ－38859
3		SJ1	3	炭化材	ミズキ属	2.0	9	4.0	9世紀中頃～後半	－	
4		SJ1	4	炭化材	カエデ属	3.0	15	6.0	9世紀中頃～後半	－	
5		SJ1	5	炭化材	カエデ属	4.5	19	9.0	9世紀中頃～後半	－	
6		SJ1	6	炭化材	コナラ属クヌギ節	4.0	9	10.0	9世紀中頃～後半	－	



1a-1c. コナラ属クヌギ節(No. 2)、2a-2c. コナラ属クヌギ節(No. 6)、3a-3c. ブナ科(No. 1)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第70図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（１）



4a-4c.カエデ属(No.4)、5a-5c.カエデ属(No.5)、6a-6c.ミズキ属(No.3)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第71図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（２）

２　出土炭化材の樹種同定（２）

１　はじめに

比企郡嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２　試料と方法

試料は、第２号炭焼窯跡から出土した炭化材４点である。調査所見による推定時期は平安時代である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面･接線断面･放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３　結果

樹種同定の結果、４点ともコナラ属アカガシ亜属であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を第72図に示す。

（１）コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　第72図　１a-１c（分析No.1）、2a-2c（分析No.2）、3a-3c（分析No.３）、４a-４c（分析No.４）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど８種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靭で、水湿に強い。

４　考察

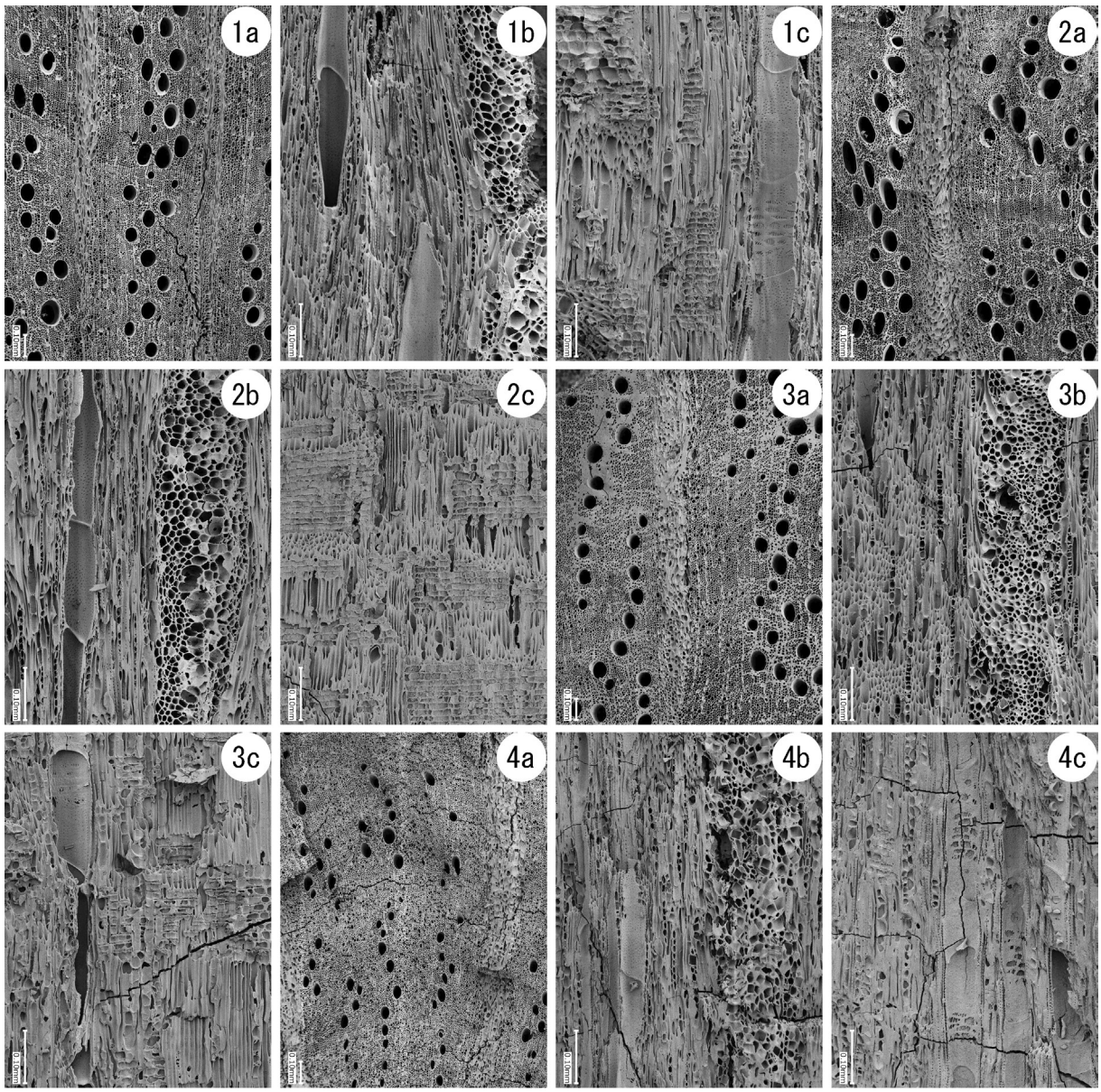
第２号炭焼窯跡から出土した炭化材４点は、いずれもアカガシ亜属であった。なお、同じ第２号炭焼窯跡出土の炭化材で、今回は分析対象外となった試料も、実体顕微鏡で観察したところ、アカガシ亜属のみが確認された。アカガシ亜属の材は非常に重硬で、燃料材にすると火持ちが良い（伊東ほか，2011）。関東地方では、薪炭材にはクヌギ節が多用される傾向があるが、埼玉県内の遺跡では、鳩山窯跡群の古墳時代末期～平安時代前期の窯跡出土炭化材で、クヌギ節やクリとともにアカガシ亜属が確認されている（伊東･山田編，2012）。

引用文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫･山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベースー．449p，海青社．

伊東隆夫･佐野雄三･安部　久･内海泰弘･山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．



1a-1c．コナラ属アカガシ亜属（No.1）、2a-2c．コナラ属アカガシ亜属（No.2）、3a-3c．コナラ属アカガシ亜属（No.3）、4a-4c．コナラ属アカガシ亜属（No.4）

a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

第72図　炭化材の走査型電子顕微鏡写真

３　放射性炭素年代測定（１）

１　はじめに

埼玉県比企郡嵐山町に所在する油面遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている。

２　試料と方法

測定試料は、遺構の性格や時期が不明な第６号焼土跡から採取された炭化材１点（PLD-38858）と、平安時代の遺構と推測されている第１号炭焼窯跡から採取された炭化材１点（PLD-38859）の計２点である。測定試料の情報、調製データを第20表に示す。なお、樹種同定の結果、PLD-38858はブナ科、PLD-38859はコナラ属クヌギ節とされている（樹種同定の項参照）。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ･ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、第73図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCa１の確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第20表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD - 38858	遺構：FP6	種類：炭化材（ブナ科） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）
PLD-38859	遺構：SF1 遺物No.4	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）

第21表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-38858	-22.75±0.18	1077±22	1075±20	903- 919 cal AD (16. 3%) 965- 998 cal AD (46. 8%) 1005-1012 cal AD (5. 1%)	897- 925 cal AD (22. 3%) 943-1018 cal AD (73. 1%)
PLD-38859	-26.39±0.23	889±23	890±25	1052-1081 cal AD (24. 9%) 1152-1192 cal AD (38. 4%) 1198-1205 cal AD (4. 9%)	1045-1095 cal AD (32. 7%) 1119-1215 cal AD (62. 7%)

４　まとめ

各測定試料の暦年較正結果のうち、２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目すると、第６号焼土跡から採取された炭化材（PLD-38858）は、897-925 cal ＡＤ（22.3%)および943-1018 cal ＡＤ（73.1%)の年代値が得られた。この年代値は、平安時代前期～中期に相当する。

一方、第１号炭焼窯跡から採取された炭化材（PLD-38859）で、1045-1095 cal ＡＤ(32.7%)および1119-1215 cal ＡＤ（62.7%)の年代値が得られた。この年代値は、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。発掘調査所見では、第１号炭焼窯跡は平安時代の遺構と推測されており、炭化材（PLD-38859）の年代値は調査所見に対して整合的である。

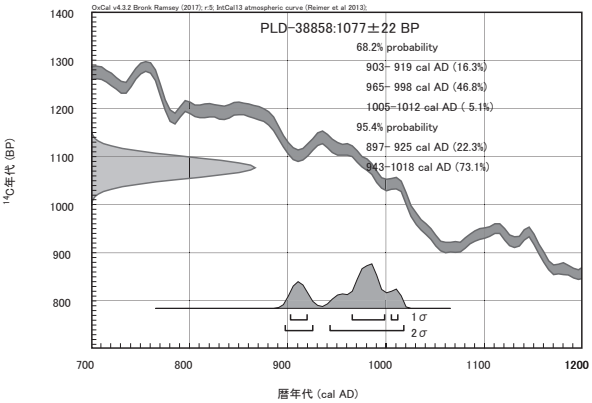
なお、木材の年代測定を行う場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の焼土跡FP6出土の炭化材（PLD-38858）は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であった可能性がある。一方の第１号炭焼窯跡の炭化材（PLD-38859）は、最終形成年輪が残存していたため、測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示していると考えられる。

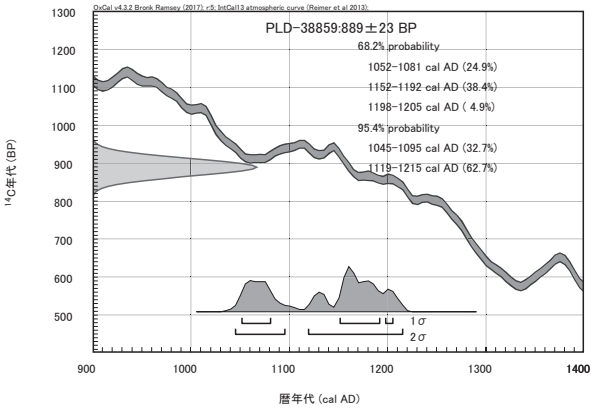
参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.





第73図　暦年較正結果

4　放射性炭素年代測定（２）

１　はじめに

比企郡嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

試料は、第２号炭焼窯跡から出土した炭化材４点である。調査所見による推定時期は平安時代である。試料は、いずれも最終形成年輪が残存していた。

測定試料の情報、調製データは第22表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ･ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第23表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、暦年較正結果を、第74図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分

第22表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD - 42486	遺構：SF2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）
PLD-42487	遺構：SF2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）
PLD-42488	遺構：SF2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）
PLD-42489	遺構：SF2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪　状態：dry	超音波洗浄処理　有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/ℓ，水酸化ナトリウム：1.0mol/ℓ）

布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　考察

以下各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。

PLD-42486は、1037-1162 cal AD（95.45%）の暦年代であった。PLD-42488は、1036-1168 cal AD（94.91%）および1171-1174 cal AD（0.54%）の暦年代であった。PLD-42489は、1037-1168 cal AD（94.85%）および1171-1174 cal AD（0.60%）の暦年代であった。この３点は、11世紀前半～12世紀後半で、平安時代中期～後期の

第23表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-42486	-26.06±0.26	933±21	935±20	1046-1054 cal AD (7.43%) 1057-1084 cal AD (23.05%) 1094-1104 cal AD (8.04%) 1123-1158 cal AD (29.75%)	1037-1162 cal AD (95.45%)
PLD-42487	-25.08±0.24	909±20	910±20	1049-1081 cal AD (37.76%) 1134-1137 cal AD (2.15%) 1152-1177 cal AD (23.64%) 1193-1201 cal AD (4.71%)	1044-1086 cal AD (40.85%) 1092-1106 cal AD (4.55%) 1118-1183 cal AD (38.37%) 1184-1213 cal AD (11.67%)
PLD-42488	-25.03±0.19	926±20	925±20	1047-1083 cal AD (36.76%) 1095-1103 cal AD (5.95%) 1125-1141 cal AD (13.51%) 1147-1161 cal AD (12.05%)	1036-1168 cal AD (94.91%) 1171-1174 cal AD (0.54%)
PLD-42489	-24.49±0.21	925±20	925±20	1047-1083 cal AD (37.58%) 1095-1102 cal AD (5.54%) 1125-1141 cal AD (13.00%) 1148-1161 cal AD (12.15%)	1037-1168 cal AD (94.85%) 1171-1174 cal AD (0.60%)

暦年代を示した。PLD-42487は、1044-1086 cal AD (40.85%)、1092-1106 cal AD (4.55%)、1118-1183 cal AD (38.37%)、1184-1213 cal AD (11.67%)の暦年代であった。これは11世紀中頃～13世紀前半で、平安時代中期～鎌倉時代の暦年代である。

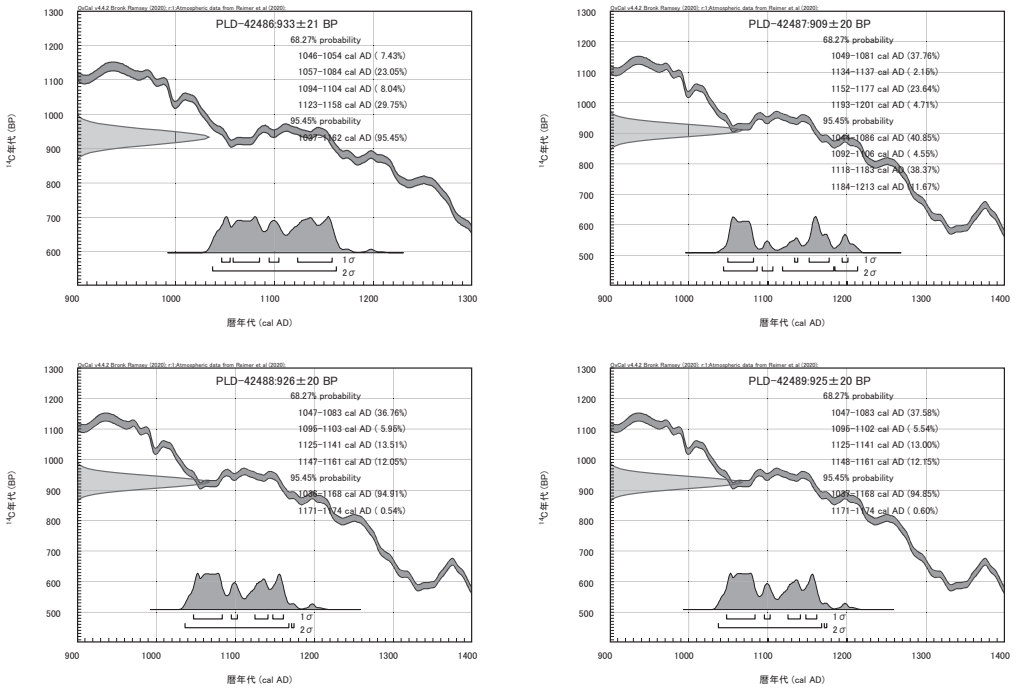
木材は、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも最終形成年輪を有しており、測定結果は木材の伐採時期を示している。今回の年代測定で得られた暦年代、調査所見による推定時期である平安時代に対して整合的であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)



第74図　暦年較正結果

Ⅵ　調査のまとめ

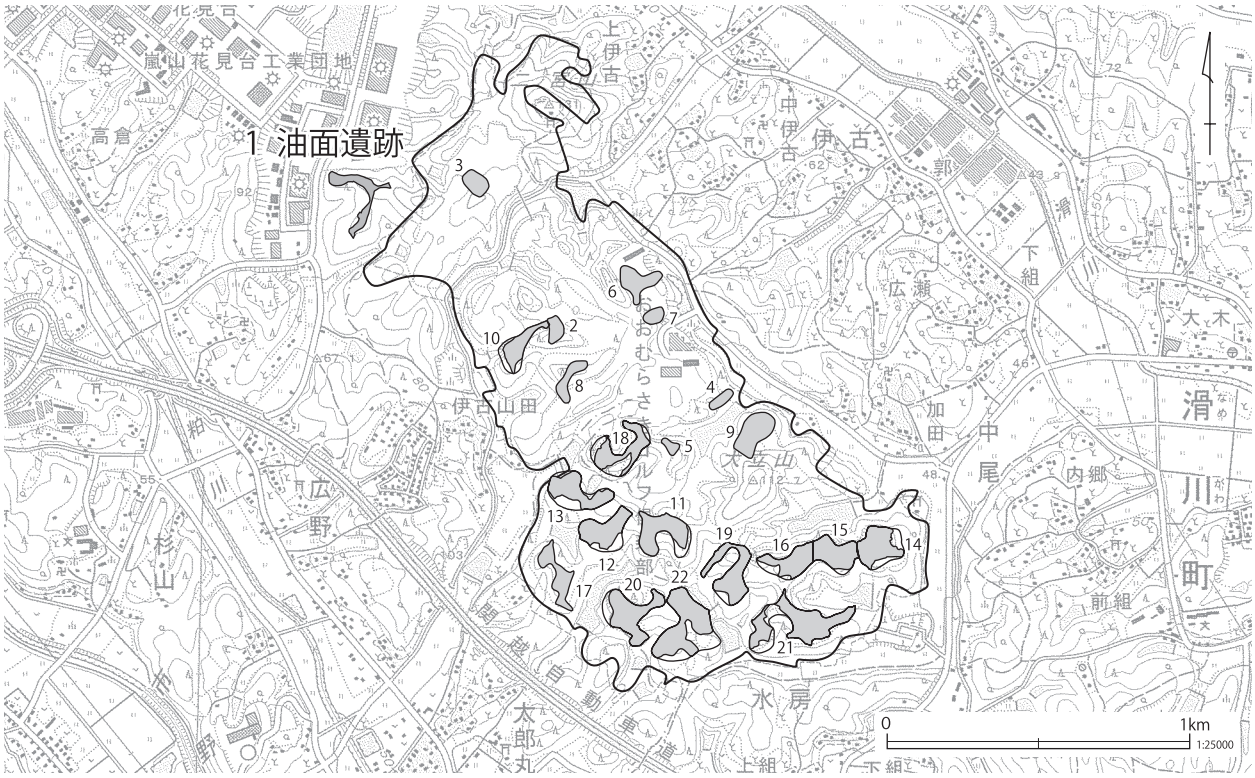
油面遺跡における今回の調査では、縄文時代の住居跡４軒、集石土壙１基、土壙８基、焼土跡25基、遺物包含層２箇所、古代の住居跡１軒、炭焼窯跡２基、土壙１基、中・近世の溝跡３条、道路跡７条、ピット224基が確認された。

遺跡の周辺は、工業団地やゴルフ場開発によって広範囲が調査されたことで既に多くの遺跡の存在が知られる地域である。そこで本項では、特に尾根沿いにつながる滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群（第75図２～22）について併せて概観しながら、本遺跡の調査成果について時代ごとに確認していきたい。

１　縄文時代の様相

Ａ区西尾根端部の平場に位置する第３、４号住居跡は、斜面方向への土砂の流出による削平が進んでおり掘り込みの一部は失われていたが、出土遺物から縄文時代前期後半諸磯ｂ式期に属するものと考えられる。また、Ｂ区南尾根に位置する第２、５号住居跡は、掘り込みが完全に失われていた。一部が重複するが新旧関係は不明である。しかし、住居跡の西側斜面には、諸磯ｂ式期を中心とする遺物包含層が形成されており、第２、５号住居跡も諸磯ｂ式期であると考えられる。ここで、西側の谷を隔てて立地する遺跡に目を転じてみると、尺尻遺跡（第２図93）からは諸磯ｂ式期の住居跡１軒が、尺尻北遺跡（第２図92）からは諸磯ｃ式期の住居跡１軒が確認されており、当該地域には、諸磯式期の住居跡が点在する様子が認められる。

住居跡以外の遺構については、出土遺物を伴うものが少なく時期決定が困難であったが、第13号土壙や、第19号土壙からは諸磯ｂ式期の土器片がわずかながら出土している。このように、遺構出



2　柳沢Ａ遺跡	5　二ツ沼西遺跡	8　山田谷遺跡	11　細沼北遺跡	14　天裏遺跡	17　酉亥遺跡	20　年中坂Ｂ遺跡
3　大平遺跡	6　台田嶺Ａ遺跡	9　二ツ沼南遺跡	12　申酉遺跡	15　用土庵Ａ遺跡	18　中尾遺跡	21　蟹沢遺跡
4　二ツ沼北遺跡	7　台田嶺Ｂ遺跡	10　柳沢Ｂ遺跡	13　亥遺跡	16　用土庵Ｂ遺跡	19　細沼東遺跡	22　年中坂Ａ遺跡

第75図　油面遺跡と周辺の遺跡の立地

土の土器の多くは諸磯式期に属する。一方で、Ａ区、Ｂ区に形成されていた遺物包含層では、主体となる遺物は縄文時代前期諸磯式期のものであるが、Ａ区遺物包含層では、早期から中期まで、Ｂ区遺物包含層では、早期から後期初頭にかけての土器片が出土している。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群中の複数の遺跡で集石土壙や、調査区内からは多時期にわたる土器片が多量に出土し、本遺跡と似た様相を呈する。

今回の調査の成果を合わせると、この地域では縄文時代前期においては、１、２軒の小さな集落が、時期をずらしながらも尾根ごとに点在し、前期末葉まで継続的に集落が形成されている点が特徴といえよう。

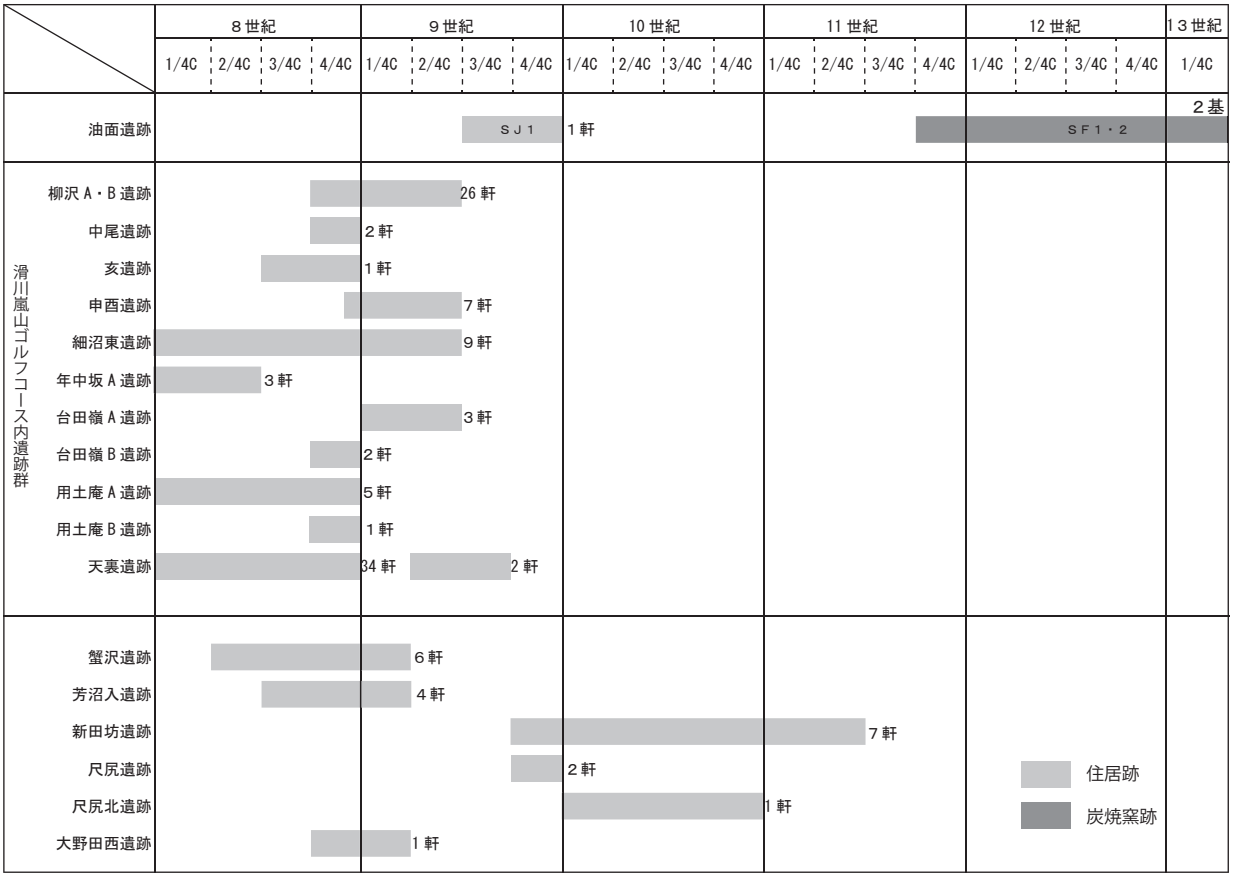
さらに本調査区では、遺構の存在は確認されなかったが、出土した遺物から、縄文時代早期から後期初頭にかけて、丘陵内での活動が行われていたものと推察される。

２　古代の様相

確認された古代の遺構は少なく、分布状況も調査区内に点在する様相を呈する。

まず、Ｂ区南尾根の端部に位置する第１号住居跡であるが、コの字状口縁をもつ土師器甕の出土などから、時期は９世紀後半に属するものと考えられる。紡錘車が２点、袋状鉄斧１点が出土し、丘陵内の資源を利用し生産活動を行っていた者の住まい、あるいは一時的な作業場としての性格が考えられる。

次に、２基検出された炭焼窯跡のうち、第１号炭焼窯跡は、Ｂ区南尾根の西側斜面に位置する。出土した炭化材の自然科学分析によって、時期は11世紀中葉から13世紀初頭であり、炭化材の樹種は、軟質の木材であるクヌギ節であることが解った。対して、Ａ区西尾根に位置する第２号炭焼窯跡は、第１号炭焼窯よりも規模が大きく、また、底面には３条の溝状施設が付帯し、第１号炭



第76図　油面遺跡と周辺の遺跡の住居跡等時期分布

焼窯跡との形態の違いは明瞭である。出土した炭化材の自然科学分析によれば、時期は11世紀後半から12世紀後半、および11世紀中頃から13世紀前半であり、炭化材の樹種は、いずれも硬質の木材であるコナラ属アカガシ亜属であることが解った。２基の炭焼窯跡は、時期的に近いものの、検出された樹種が異なる点が留意される。

最後に、油面遺跡が立地する丘陵における古代の土地利用状況について確認してみたい。本調査区内の遺構では、まず９世紀後半に住居跡１軒が作られ、少なくとも11世紀末頃までの断絶の後炭焼窯が築造されている。一方で、第76図に示した周辺遺跡の住居跡の時期と比較すると、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では、８世紀頃より住居が造られ始めることがわかる。最も多くの住居跡が確認された天裏遺跡（第75図14）では、８世紀代には34軒の住居跡が造られるが、９世紀にはいると数を大きく減じていることがわかる。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群と本調査区の第１号住居跡をあわせてみてみると、丘陵内に住居跡の進出が開始されるのは８世紀頃からであり、第１号住居跡はその活動の終焉時期に位置付けられよう。

その後、第１・２号炭焼窯跡が築造される11世紀末頃までは、本丘陵内に遺構は認められないが、谷を隔てた隣の丘陵に立地する新田坊遺跡（第３図94）には、９世紀末から11世紀中葉まで住居跡が確認される。これらの住居跡のうち４軒で住居跡内に炉跡状の浅い掘り込みが確認され、大量の焼土や鉄製品が出土するなど、工房的な特徴が指摘されている。

以上のことから、本丘陵周辺の土地利用は、８世紀頃より始まり、９世紀末には一旦収束に向う。その後、工房的性格を有する新田坊遺跡の住居跡や炭焼窯の築造など、丘陵への関り方を変えながら、13世紀初頭頃まで当該地域の土地利用が継続したものと推察される。

３　中・近世の様相

中世の遺構や遺物は、本調査では確認されていないが、戦国時代には周辺に杉山城跡や越畑城跡が立地し、防衛において重要な地域であったことが推察される。

近世の遺構は、溝跡と道路跡が確認されており、第１・２号溝跡と第１号道路跡は一連のものと考えられる。道路跡は、尾根沿いに確認されている。年中坂A遺跡（第75図22）においても、時期は不明ながら類似する道路状遺構が２条確認されている。

調査区内からは、上記の遺構と併せて、近世・近代の陶磁器片や火打石がわずかに出土しており、丘陵内で人々が活動した痕跡が残されている。

引用･参考文献

笠原仁史 2018「群馬県の古代製炭遺構－穴窯タイプを中心とした集成－」『地域考古学』３号　地域考古学研究会

埼玉県教育委員会 1979『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 20 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 119 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 138 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002『谷ツ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 282 集

滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会 1997『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』

樋口清之 1993『日本木炭史』講談社学術文庫 1076　講談社

水口由紀子 2002「発掘された埼玉県内の炭焼窯－古代の事例を中心にして－」『研究紀要』第 24 号　埼玉県立歴史資料館

渡辺　一 2002「古代の丘陵開発とその世界－『続風土記』の世界－」『あらかわ』第５号　あらかわ考古談話会